

**2020年度
大学院国際文化研究科
講義概要（シラバス）**



法政大学

科目一覽

【発行日：2020/5/1】最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

| | | |
|---------|---|----|
| 【X2001】 | 国際文化研究A [廣松 勲、田島 樹里奈] 春学期授業/Spring | 1 |
| 【X2002】 | 国際文化研究B [重定 如彦、田島 樹里奈] 秋学期授業/Fall | 2 |
| 【X2003】 | 国際文化共同研究A [輿石 哲哉、田島 樹里奈] 春学期授業/Spring | 3 |
| 【X2004】 | 国際文化共同研究B [曾 士才、市岡 卓] 秋学期授業/Fall | 4 |
| 【X2005】 | 多言語相関論ⅠA [粟飯原 文子] 春学期授業/Spring | 5 |
| 【X2006】 | 多言語相関論ⅠB [粟飯原 文子] 秋学期授業/Fall | 6 |
| 【X2007】 | 多言語相関論ⅡA [リービ 英雄] 春学期授業/Spring | 7 |
| 【X2008】 | 多言語相関論ⅡB [リービ 英雄] 秋学期授業/Fall | 8 |
| 【X2009】 | 多言語相関論ⅢA [輿石 哲哉] 春学期授業/Spring | 8 |
| 【X2010】 | 多言語相関論ⅢB [輿石 哲哉] 秋学期授業/Fall | 9 |
| 【X2011】 | 多文化相関論ⅠA [岩川 ありさ] 春学期授業/Spring | 10 |
| 【X2012】 | 多文化相関論ⅠB [岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall | 12 |
| 【X2013】 | 多文化相関論ⅡA [熊田 泰章] 春学期授業/Spring | 13 |
| 【X2014】 | 多文化相関論ⅡB [熊田 泰章] 秋学期授業/Fall | 14 |
| 【X2015】 | 多文化相関論Ⅲ [佐々木 一恵] 春学期授業/Spring | 15 |
| 【X2016】 | 多文化芸術論Ⅰ [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring | 16 |
| 【X2017】 | 多文化芸術論Ⅱ [廣松 勲] 秋学期授業/Fall | 17 |
| 【X2018】 | ナショナリズム/エスニシティ論A [石森 大知] 春学期授業/Spring | 18 |
| 【X2019】 | ナショナリズム/エスニシティ論B [石森 大知] 秋学期授業/Fall | 19 |
| 【X2020】 | マイノリティ社会論A [曾 士才] 春学期授業/Spring | 20 |
| 【X2021】 | マイノリティ社会論B [曾 士才] 秋学期授業/Fall | 21 |
| 【X2022】 | ジェンダー論 [佐々木 一恵] 秋学期授業/Fall | 22 |
| 【X2023】 | 多言語社会論A [大中 一彌] 春学期授業/Spring | 24 |
| 【X2024】 | 多言語社会論B [大中 一彌] 秋学期授業/Fall | 25 |
| 【X2025】 | 多民族共生論ⅠA [松本 悟] 春学期授業/Spring | 26 |
| 【X2026】 | 多民族共生論ⅠB [松本 悟] 秋学期授業/Fall | 27 |
| 【X2027】 | 国際ジャーナリズム論 [神林 毅彦] 秋学期授業/Fall | 28 |
| 【X2028】 | 国際文化交流論ⅡA [木村 真] 秋学期授業/Fall | 29 |
| 【X2029】 | 比較宗教文明論 [白杵 陽] 秋学期授業/Fall | 30 |
| 【X2030】 | 多文化情報空間論ⅠA [森村 修] 春学期授業/Spring | 31 |
| 【X2031】 | 多文化情報空間論ⅠB [森村 修] 秋学期授業/Fall | 32 |
| 【X2032】 | 多文化情報メディア論ⅠA [大嶋 良明] 春学期授業/Spring | 34 |
| 【X2033】 | 多文化情報メディア論ⅠB [大嶋 良明] 秋学期授業/Fall | 35 |
| 【X2034】 | 多文化情報メディア論Ⅱ [重定 如彦] 秋学期授業/Fall | 36 |
| 【X2035】 | Thesis Writing A [ジェイソン・ポール・スミス] 春学期授業/Spring | 37 |
| 【X2036】 | Thesis Writing B [ジェイソン・ポール・スミス] 秋学期授業/Fall | 38 |
| 【X2037】 | Oral Presentation [マーク・フィールド] 秋学期授業/Fall | 39 |
| 【X2038】 | 国際協力論 [松本 悟] 春学期授業/Spring | 40 |
| 【X2039】 | 国際人権論 [藤岡 美恵子] 春学期授業/Spring | 41 |
| 【X2040】 | 多文化情報ネットワーク論A [和泉 順子] 春学期授業/Spring | 43 |
| 【X2041】 | 多文化情報ネットワーク論B [和泉 順子] 秋学期授業/Fall | 44 |
| 【X2042】 | 国際文化研究日本語論文演習A [浅利 文子] 春学期授業/Spring | 45 |
| 【X2043】 | 国際文化研究日本語論文演習B [浅利 文子] 秋学期授業/Fall | 46 |
| 【X2044】 | 国際文化研究日本語論文演習C [浅利 文子] 春学期授業/Spring | 47 |
| 【X2051】 | 修士論文演習A [各専任指導教員] 春学期授業/Spring | 48 |
| 【X2052】 | 修士論文演習B [各専任指導教員] 秋学期授業/Fall | 49 |
| 【X2053】 | 修士論文演習A [粟飯原 文子] 春学期授業/Spring | 50 |
| 【X2054】 | 修士論文演習B [粟飯原 文子] 秋学期授業/Fall | 51 |
| 【X2055】 | 修士論文演習A [廣松 勲] 春学期授業/Spring | 52 |
| 【X2056】 | 修士論文演習B [廣松 勲] 秋学期授業/Fall | 53 |
| 【X2057】 | 修士論文演習A [岩川 ありさ] 春学期授業/Spring | 54 |
| 【X2058】 | 修士論文演習B [岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall | 55 |
| 【X2059】 | 修士論文演習A [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring | 56 |

| | | |
|---------|---|----|
| 【X2060】 | 修士論文演習 B [佐藤 千登勢] 秋学期授業/Fall | 57 |
| 【X2061】 | 修士論文演習 A [曾 士才] 春学期授業/Spring | 58 |
| 【X2062】 | 修士論文演習 B [曾 士才] 秋学期授業/Fall | 59 |
| 【X2063】 | 修士論文演習 A [高柳 俊男] 春学期授業/Spring | 60 |
| 【X2064】 | 修士論文演習 B [高柳 俊男] 秋学期授業/Fall | 61 |
| 【X2065】 | 修士論文演習 A [佐々木 一恵] 春学期授業/Spring | 62 |
| 【X2066】 | 修士論文演習 B [佐々木 一恵] 秋学期授業/Fall | 63 |
| 【X2101】 | 博士論文演習 I A [各専任指導教員] 春学期授業/Spring | 64 |
| 【X2102】 | 博士論文演習 I B [各専任指導教員] 秋学期授業/Fall | 64 |
| 【X2103】 | 博士論文演習 II A [各専任指導教員] 春学期授業/Spring | 65 |
| 【X2104】 | 博士論文演習 II B [各専任指導教員] 秋学期授業/Fall | 66 |
| 【X2105】 | 博士論文演習 III A [各専任指導教員] 春学期授業/Spring | 67 |
| 【X2106】 | 博士論文演習 III B [各専任指導教員] 秋学期授業/Fall | 68 |
| 【X2107】 | 博士論文演習 I A [佐々木 一恵] 春学期授業/Spring | 68 |
| 【X2108】 | 博士論文演習 I B [佐々木 一恵] 秋学期授業/Fall | 69 |
| 【X2121】 | 博士ワークショップ I A [興石 哲哉、岩川 ありさ] 春学期授業/Spring | 69 |
| 【X2122】 | 博士ワークショップ I B [興石 哲哉、岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall | 70 |
| 【X2123】 | 博士ワークショップ II A [興石 哲哉、岩川 ありさ] 春学期授業/Spring | 71 |
| 【X2124】 | 博士ワークショップ II B [興石 哲哉、岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall | 72 |
| 【X2125】 | 博士ワークショップ III A [興石 哲哉、岩川 ありさ] 春学期授業/Spring | 73 |
| 【X2126】 | 博士ワークショップ III B [興石 哲哉、岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall | 74 |

OTR500G1 - 001

国際文化研究 A

廣松 勲、田島 樹里奈

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業開始日は、4月22日（水）となります。】

本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコソボの専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」においては、必読文献を読み連ねる。加えて、本研究科において学位論文執筆に必要となる研究方法・手続きなどについても学ぶ。

（*なお、扱われる「4つのテーマ」についてその順序が前後する場合には、初回授業などにおいてその旨を学生に通知する。）

【到達目標】

- (1) 国際文化研究の広がりとして可能性を入門のレベルで理解できること。
- (2) 国際文化研究を行うための方法論を理解できること。
- (3) 大学院で研究を遂行するための手続き・心得を理解できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。

- (1) 本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が1本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
- (2) この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士1年生のレベルを基準まで引き上げることも重要な点である。
- (3) 基礎文献は1本20～30ページ程度で、雑誌論文または書籍1～2章分を目途とし、日本語文献（適書がない場合、英語も可）とする。
- (4) 授業3回を1セットとして、基礎文献を1本ずつ取り上げ討議する。当該文献を選定した教員はディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方向による討議の活性化を図る。
- (5) 大学院における研究遂行のために、注意すべき手続き・心得などについても教示する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|--------------------|---|
| 1 | イントロダクション | ・自己紹介・関心紹介 ・文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。 |
| 2 | テーマ1：リサーチデザイン（第一回） | ・大学院における学習・研究について解説する。 ・受講学生たちのこれまでの研究状況を確認する。 |
| 3 | テーマ1：リサーチデザイン（第二回） | ・引き続き、大学院における学習・研究について解説する。 ・研究計画作成の重要性について意識を高める。 |
| 4 | 図書館ガイダンス（第三回） | ・図書館員による図書館ガイダンスを利用しつつ、法政大学図書館を介した文献調査のイロハを学ぶ。 |
| 5 | テーマ2：映像分析（第一回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。 |
| 6 | テーマ2：映像分析（第二回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。 |
| 7 | テーマ2：映像分析（第三回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。 |
| 8 | テーマ3：質的調査（第一回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。 |
| 9 | テーマ3：質的調査（第二回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。 |
| 10 | テーマ3：質的調査（第三回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。 |

| | | |
|----|----------------|---|
| 11 | テーマ4：言説分析（第一回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。 |
| 12 | テーマ4：言説分析（第二回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。 |
| 13 | テーマ4：言説分析（第三回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。 |
| 14 | 補足授業 まとめ | ・これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読みこむことは当然ながら、それ以上に自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

上記の方法によって選定された輪読文献を用いる。

【参考書】

各授業において必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

【当面の間、オンラインでの開講となったことに伴い、成績評価の方法と基準も変更することになります。具体的な方法と基準は、授業開始日以降に「学習支援システム」上で公開しますので、ご確認ください。

なお、以下の評価は、対面授業の実施を前提とした従来の評価方法であるので、ご注意ください。

4つのテーマごとの課題提出（60%）と授業中の討論への貢献（40%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

大学院における初年次教育に当たる授業でもあるため、できるだけ学生同士の議論ができるような雰囲気・授業の流れを実現できるように心がけたい。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出等は、主に授業支援システムを通して行う。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【Outline and objectives】

This course introduces the foundations of the intercultural communication studies according to three domains of interdisciplinary research: multicultural interrelations, multiethnic coexistence and multicultural informatics.

国際文化研究 B

重定 如彦、田島 樹里奈

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコソポの専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」においては、必読文献を読み連ねる。春学期の「国際文化研究 A」で修得した文献購読の力をさらに伸ばし、研究の方法論についての理解を深める。なお、今年度は本研究科で学位論文執筆に必要となる研究方法についても学ぶ。

【到達目標】

- (1) 国際文化研究の広がり及可能性を入門のレベルで理解できること
- (2) 国際文化研究を行うための方法論を理解できること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。

- (1) 本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が1本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
- (2) この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士1年生のレベルを基準まで引き上げることも重要な点である。
- (3) 基礎文献は1本20～30ページ程度で、雑誌論文または書籍1～2章分を目途とし、日本語文献（適書がない場合、英語も可）とする。
- (4) 授業3回を1セットとして、基礎文献を1本ずつ取り上げ討議する。当該文献を選定した教員はディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方向による討議の活性化を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|---|
| 1 | イントロダクション | 文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。 |
| 2 | テーマ1（第一回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。 |
| 3 | テーマ1（第二回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。 |
| 4 | テーマ1（第三回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。 |
| 5 | テーマ2（第一回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。 |
| 6 | テーマ2（第二回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。 |
| 7 | テーマ2（第三回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。 |
| 8 | テーマ3（第一回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。 |
| 9 | テーマ3（第二回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。 |
| 10 | テーマ3（第三回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。 |
| 11 | テーマ4（第一回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。 |
| 12 | テーマ4（第二回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。 |
| 13 | テーマ4（第三回） | 上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。 |

これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読み、自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

上記の方法によって選定する必読文献を用いる。

【参考書】

必要に応じて、指示する。

【成績評価の方法と基準】

4つのテーマごとの課題提出（60%）と授業中の討論への貢献（40%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

大学院の本授業では授業改善アンケートを実施していないので、特になし

【学生が準備すべき機器他】

課題提出等は授業支援システムを通して行う。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【Outline and objectives】

This course is the continuation of the spring semester, and is required for all the 1st year graduate students. It provides students with a general scope in three prominent research areas of this graduate school, and attempts to cultivate desirable views to encompass in such a broad cross-disciplinary environment.

OTR600G1 - 003

国際文化共同研究 A

興石 哲哉、田島 樹里奈

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科では、「多文化相関」、「多文化共生」、「多文化情報空間」の三領域が今日的な研究課題のスコープの中で深く連関することを学んでいきますが、本科目は、テーマ設定・リサーチ等を共有しながら、それが自らの研究で達成できているか確認していくことを目的とします。

受講者は、自らの研究発表を蓄積し、それを共有・公開することにより、問題意識や研究成果を外に発信して共有していく研究スタイルを身につけていきます。

その上で、上記の研究スタイルを身につけることを通じて、各自の研究の中に、本研究科の特色である「学際的志向の強みを編み込んでいく」ことを目指します。

【到達目標】

上記のテーマを念頭におきながら、受講者各自が修士論文を完成させることが第一の到達目標です。

その中で、特に、既存の学問の枠組みから飛び出して学際的なアプローチをしていくこと、「今、ここ、自分」といった切実な問題として、研究対象を捉えていくことを目指します。

また、「部屋にこもって、一人でしっかりと学級を極める」タイプの研究から踏み出し、自ら外に発信しつつ、他者の研究テーマについても一緒に考えていく中で、発信すること、研究を一緒にやっていくことの意義を実感していくことも、到達目標として掲げます。「共同研究」と取って替わっているのは、そういった意味があるのです。

さらに、プレゼンテーション（プレゼン、発表）には **delivery**（表出の仕方）のテクニクがありますし、論文には引用、注の付け方などの規則がありますが、そういうことについても再度確認しながら身につけていくことも、目標の一つです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

【4月16日加筆】春学期の少なくとも前半はオンラインでの開講となります。本授業の基本的な授業計画は変更せず進めますが、変更がある場合には、学習支援システムで提示いたします。本授業の開始日は、予定通り4月23日とし、この日までに具体的なオンラインの授業方法などを学習支援システムで提示します。

発表者（プレゼンター）は自分のプレゼンに関するレジュメ等を作成し、プレゼンを行い、出席者皆で討論していきます。プレゼンター以外の受講生は、疑問点・意見等を準備した上で、討論に参加します。

修士論文構想発表会を大きな節目と捉え、それに向けて進捗状況や、研究上の悩み・問題点などを受講者・教員間で共有していきます。

上記の節目を意識しながら、受講者の「書く行為による成果物」（例えば、報告書・論文など）についても、その内容、論の提示の仕方、形式などについて、随時指導していきます。

さらに毎回の授業の成果を共有・蓄積していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|------------|--|
| 第1回 | 導入 | <ul style="list-style-type: none"> 授業の進め方について周知する。 発表のスケジュールを立てる。 受講者の研究の進捗状況について報告してもらう。 |
| 第2回 | 論文の書き方について | <ul style="list-style-type: none"> 論文を書くことの意味と書き方について確認する。 |
| 第3回 | 発表とその指導 | <ul style="list-style-type: none"> 学生2名による発表 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。 |
| 第4回 | 発表とその指導 | <ul style="list-style-type: none"> 学生2名による発表 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。 |
| 第5回 | 発表とその指導 | <ul style="list-style-type: none"> 学生2名による発表 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。 |
| 第6回 | 発表とその指導 | <ul style="list-style-type: none"> 学生2名による発表 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。 |

第7回 発表とその指導

- 学生2名による発表
- 質疑応答。

第8回 前半総括・その他

- 発表の **delivery**、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
- 学生2名による発表
- 前半の発表の総括、いい点は何か見つけつつ、悩み・問題点等の共有と、その解決を図る。

第9回 発表とその指導

- 学生2名による発表
- 質疑応答。

第10回 発表とその指導

- 発表の **delivery**、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
- 学生2名による発表
- 質疑応答。

第11回 発表とその指導

- 発表の **delivery**、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
- 学生2名による発表
- 質疑応答。

第12回 発表とその指導

- 発表の **delivery**、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
- 学生2名による発表
- 質疑応答。

第13回 発表とその指導

- 発表の **delivery**、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
- 学生2名による発表
- 質疑応答。

第14回 総括

- 発表の **delivery**、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
- 授業の総括。いい点は何か見つけつつ、悩み・問題点等の共有と、それらの解決を図る。これ以降どう進めたらいいか考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 発表者は、各自レジュメ、プレゼン・スライド等を作成し、自らの発表を用意する。
- 発表回のみならず、常に修士論文の執筆を念頭に置き、意味をかみしめながら、「書くという行為」を積極的に行う。
- 発表者以外の受講者は、発表者の内容を可能な限り授業で検討できるよう、発表の内容に関する事柄を調べておく。さらに、発表者に対する質問・コメント等を用意しておく。
- 修士論文のよりよい完成を目指すために、本授業を積極的に活用する。
- 授業後に、指摘された点を見直したり、関連文献等を積極的に読んだりすることで、自分の視点を広げていく。

【テキスト（教科書）】

随時指定しますが、取りあえずは、以下のものを用意してください。

- 齊藤孝・西岡達裕(2005)、『**学術論文の技法**』[新訂版]、東京：日本エディタースクール出版部。（論文の基本的な形式等については、この本を中心に解説します。）
- 刈谷武彦(2002)、『**知的複眼思考法 誰でも持っている想像力のスイッチ**』、東京：講談社。（通読することで、読む・書くという行為の意味を再確認させてくれます。）

【参考書】

授業において適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

発表 70 %

討論への参加度・貢献度 30 %

上記はあくまで目安であり、担当者の協議により、必ずしも数値化に寄らない側面も考慮することがありますが、ご理解ください。

【学生の意見等からの気づき】

新規担当につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

辞書・パソコンなど。

【その他の重要事項】

- 受講者数により、発表の回数が増減することがあります。
- 修士課程2年目の春学期の科目であることを、特に意識して運営していきます。従って、修士論文の基本方針等を固めていくことを念頭に置き進めていきます。
- 発信していくことは、それだけでも意味があることです。それを意識し、同時に自分と異なった意見を受け入れていく姿勢を身につけます。
- 問題と同次元で「ベタに」（あるいは「ガチに」といってもいいかも）問題に取り組むだけでなく、より高い次元で、自分の研究の意味に括弧を付けてその意味を問いかけていく、「メタな」取り組みを取り入れる必要があります。是非、ある時点で立ち止まって考えてみてください。
- 「論文を書く」というのは、自分の研究してきたことに自分自身で「区切りをつける」仕事でもあります。そのことを意識し、必要な文献等をしっかり読み込み、執筆に向けての準備をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【カリキュラム上の位置づけ】

修士論文を完成される年度の前半に配当され、「国際文化研究 A, B」の延長線上で、かつ秋学期の「国際文化共同研究 B」の直前の科目です。この科目は修士1年目での研究の上に、いよいよ修士論文執筆を視野に入れる点で、極めて重要な意味を持ちます。

【Outline and objectives】

With respect to our Graduate School, it is of fundamental importance to study how the three fields —‘Intercultural Correlation Studies’, ‘Multiculturalism Studies’, and ‘Multicultural Information Space Studies’ — are intertwined with each other in the scope of today’s research enquiries. The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.

By the end of course, you should be able to acquire a research style, wherein you disseminate your own problem awareness and research results by accumulating, sharing and publicising your own research results.

Besides that, through this acquisition process, you are expected to go up to the stage where you can make this ‘strong point of our graduate school interwoven’ with your own research.

OTR600G1 - 004

国際文化共同研究 B

曾 士才、市岡 卓

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、修士論文の完成に向けて、受講する 2 年次の院生と教員で切磋琢磨する授業で、1 年次の「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」、2 年次春学期の「国際文化共同研究 A」の延長線上にある。

「共同研究」というと、通常は共通テーマのもと、複数人が分担しながらもに研究することを意味するが、この場合の「共同」には、修士論文作成という共通の課題に向けて、それぞれ知恵を出し合い、協力し合う意味が込められている。

研究科の 3 領域、すなわち「異文化相関関係」「多文化共生」「多文化情報空間」に目配りしつつ、自分の研究の位置づけや方法論などを他者のそれと比較し、再検証することを通して、より完成度の高い論文を目指す。

とりわけ、本研究科の特色である学際的思考を組み込んでいく。

【到達目標】

上記の「授業の概要と目的」を念頭に置き、受講者各自がそれに見合った修士論文を完成させることを、本科目の最大の到達目標とする。

一定の構成・分量と主張をもつ論文の執筆は、誰にとってもたやすいことではない。一人で悩んだり、壁にぶつかって立ち往生することなく、同様の課題に直面している他の受講生からアドバイスをもらい、この道の先輩である教員の体験を聴くことで、困難な作業を順調に進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文の進捗状況に関する受講者の発表を中心に進めていく。発表者はレジュメもしくはパワーポイントを作成して発表を行い、他の出席者からの疑問・意見・助言等をまじえ、全員で討論していく。

修士論文中間発表会、修士論文の提出を二つの大きな節目と捉え、それに向けての進捗状況や研究上の悩み・問題点を受講者・教員間で共有していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|---|--------------|---|
| 1 | オリエンテーション | 自分の研究テーマを中心とした自己紹介、本授業の進め方とスケジュール決定。 |
| 2 | 修士論文中間発表 (1) | 発表者 1、2、3 による 1 回目の発表。7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。 |
| 3 | 修士論文中間発表 (2) | 発表者 4、5、6 による 1 回目の発表。7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。 |
| 4 | 修士論文中間発表 (3) | 発表者 7、8、9 による 1 回目の発表。7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。 |
| 5 | 修士論文中間発表 (4) | 発表者 10、11、12 による 1 回目の発表。7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。 |
| 6 | 修士論文中間発表 (5) | 発表者 13 による 1 回目の発表および発表者 1 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。 |
| 7 | 修士論文中間発表 (6) | 発表者 2、3 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。 |
| 8 | 修士論文中間発表 (7) | 発表者 4、5 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。 |

| | | |
|----|---------------|--|
| 9 | 修士論文中間発表 (8) | 発表者 6、7 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。 |
| 10 | 修士論文中間発表 (9) | 発表者 8、9 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。 |
| 11 | 修士論文中間発表 (10) | 発表者 10、11 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。 |
| 12 | 修士論文中間発表 (11) | 発表者 12、13 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。 |
| 13 | 論文提出前ディスカッション | 修士論文提出を間近に控え、各自が直面している問題や課題について議論し、その解決策等を検討する。 |
| 14 | まとめ | 提出した修士論文を振り返り、反省会を行う。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- (1) 自分の発表時に与えられた質問・批判・助言などを参考にし、常に自分の論文の質を高めるよう努めること。
- (2) 他者の発表時に得られたヒントや着想を、常に自らの論文に活かし、質の向上をはかること。
- (3) 自分の研究テーマを常に頭の片隅におき、アイデアを遊ばせながら日常生活を送ること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

自分の発表時の内容 40%、他者の発表時の貢献度 30%、平常点 30% を目安に、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

指導教員と連絡を密に取り、できるだけ早い時期から執筆に取りかかるよう指導する。

【学生が準備すべき機器他】

パワーポイントなどを使って報告する場合は、パソコンを持参し、プロジェクターの準備をしておくこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to enhance participants' knowledge and methodologies in three key areas of study - intercultural correlation studies, multiculturalism studies, and multicultural information space studies.

At the end of the course, participants are expected to improve their interdisciplinary thinking and to write up the Master's thesis/the Research paper.

LIN500G1 - 101

多言語相関論 I A

栗飯原 文子

サブタイトル：旧植民地地域の文学・文化

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主にアジア・アフリカ・ラテンアメリカの（出身の作家による）さまざまな文学作品を精読・分析することで、文学作品が時代、社会、世界の状況にどのように応えているのかを考え、地域と言語を横断した世界文学への視座を身につける。また適宜テキストにあわせて研究論文や批評の抜粋を読み、分析の手がかりにする。

【到達目標】

さまざまな言語で書かれた短篇・中篇小説（主に日本語訳）を精読し、歴史的・社会的文脈と関連づけて読み解く力を養うと同時に、各作品の主題、手法、表現などに注目しながら、文学テキストの分析・批評の方法を身につける。英語で書かれた作品はなるべく原書で読み、英語の読解力を伸ばすことも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

指名された担当者が問題提起を含む報告をおこない、全体で討論する。その際、報告者はレジメを作成して、担当箇所をまとめ、議論のポイントを整理しておくこと。発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨むようにする。授業はオンラインでの開講となる。それにとまなう各回の授業計画の変更や授業方法については、学習支援システムで提示する。本授業の開始日は 4 月 23 日（木）。この日までに具体的な進め方を学習支援システムで案内するので確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|--------------------|----------------------------------|
| 第 1 回 | イントロダクション | 授業の進め方について説明。以下、各回にとりあげる作家の名を記す。 |
| 第 2 回 | 金石範① | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 3 回 | 金石範② | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 4 回 | 金達寿① | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 5 回 | 金達寿② | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 6 回 | 李良枝① | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 7 回 | 李良枝② | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 8 回 | 目取真俊① | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 9 回 | 目取真俊② | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 10 回 | 魯迅① | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 11 回 | 魯迅② | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 12 回 | モハッシュェタ・デビ① | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 13 回 | モハッシュェタ・デビ② | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第 14 回 | サルマン・ラシュデイ、春学期のまとめ | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業で扱う文献以外にも、その他の参考文献を積極的に読んでいくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業時に指示する。

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

オンライン授業に変更となるため、成績評価の方法と基準は次の通りに変更する。課題の提出（50 %）と授業への貢献（50 %）を総合して評価。

【学生の意見等からの気づき】

さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
受講生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】

アフリカ文学、アフリカ地域研究
<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html>

【Outline and objectives】

This course aims at an in-depth comparative study of texts and authors from literatures of the world mostly in translation, including Asia, Africa, Middle East, Latin America and the Caribbean.

LIN500G1 - 102

多言語相関論 I B

栗飯原 文子

サブタイトル：旧植民地地域の文学・文化

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主にアジア・アフリカ・ラテンアメリカの（出身の作家による）さまざまな文学作品を精読・分析することで、文学作品が時代、社会、世界の状況にどのように対応しているのかを考え、地域と言語を横断した世界文学への視座を身につける。また適宜テキストにあわせて研究論文や批評の抜粋を読み、分析の手がかりにする。

【到達目標】

さまざまな言語で書かれた短篇・中篇小説（主に日本語訳）を精読し、歴史的・社会的文脈と関連づけて読み解く力を養うと同時に、各作品の主題、手法、表現などに注目しながら、文学テキストの分析・批評の方法を身につける。英語で書かれた作品はなるべく原書で読み、英語の読解力を伸ばすことも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

指名された担当者が問題提起を含む報告をおこない、全体で討論する。その際、報告者はレジメを作成して、担当箇所をまとめ、議論のポイントを整理しておくこと。発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨むようにする。
「授業計画」の内容はあくまで予定であり、受講者の理解や関心にもとづいて、適宜変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------------|----------------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の進め方について説明。以下、各回にとりあげる作家の名を記す。 |
| 第2回 | サルマン・ラシュディ | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第3回 | クリシヤン・チャンダル | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第4回 | ガッサン・カナファー ニー① | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第5回 | ガッサン・カナファー ニー② | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第6回 | ガブリエル・ガルシア＝ マルケス① | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第7回 | ガブリエル・ガルシア＝ マルケス② | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第8回 | エドウィーヅ・ダンテ カ① | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第9回 | エドウィーヅ・ダンテ カ② | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第10回 | ベティーナ・ガッパ | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第11回 | ベシー・ヘッド | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第12回 | ナディン・ゴードイマ | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第13回 | チヌア・アチェベ | 事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 |
| 第14回 | 秋学期のまとめ | 秋学期で学んだことのまとめをおこなう。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業で扱う文献以外にも、その他の参考文献を積極的に読んでいくこと。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業時に指示する。

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表（60%）、授業への貢献（40%）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
受講生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】

アフリカ文学、アフリカ地域研究
<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html>

【Outline and objectives】

This course aims at an in-depth comparative study of texts and authors from literatures of the world mostly in translation, including Asia, Africa, Middle East, Latin America and the Caribbean.

LIN500G1 - 103

多言語相関論Ⅱ A

リービ 英雄

サブタイトル：越境時代のクロス・リーディング

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多言語表現の分析能力と批評能力

【到達目標】

日本語文学および外国語文学における文化相関への理解を深め、理念のみならず、表現の最先端を形成している固有のテキストに対する分析の手法を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP4」の達成のために重要であり、「DP3」の達成のために望ましい

【授業の進め方と方法】

言語表現特有の領域における国際理解を深めるために、他言語表現との相関を視野に入れながら、日本語文学のテキストをアメリカのニュー・クリティシズム等にもとづいた厳密な作品分析の手法によって考察する。たとえば大江健三郎、中上健次、在日朝鮮・韓国文学、1990年代以降の越境作家群などの諸作品の「世界性」を分析する。ジェイムズ・ボールドウィンやトニー・モリスンをはじめとするアメリカのマイノリティ文学、英語と日本語の翻訳問題、英語文学における「ポストコロニアル」の出現によって変化した「西洋とアジア」の相関などをたどる。書きことばとしての千三百年の歴史を持つ日本語が、複数の他言語との比較が当然な時代に、どのように書かれ、どのように読まれるのか、読解を通して、言語文化としてのその将来の姿を模索する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|------------------------------|
| 1 | イントロダクション | 講義 |
| 2 | 越境と文学① | 越境と文学 (バイリンガル作家たち等) 1 |
| 3 | 越境と文学② | 越境と文学 2 |
| 4 | 越境と文学③ | 越境と文学 3 |
| 5 | マイノリティ文学① | マイノリティ文学 (ボールドウィン黒人文学等) 1 |
| 6 | マイノリティ文学② | マイノリティ文学 2 |
| 7 | マイノリティ文学③ | マイノリティ文学 3 |
| 8 | 日本文学と世界文学① | 日本文学と世界文学 (安部公房等) 1 |
| 9 | 日本文学と世界文学② | 日本文学と世界文学 2 |
| 10 | 日本文学と世界文学③ | 日本文学と世界文学 3 |
| 11 | 日本文学と世界文学④ | 日本文学と世界文学 4 |
| 12 | 文学の国際化① | 文学の国際化 (翻訳と他言語化) 1 |
| 13 | 文学の国際化② | 文学の国際化 2 |
| 14 | コンクリュージョン | 講義 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教員が勧める文学のテキストを読む。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

内容に関連する日本と外国の小説と批評を教場で呈示。

【参考書】

特に指定はない

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：発表 50 %、平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

授業はすごく好評だと感じます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本文学、世界文学
 <研究テーマ>マイノリティおよび越境文学のテキスト分析
 <主要研究業績>
 『星条旗の開けない部屋』講談社文芸文庫（2005 年）
 『千々にくだけて』講談社（2005 年）
 『越境の声』（岩波書店、2007 年）

【Outline and objectives】

Through detailed textual readings and interpretations, students will explore the theme of Japanese as a language of literary expression from an international perspective, one that includes comparisons with both Western and Asian texts.

LIN500G1 - 104

多言語相関論ⅡB

リービ 英雄

サブタイトル：世界の中の日本語文学

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多言語表現の分析能力と批評能力

【到達目標】

「越境」や「エクソフォニー」等、文学における文化、言語相関への理解をさらに深く、批評の様々な枠の中で固有のテキストに対する分析の手法を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP4」の達成のために重要であり、「DP3」の達成のために望ましい

【授業の進め方と方法】

言語表現特有の領域における国際理解を深めるために、他言語表現との相関を視野に入れながら、日本語文学のテキストをアメリカのニュー・クリティシズム等にもとづいた厳密な作品分析の手法によって考察する。たとえば大江健三郎、中上健次、在日朝鮮・韓国文学、1990年代以降の越境作家群などの諸作品の「世界性」を分析する。ジェームズ・ボールドウィンやトニー・モリスをはじめとするアメリカのマイノリティ文学、英語と日本語の翻訳問題、英語文学における「ポストコロニアル」の出現によって変化した「西洋とアジア」の相関などをたどる。書きことばとしての千三百年の歴史を持つ日本語が、複数の他言語との比較が当然な時代に、どのように書かれ、どのように読まれるのか、読解を通して、言語文化としてのその将来の姿を模索する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|------------------------------|
| 1 | イントロダクション | 講義 |
| 2 | 越境と文学① | 越境と文学 (多和田葉子等) 1 |
| 3 | 越境と文学② | 越境と文学 2 |
| 4 | 越境と文学③ | 越境と文学 3 |
| 5 | マイノリティ文学① | マイノリティ文学 (在日の文学等) 1 |
| 6 | マイノリティ文学② | マイノリティ文学 2 |
| 7 | マイノリティ文学③ | マイノリティ文学 3 |
| 8 | 日本文学と世界文学① | 日本文学と世界文学 (大江健三郎、中上健次等) 1 |
| 9 | 日本文学と世界文学② | 日本文学と世界文学 2 |
| 10 | 日本文学と世界文学③ | 日本文学と世界文学 3 |
| 11 | 日本文学と世界文学④ | 日本文学と世界文学 4 |
| 12 | 文学の国際化① | 文学の国際化 (ポストコロニアル文学等) 1 |
| 13 | 文学の国際化② | 文学の国際化 2 |
| 14 | コンクリュージョン | 講義 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教員が勧める文学のテキストを読む。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

内容に関連する日本と外国の小説と批評を教場で呈示。

【参考書】

特に指定はない

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：発表 50 %、平常点 50 %

【学生の意見等からの気づき】

授業はすごく好評だと感じます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本文学、世界文学
<研究テーマ> マイノリティおよび越境文学のテキスト分析
<主要研究業績>

『星条旗の聞こえない部屋』講談社文芸文庫（2005 年）

『千々にくだけて』講談社（2005 年）

『越境の声』（岩波書店、2007 年）

【Outline and objectives】

A detailed consideration of Japanese language literature through comparative textual analysis. Problems of translation will be explored, with the objective of achieving a realistic comprehension of the possibilities of literary expression in Japanese specific to the contemporary age.

LIN500G1 - 105

多言語相関論ⅢA

興石 哲哉

サブタイトル：言語の研究方法を学ぶ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが、言語の研究法についてはテクニカルなところがあり、なかなか理解が難しいのが現実です。本授業では、それを克服すべく、基本的な文献を読みながら言語研究の基本である音声研究を学んでいきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

【4月16日加筆】春学期の少なくとも前半はオンラインでの開講となります。各界の授業計画は変更はありませんが、もし変更がある場合には、学習支援システムで提示します。本授業の開始日は4月22日とし、この日までに具体的なオンライン授業の方法などを、学習支援システムで提示します。

授業は演習形式で行います。授業では学生にどんどん意味を問いかけていき、教材を日本語にしていってもらいます。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
- 2) 分からない場合、積極的に質問したり、意見を出し合うこと、

の2点です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

| 春学期 | | |
|-----|--|--|
| 回 | テーマ | 内容 |
| 1 | Introduction | 本科目の概略、学習の仕方等についての説明。その上で、教材を読み始める。発話に用いられるところの器官について学ぶ。 |
| 2 | Organs of Speech | 言語音、母音の分類について学ぶ。 |
| 3 | Speech Sounds, Classification of Vowels | 母音の分類について学び、様々な言語の母音を概観する。 |
| 4 | Classification of Vowels | 母音の分類についてさらに見る。 |
| 5 | Further Classification of Vowels | 母音の分類について学ぶ。 |
| 6 | Classification of Consonants | 子音の分類について学ぶ。 |
| 7 | Classification of Consonants | 子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。 |
| 8 | Classification of Consonants | 子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。 |
| 9 | Classification of Consonants, Further Analysis of Consonants | 子音の発音について見た後、副次的調音について学ぶ。 |
| 10 | Combination of Sounds | 音の連続について学ぶ。 |
| 11 | Syllables | 言語の音声記述で重要な概念である音節という概念について学ぶ。 |
| 12 | Quantity, Accent | 音長、アクセントについてその概略を学ぶ。 |
| 13 | Phonemes | 言語の研究で非常に重要な概念である音素について、学ぶ。 |
| 14 | Phonemes | 言語の研究で非常に重要な概念である音素について、引き続き学ぶ。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、必ず内容について質問しますので、必ず読んできてください。さらに関与する概念で新しいものについては、先にご自身で調べておくと、非常に理解が深まります。

まず、文献を読むべく、英語に習熟することが非常に重要です。常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで、発表の準備を怠りなくすること。他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること、の2点が大切です。

【テキスト（教科書）】

Takebayashi, Shigeru (1976). *A Primer of Phonetics*. Tokyo: Iwasaki Linguistic Circle.[入手困難なため、授業支援システム等により配布します。]

【参考書】

以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。
 ・高橋作太郎ら（編集）『リーダーズ英和辞典』第三版、東京：研究社。
 学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むには必須です。
 ・Janssen, S. (ed.) (2019). *The World Almanac and Book of Facts 2020*.
 New York: The World Almanac Books.
 ・Philip's Maps (2019). *Philip's Modern School Atlas*. (99th edition.)
 London: Philip's.
 以上の2冊は、英語の文献を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表（50%）、討論への参加（50%）、欠席は基本的に認めません。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、スクリーン等を随時。

【その他の重要事項】

言語研究の基礎として、音声に関する研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です。今回のテキストは、とても基礎的なテキストですので、初歩から言語学・音声学の考え方が分かるような構成になっています。授業では、教材の内容を理解するだけではなく、その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように、一緒に議論しながら解説を加えていきます。言語の研究の基礎固めをしたい人には、特にオススメの内容になっています。言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します。なお、進め方など、履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります。

【担当教員の専門分野等】

言語学、英語学（形態論、統語論、音声学）、英語史など。

【カリキュラム上の位置づけ】

言語・文化に関して、比較・対照するというを軸に学んでいく2単位の科目です。（今年度は言語の研究法の基本をを学んでいきます。）

【Outline and objectives】

The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key for understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading a textbook on phonetics, which constitutes the foundation of linguistic studies.

LIN500G1 - 106

多言語相関論Ⅲ B

興石 哲哉

サブタイトル：言語の研究方法を学ぶ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが、言語の研究法についてはテクニカルなところがあり、なかなか理解が難しいのが現実です。本授業では、それを克服すべく、基本的な文献を読みながら、主に音声研究以外の言語研究の基本を固めていきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行います。授業では学生にどんどん意味を問いかけていき、教材を日本語にしていってもらいます。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
 - 2) 分からない場合、積極的に質問したり、意見を出し合うこと、
- の2点です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------|-------------------------------------|
| 第1回 | 導入、音声学と音韻論について | 本科目の概略、学習の仕方等についての説明。その上で、教材を読み始める。 |
| 第2回 | 音韻論について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第3回 | 音韻論について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第4回 | 形態論について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第5回 | 形態論について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第6回 | 統語論について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第7回 | 統語論について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第8回 | 統語論について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第9回 | 意味論について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第10回 | 語用論について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第11回 | 言語と文化について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第12回 | 社会言語学について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第13回 | 言語接触について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |
| 第14回 | 言語変化について | 担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、必ず内容について質問しますので、必ず読んできてください。さらに関与する概念で新しいものについては、先にご自身で調べておくと、非常に理解が深まります。

まず、文献を読むべく、英語に習熟することが非常に重要です。常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで、発表の準備を怠りなくすること。他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること、の2点が大切です。

【テキスト（教科書）】

基本的に、*Language Files*, 12th edition (2016年版, Department of Linguistics, The Ohio State University, Columbus: The Ohio State University Press) を用いますが、内容は選択します。その他を用いる場合には、授業で指示します。いずれも、授業支援システム等を通じ配布します。

【参考書】

以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。

・高橋作太郎ら（編集）. 『リーダーズ英和辞典』. 第三版. 東京：研究社.
 学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むには必須です。
 ・Janssen, S. (ed.) (2019). *The World Almanac and Book of Facts 2020*.
 New York: The World Almanac Books.
 ・Philip's Maps (2019). *Philip's Modern School Atlas*. (99th edition.)
 London: Philip's.
 以上の2冊は、英語の文献を読むときでも役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

報告、発表（50%）、討論への参加（50%）。場合によっては、小論文を課すこともあります（その場合、「討論への参加」に代えて、「小論文」が50%となります）。欠席は基本的に認めません。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、スクリーン等を随時。

【その他の重要事項】

言語研究の基礎として、様々な領域の研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です。今回のテキストは非常に基礎的なテキストで、初歩から言語の研究についての考え方が分かるように書かれています。授業では、教材の内容を理解するだけではなく、その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように、一緒に議論しながら解説を加えていきます。言語の研究の基礎固めをしたい人には、特にオススメの内容になっています。言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します。なお、進め方など、履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 英語学、音声学、言語学
 <研究テーマ> 英語の形態論を中心とする領域。
 <主要研究業績>

Koshiishi, Tetsuya (2011). *Collateral Adjectives and Related Issues*.
 Bern: Peter Lang.

【カリキュラム上の位置】

言語・文化に関して、比較・対照するということを軸に学んでいく2単位の科目です。（今年度は言語の研究法の基本をを学んでいきます。）

【Outline and objectives】

The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key to understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading some of the basic literature related to the fields other than phonetics.

多文化相関論 I A

岩川 ありさ

サブタイトル：トラウマとケアから読む文学・文化

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、精神医学、心理学、文学・文化研究などの学問領域を横断し、19世紀から積み重ねられてきた「トラウマ (trauma)」という概念の歴史やトラウマ研究の知見について学ぶ。トラウマを引き起こす出来事は、戦争、紛争、自然災害、家庭内暴力、性暴力、いじめ、人種・民族差別、セクシュアル・マイノリティへの差別など広範囲に渡っており、文化間での差異や相関関係も、これまでの研究では明らかになっている。また、トラウマという概念は、文学、文化研究の中でも応用され、文学、映画、アート、サブカルチャーなどを対象にした研究蓄積がある。この授業では、トラウマに関する研究成果を踏まえた上で、トラウマという視座から文学や文化作品を読みとる方法を身につけ、心の傷をケアするということがいかにして可能なのかについて構想する力を養う。

【到達目標】

1. トラウマという概念やその歴史的な背景を理解する。
2. トラウマに関する多文化間での差異や相関について理解する。
3. トラウマという視座から文学・文化作品を読む方法を身につける。
4. トラウマとケアの繋がりについての知見を理解し、その知見の社会的な意味を説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- ・第1回：トラウマ研究についての基礎的な知識や歴史的な背景について講義を行う。
- ・第2回-第5回：宮地尚子『トラウマ』（岩波新書、2013、880円+税金。kindleなど電子媒体で入手できます。次のサイトの右下に電子媒体について書いてありますので、ご自身が普段用いているところから購入してください。→<https://www.iwanami.co.jp/book/b226191.html>）を読む。毎回、2名の発表者が、担当する章について、論点整理、具体的な事例の分析、ディスカッションのための問題提起を行う。
- ・第6回-第7回：ステイブン・ダルドリー監督『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い（原題 Extremely Loud and Incredibly Close）』（2011）を対象として、トラウマとケアという視座から分析を行う。
- ・第8回-第9回：現在の状況を理解するための人文学のテキストを読みます。
- ・第10回-第11回：学生個人発表。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

| 春学期 | 回 | テーマ | 内容 |
|-----|-----|----------------------------------|--|
| | 第1回 | 4/24 イントロダクション | 授業の概要と計画、受講者の自己紹介。阪神・淡路大震災と心のケアについて。安克昌『新增補版 心の傷を癒すということ：大災害と心のケア』（作品社、2019）を中心に考える。*人数にもよりますが、google meet という機能を用いようかと思えます。チャット、音声ともに可。 |
| | 第2回 | 5/8 宮地尚子『トラウマ』（岩波新書、2013）を読む(1) | 第1章「トラウマとは何か」、第2章「傷を抱えて生きる」 * google meet を用います。各章1名が発表、発表時間 10-20分。ワードなどでA4用紙1-2枚で簡潔に内容をまとめる。発表集の水曜日までにPDFで学習支援システム「教材」の「アクション」から「ファイルをアップロード」を選んで提出。 |
| | 第3回 | 5/15 宮地尚子『トラウマ』（岩波新書、2013）を読む(2) | 第3章「傷ついた人のそばにたたく」、第4章「ジェンダーやセクシュアリティの視点」 * google meet を用います。各章1名が発表、発表時間 10-20分。ワードなどでA4用紙1-2枚で簡潔に内容をまとめる。発表集の水曜日までにPDFで学習支援システム「教材」の「アクション」から「ファイルをアップロード」を選んで提出。 |

| | | | |
|--------|---|---|---|
| 第 4 回 | 5/22 宮地尚子『トラウマ』(岩波新書、2013)を読む(3) | 第 5 章「社会に傷を開く」、第 6 章「トラウマを耕す」 * google meet を用います。各章 1 名が発表、発表時間 10-20 分。ワードなどで A4 用紙 1-2 枚で簡潔に内容をまとめる。発表集の水曜日までに PDF で学習支援システム「教材」の「アクション」から「ファイルをアップロード」を選んで提出。 | 【テキスト(教科書)】 宮地尚子『トラウマ』岩波新書、2013、定価 880 円+税金。kindle など電子媒体で入手できます。次のサイトの右下に電子媒体について書いてありますので、ご自身が普段用いているところから購入してください。→ https://www.iwanami.co.jp/book/b226191.html |
| 第 5 回 | 5/29 トラウマとケア(1) | ステイブーン・ダルドリー監督『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い(原題 Extremely Loud and Incredibly Close)』(2011)をとりあげ、トラウマとケアの関係について学びます。「ものすごくうるさくて、ありえないほど近い」は、NETFLIX サブスクリクション、amazon199 円などで手に入ります。今回は家でそれぞれが見るようにしてください。 | 【参考書】 安克昌『新增補版 心の傷を癒すということ: 大災害と心のケア』作品社、2019、定価 2,420 円。 |
| 第 6 回 | 6/5 トラウマとケア(2) | 前回とりあげた映像作品を分析し、トラウマとケアについて話しあいます。 | 【成績評価の方法と基準】 担当回の発表 60%、期末レポート 40%で総合的に判断する。 |
| 第 7 回 | 6/12 現在を読む(1) | Google meet を用います。 ・「特別掲載」大疫病の年に マイク・デヴィス、コロナウィルスを語る(重田園江訳、web ちくま、2020 年 4 月 7 日公開) http://www.webchikuma.jp/articles/-/2004 ・関連科「アジアの作家たちは新型コロナ禍にどう向き合うのか。『文藝』夏季号で緊急特集。ノーベル文学賞有力候補にして現代中国の最重要作家・関連科による書き下ろし手記を緊急全文公開(谷川毅訳、『文藝』河出書房新社、2020 年 3 月 30 日) http://web.kawade.co.jp/bungei/3466/ ・寺田寅彦「小爆発二件」(青空文庫、「寺田寅彦随筆集 第五巻」岩波文庫、1948 年) https://www.aozora.gr.jp/cards/000042/files/2507_13840.html | 【学生の意見等からの気づき】 昨年度は開講されなかったため、なし。 |
| 第 8 回 | 6/19 現在を読む(2) | 「ものをごわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正當にこわがることはなかなかむつかしいことだと思われた。○○の○○○○に対するので△△の△△△△△△に対するのでも、やはりそんな気がする。」 ・宮澤賢治「[雨二モマケズ]」(青空文庫、「[新] 校本宮澤賢治全集 第十三巻(上) 覚書・手帳 本文篇」筑摩書房、1997 年) https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/45630_23908.html | 【学生が準備すべき機器他】 ・課題提出や連絡で学習支援システムを用います。 https://hoppii.hosei.ac.jp/portal |
| 第 9 回 | 6/26 個人研究発表会(1) | 修士論文についての個人研究発表をしてもらいます。構想発表会や中間発表の練習をしましょう。 修士 2 年、博士 発表 20 分+質疑応答 10 分(30 分) 修士 1 年 発表 15 分+質疑応答 5 分(20 分) | 【その他の重要事項】 ・受講者は初回授業で必ず授業支援システムの名簿登録をしてください。 |
| 第 10 回 | 7/3 個人研究発表会(2) | 修士論文についての個人研究発表をもらいます。構想発表会や中間発表の練習をしましょう。 修士 2 年、博士 発表 20 分+質疑応答 10 分(30 分) 修士 1 年 発表 15 分+質疑応答 5 分(20 分) | 【担当教員の専門分野等】 ＜専門領域＞日本現代文学、クィア・スタディーズ、トラウマ研究 ＜研究テーマ＞日本現代文学やサブカルチャーにおけるトラウマと記憶の研究 ・「私は街を歩きたい：インベカマリ★『理想の猫じゃない』論」『JunCture：超域的日本文化研究』名古屋大学大学院人文学研究科附属超域文化社会センター 10、8-17、2019。 ・「前未来形の文学—小野正嗣『獅子渡り鼻』論」『現代思想』2019 年 3 月臨時増刊号「総特集・ジュディス・バトラー」 ・「変わり身せよ、無名のもの：多和田葉子「献灯使」論(特集 挑戦する現代作家たち)『すばる』40(4)、164-173、2018-04。 |
| 第 11 回 | 7/10 授業や論文についての質問 | 17:50-18:30 まで質問を受け付けます。学習支援システムの掲示板機能を用いてもよいですし、google meet でも構いません。 | 【Outline and objectives】 This course aims at enabling students to acquire a broad range of knowledge about trauma and care. We will focus on the works of Miyaji Naoko, and Kurahashi Kohei. By the end of this course, students will develop a deeper understanding of the important issues regarding trauma and care. |
| 第 12 回 | 7/17 まとめ(7/10 が google meet で集まるのは最後になり実質的な最終回です) | 7/17(金)23:55 締め切り。学習支援システムからレポート提出をしてください。順次、コメントを書き込んで返却してゆきます。 ・レポート課題 この授業で学んだことをどう自分の研究に活かせるか、1,200 文字程度でまとめてください。ワードファイルで提出。 | |

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

- ・担当者は、登場する出来事や関連文献について調べた上で、議論を喚起する形で発表できるように準備する。
- ・受講者は、共通テキストを精確に読み、自分が気になった点については調べ、問題意識を持ちながら議論に参加できるようにすること。

多文化相関論 I B

岩川 ありさ

サブタイトル：トラウマとケアから読む文学・文化

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

これまで文学・文化研究において積み重ねられてきた知見は、「ケア (care)」という領域においても重要な視座を与えてくれる。傷ついた他者のかたわらに在るといふ経験は、どのようにして描かれ、ケアに携わる人々にとってどのような意味をもたらすのか。また、新自由主義の中で、社会保障が削られ、人々の生の安全が危機に晒されている時代において、社会の中で生命を支え、生命に対する畏敬の念をどのようにして保てばいいのか。この授業では、岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012）の議論を中心に、ケアをめぐる様々なことがらについて自ら考える力を養う。

【到達目標】

1. ケアについての基礎的な知識を身につける。
2. 多文化間での差異や相関について理解する。
3. ケアという視座から文学・文化作品を読む方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- ・第1回、第2回：ケアをめぐる研究の概要について講義する。
- ・第3回-第10回：岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012）を読み、論点整理、具体的な事例の分析、ディスカッションのための問題提起を行う。第7回、第8回は、映像作品を通して、ケアについて考える。
- ・第11回-第13回は、障害学、ディスアビリティ・スタディーズ、当事者研究、アートとケアについて講義し、必要な論文を読む。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|---|--|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の概要と計画、受講者の自己紹介。ケアとはどのような営みなのか、文学、文化とどのように関連しているのか、フロレンス・ナイチンゲール『看護覚え書—看護であること看護でないこと』（湯積ます他訳、2011、現代社改訂第7版）などを通して考える。 |
| 第2回 | ケアをめぐる研究 | 社会学、看護学、障害学、当事者研究などの領域で積み重ねられてきたケアに関する研究を概観し、ケアという概念の基礎的な知識や歴史的な背景について学ぶ。 |
| 第3回 | 岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012）を読む(1) | 第一部「リベラリズムと依存の抑圧」（序論「フェミニズム理論と政治思想」、第一章「包摂と排除の論理」） |
| 第4回 | 岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012）を読む(2) | 第一部「リベラリズムと依存の抑圧」（第二章「自由論と忘却の政治」、第三章「リベラリズムとフェミニズム」） |
| 第5回 | 岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012）を読む(3) | 第二部「ケアの倫理の社会的可能性」（序論「なぜ、家族なのか」、第一章「ケアの倫理からの出発」） |
| 第6回 | 岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012）を読む(4) | 第二部「ケアの倫理の社会的可能性」（第二章「私的領域の主権化／母の自然化」、第三章「ケア・家族の脱私化と社会的可能性」） |
| 第7回 | 子どもたちとケア(1) | 映画「存在のない子供たち」（監督・脚本・出演：ナディーン・ラバキ、2019）を通して、子どもたちとケアをめぐる問題について考えます。 |
| 第8回 | 子どもたちとケア(2) | 前回に続き、子どもたちとケアをめぐる問題について考えます。 |

| | | |
|------|---|---|
| 第9回 | 岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012）を読む(5) | 第三部「フェミニズムと脱主権国家論」（序論「主権国家・近代的主体・近代家族制度の三位一体をほくく」、第一章「フェミニズムが構想する平和」） |
| 第10回 | 岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012）を読む(6) | 第三部「フェミニズムと脱主権国家論」（第二章「安全保障体制を越えて」、第三章「ケアから人権へ」、終章「新しい共同性に向けて」） |
| 第11回 | 障害学、ディスアビリティ・スタディーズ | 障害学、ディスアビリティスタディーズの展開についてまとめます。 |
| 第12回 | 当事者研究 | 当事者研究の展開についてまとめます。 |
| 第13回 | ケアと表現 | ケアと表現の関係についてまとめます。 |
| 第14回 | まとめ | まとめを行う。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・担当者は、登場する出来事や関連文献について調べた上で、議論を喚起する形で発表できるように準備する。
- ・受講者は、共通テキストを正確に読み、自分が気になった点については調べ、問題意識を持ちながら議論に参加できるようにすること。

【テキスト（教科書）】

岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房、2012、4,620円

【参考書】

毎回の講義で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当回の発表 60%、期末レポート 40%で総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は開講されなかったため、なし。

【学生が準備すべき機器他】

- ・課題提出や連絡で授業支援システムを用います。使い方については、「授業支援システムガイドブック」を参照してください。

http://www.hosei.ac.jp/campuslife/jugyo/jugyo_shien.html

【その他の重要事項】

- ・受講者は初回授業で必ず授業支援システムの名簿登録をしてください。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>日本現代文学、クィア・スタディーズ、トラウマ研究
- <研究テーマ>日本現代文学やサブカルチャーにおけるトラウマと記憶の研究
- ・「私は街を歩きたい：インベカマリ★『理想の猫じゃない』論」『JunCture：超越的日本文化研究』名古屋大学大学院人文科学研究科附属超越文化社会センター 10, 8-17, 2019.
- ・「前未来形の文学—小野正嗣『獅子渡り鼻』論」『現代思想』2019年3月臨時増刊号「総特集・ジュディス・バトラー」
- ・「変わり身せよ、無名のもの：多和田葉子『献灯使』論（特集 挑戦する現代作家たち）」『すばる』40(4), 164-173, 2018-04.

【Outline and objectives】

This course aims at enabling students to acquire a broad range of knowledge about feminism and care. We will focus on the works of Okano Yayo. By the end of this course, students will develop a deeper understanding of the important issues regarding feminism and care.

CUA500G1 - 109

多文化相関論Ⅱ A

熊田 泰章

サブタイトル：人の表象の間文化性

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<< 2020 年 4 月 9 日変更 >>

<< 授業実施方法の変更により、各回の授業は、当面の間、学習支援システムで教材・課題を示し、参加学生は教材を熟読し、課題をワード文書に記載して提出することで行います。

学習支援システムを確認してください。>>

この授業では間文化性研究の基本的考え方を理論と事例によって学ぶ。そのために、間文化的に生成された文化活動であるヨーロッパ絵画を例として取り上げる。諸文化が相互に共通点を有していることと、その共通点がゆえに相違点が際立つこと、そして、それらの共通点と相違点を相互に認識し合いながら、諸文化が間文化的関係性の中で相互に影響を与えあうことを把握する。

【到達目標】

人物表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について把握する。
 表象行為の内在性と超越性について多文化横断的に把握する。
 古典古代のギリシャ、そしてそれ以前の古代エジプトにまで遡って、「個の肖像」の歴史をたどり、その継続を追って、ルネサンス期フランドルの肖像画とそれ以降の風俗画までを調べ、理解する。
 テキストとして使用する文献によって、個々の事例を具体的に知り、それらにおける「個の表象」の共通性を分析的に知る。
 「個の表象」の研究を通して、間文化性について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

<< 2020 年 4 月 13 日追加 >>

<< 春学期の少なくとも前半はオンラインでの開講となる。それにともなう各回の授業計画の変更については、学習支援システムでその都度提示する。本授業の開始日は 4 月 24 日とする。授業開始時に用いる教材・課題は、すでに 4 月 7 日に学習支援システムにアップロードしているので、確認すること。>>

論文精読と教員の説明に基づき、学生が能動的に学ぶ大学院授業とする。
 絵画を通して間文化性を学ぶために、テキストとして 3 冊の研究書を順次精読し、かつ相互に参照する分析を行う。毎回、取り扱う箇所を定め、事前に履修者が内容を確認し、学術用語、固有名詞などを調べ、報告する。その報告に基づき、授業の中で内容に対するまとめと批評を行う。
 関連する適切な美術展を選び、作品に対する分析を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|----------------------------|-------------------------|
| 第 1 回 | ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』 | 通時的・共時的な文化の共通性 |
| 第 2 回 | ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』 | ベンヤミンの今日的意義 |
| 第 3 回 | ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』 | ベンヤミンの限界 |
| 第 4 回 | 古代エジプトの「肖像画」 | エジプト古王朝の人間表象 |
| 第 5 回 | 古代エジプトの「肖像画」 | 死者の表象 |
| 第 6 回 | 古代エジプトの「肖像画」 | 生者の表象 |
| 第 7 回 | 古代ローマの「肖像画」 | 古代ローマの人間表象 |
| 第 8 回 | アレキサンダー大王の表象 | 持続し、変化する意味 |
| 第 9 回 | ボンベイのパン屋夫婦の表象 | 個人の表象 |
| 第 10 回 | ファイユームという転換期 | 個人の表象 |
| 第 11 回 | 対話する表象 | 私たちを見つめるまなざし |
| 第 12 回 | 初期キリスト教における人間表象 | 禁じられた表象 |
| 第 13 回 | 聖母子から個人へ | 個人の表象の再生を準備する |
| 第 14 回 | ルネサンス期の人間表象 このセメスターのまとめ | 個人の表象の再生 このセメスターのまとめ |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、内容を確認し、学術用語等を調べる。
 分担発表のための準備をする。

本授業の準備・復習時間は、各 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛—ルネサンス期フランドル肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002 年
 ツヴェタン・トドロフ『日常礼賛—フェルメールの時代のオランダ風俗画』塚本昌則訳、白水社、2002 年
 ゴットフリート・ベーム『図像の哲学—いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版局、2017 年

【参考書】

ジェラルド・ジュネット『芸術の作品 I—内在性と超越性』和泉涼一訳、水声社、2013 年
 ツヴェタン・トドロフ『ゴヤ—啓蒙の光の陰で』小野潮訳、法政大学出版局、2014 年

ジョン・A・ウォーカー／サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門—美術史を超えるための方法論—』岸文和他訳、晃洋書房、2001 年

【成績評価の方法と基準】

<< 2020 年 4 月 13 日追加 >>

<< 春学期の少なくとも前半がオンラインでの開講となったことにもない、成績評価の方法と基準も変更する。具体的な方法と基準は、今後の授業方法確定とともに、改めて定めるが、基本的には、各授業で提出の課題と学期末に課す最終課題によって評価する。>>

毎回の授業における報告に対する評価 50 % と最後の期末レポート 50 % によって評価する。

具体的事例の分析と考察により、人物表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について、及び、表象行為の内在性と超越性について、多文化横断的に把握したことを確認する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度は学内業務の調整により、この授業を休講としました。これまでの学生の意見に基づき、学生の分担発表の計画を明確に定めます。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布と課題提出のために授業支援システムを活用します。

【その他の重要事項】

<< 2020 年 4 月 18 日追加 >>

他専攻学生が履修を希望する場合は、4 月 21 日までに、学習支援システム（掲示板・教材・課題）を参照の上、課題提出先として記載した担当教員メールアドレス宛に連絡してください。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 文化記号論、テキスト論

< 研究テーマ > 間文化性研究

< 主要研究業績 >

「グローバル化の原理としての記号的従属および動的編成と相互受容—個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第 16 号、2015 年

「唯一であることの相対的価値についての試論」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第 15 号、2014 年

「絵画のナラトロジー—試論—知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察」熊田泰章編『国際文化研究への道—共生と連帯を求めて』彩流社、2013 年

【Outline and objectives】

In this class, students will learn the basic concept of intercultural study on theory and examples. For that purpose, we will take European painting, an interculturally generated cultural activity, as an example. Students will understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.

CUA500G1 - 110

多文化相関論Ⅱ B

熊田 泰章

サブタイトル：人の表象の間文化性

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では間文化性研究の基本的考え方と理論と事例によって学ぶ。そのために、間文化的に生成された文化活動であるヨーロッパの絵画を例として取り上げる。諸文化が相互に共通点を有していることと、その共通点がゆえに相違点が際立つこと、そして、それらの共通点と相違点を相互に認識し合いながら、諸文化が間文化的関係性の中で相互に影響を与えあうことを把握する。春学期「多文化相関論Ⅱ A」の成果を基にする。

【到達目標】

人物表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について把握する。
 表象行為の内在性と超越性について多文化横断的に把握する。
 古典古代のギリシャ、そしてそれ以前の古代エジプトにまで遡って、「個の肖像」の歴史をたどり、その継続を追って、ルネサンス期フランドルの肖像画とそれ以降の風俗画までを調べ、理解する。
 フーコー『マネの絵画』により、現代に至る個人の表象について理解する。
 テキストとして使用する文献によって、個々の事例を具体的に知り、それらにおける「個の表象」の共通性を分析的に知る。
 「個の表象」の研究を通して、間文化性について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

論文精読と教員の説明に基づき、学生が能動的に学ぶ大学院授業とする。
 絵画を通して間文化性を学ぶために、テキストとして4冊の研究書を順次精読し、かつ相互に参照する分析を行う。毎回、取り扱う個所を定め、事前に履修者が内容を確認し、学術用語、固有名詞などを調べ、報告する。その報告に基づき、授業の中で内容に対するまとめと批評を行う。
 関連する適切な美術展を選び、作品に対する分析を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------------------|-------------------------------|
| 第1回 | ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』 | 通時的・共時的な文化の共通性 ベンヤミンの意義と限界 |
| 第2回 | 個人の表象 | 古典古代からルネサンス |
| 第3回 | 個人の表象 | フランドル |
| 第4回 | 市民生活の表象 | 風俗画 |
| 第5回 | フーコー『マネの絵画』 | 「チュイルリー公園の音楽会」 |
| 第6回 | フーコー『マネの絵画』 | 「オペラ座の仮面舞踏会」 |
| 第7回 | フーコー『マネの絵画』 | 「マクシミリアンの処刑」 |
| 第8回 | フーコー『マネの絵画』 | 「ホルダーの港」 |
| 第9回 | フーコー『マネの絵画』 | 「温室にて」 |
| 第10回 | フーコー『マネの絵画』 | 「給仕する女」 |
| 第11回 | フーコー『マネの絵画』 | 「笛を吹く少年」 |
| 第12回 | フーコー『マネの絵画』 | 「草上の昼食」 「オランダ」 |
| 第13回 | フーコー『マネの絵画』 | 「フォーリー・ベルジェールのバー」 |
| 第14回 | 個人の表象の間文化性 | 全体のまとめ |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、内容を確認し、学術用語等を調べる。
 分担発表のための準備をする。
 本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛—ルネサンス期フランドル肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002年
 ツヴェタン・トドロフ『日常礼賛—フェルメールの時代のオランダ風俗画』塚本昌則訳、白水社、2002年
 ミシェル・フーコー『マネの絵画』阿部崇訳、ちくま学芸文庫、2019年
 ゴットフリート・ベーム『図像の哲学—いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版社、2017年

【参考書】

ジェラルド・ジュネット『芸術の作品Ⅰ—内在性と超越性』和泉涼一訳、水声社、2013年
 ツヴェタン・トドロフ『ゴヤ—啓蒙の光の陰で』小野潮訳、法政大学出版社、2014年
 ジョン・A・ウォーカー／サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門—美術史を超えるための方法論—』岸文和他訳、晃洋書房、2001年

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業における報告に対する評価 50 % と最後の期末レポート 50 % によって評価する。
 具体的事例の分析と考察により、人物表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について、及び、表象行為の内在性と超越性について、多文化横断的に把握したことを確認する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度は学内業務の調整により、この授業を休講としました。これまでの学生の意見に基づき、学生の分担発表の計画を明確に定めます。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布と課題提出のために授業支援システムを活用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化記号論、テキスト論
 <研究テーマ>間文化性研究
 <主要研究業績>

「グローバリゼーションの原理としての記号的従属および動的編成と相互受容—個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第16号、2015年
 「唯一であることの相対的価値についての試論」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第15号、2014年
 「絵画のナラトロジー—知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察」熊田泰章編『国際文化研究への道—共生と連帯を求めて』彩流社、2013年

【Outline and objectives】

In this class, students will learn the basic concept of intercultural study on theory and examples. For that purpose, we will take European painting, an interculturally generated cultural activity, as an example. Students will understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.

HIS500G1 - 111

多文化相関論Ⅲ

佐々木 一恵

サブタイトル：歴史学の諸アプローチ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、歴史学における方法論的展開の概要を理解することを目指します。また、歴史学の方法論に基づき研究論文を執筆していただけるようになることを目的とします。

【到達目標】

1. 歴史学におけるこれまでの方法論的特徴とその展開について理解できるようになる。
2. 歴史学の方法論に基づき一次史料を用いて研究論文を書いていけるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

文献の検討と討論を通じて、問題を理解し共有する。

- (1) 文献中の重要な概念やキーワードについて予め調べておく。
- (2) 授業の中で、最低3つ文献に関する疑問点および議論すべき点を述べる。
- (3) 各自の研究に、授業で扱った諸問題をどのように取り込んでいけるか検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|--------------|--|
| 1回 | イントロダクション | 授業概要の説明及び教員が現在行っている研究の説明。 |
| 2回 | 歴史記憶の問題 | 【テキスト】 ◎『なぜ歴史を学ぶのか』第1章 【推奨文献】 ◎ドロレス・ハイデン『場所の力：パブリック・ヒストリーとしての都市景観』 ◎首豊、北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門』 |
| 3回 | 「歴史」の多元性・多様性 | 【テキスト】 ◎『なぜ歴史を学ぶのか』第2章 【推奨文献】 ◎保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』 ◎ポール・トンプソン『記憶から歴史へ』 ◎デイベッシュ・チャクラバルティ『マイノリティの歴史、サバルタンの過去』 |
| 4回 | 社会史・思想史 | 【テキスト】 ◎『歴史学の未来へ』第5章 【推奨文献】 ◎G. リューデ『フランス革命と群衆』 ◎福井憲彦『「新しい歴史学」とは何か』 |
| 5回 | 文化史 | 【テキスト】 ◎『歴史学の未来へ』第5章 【推奨文献】 ◎カルロ・ギンズブルグ『チーズとうじ虫』 ◎ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』 |
| 6回 | エージェンシー | 【テキスト】 ◎『歴史学の未来へ』第6章 【推奨文献】 ◎エドワード・P. トムスン『イングランド労働者階級の形成』 ◎クローディア・クーンズ『父の国の母たち：女を軸にナチズムを読む』 |
| 7回 | 世界システム論と歴史学 | 【テキスト】 ◎『世界システム論』 【推奨文献】 ◎シドニー・ミンツ『甘さと権力——砂糖が語る近代史』 ◎川北稔『世界システム論講義』 |

| | | |
|-----|----------------|--|
| 8回 | ポストコロニアリズムと歴史学 | 【テキスト】 ◎朴浩烈『小考ポストコロニアリズム』 【推奨文献】 ◎エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』 ◎サンドラ・ハーディング『科学と社会的不平等：フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判』 ◎ トリン.T. ミンハ『女性・ネイティヴ・他者』 |
| 9回 | 個人史のアプローチ | 【テキスト】 ◎長谷川貴彦『エゴ・ドキュメント論』 【推奨文献】 ◎小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」』 ◎クリフォード R. ショウ『ジャック・ローラー』 ◎ウーテ・フレーフェルト『歴史の中の感情』 |
| 10回 | オーラル・ヒストリー | 【テキスト】 ◎「個人史の語り」と歴史との接点—オーラル史料の構成と解釈— 【推奨文献】 ◎ポール・トンプソン『記憶から歴史へ：オーラル・ヒストリーの世界』 ◎エイミー・ヒル・ハース『アメリカ先住民女性の現代史：“ストロング・メディスン”家族と部族を語る』 |
| 11回 | マクロな歴史 | 【テキスト】 ◎デイベッシュ・チャクラバルティ『気候と資本：結合する複数の歴史』 【推奨文献】 ◎J.R. マクニール『20世紀環境史』 ◎ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄』 ◎ジェームズ・C. スコット『反穀物の人類史』 |
| 12回 | グローバル・ヒストリー | 【テキスト】 ◎『グローバル・ヒストリーズ』 【推奨文献】 ◎ピーター・チャップマン『バナナのグローバル・ヒストリー』 ◎リジー・コリンガム『大英帝国は大食らい』 |
| 13回 | 個人発表（1） | 授業で取り上げた内容の中で、自分の研究テーマに関連する内容を議論する。 |
| 14回 | 個人発表（2） | 授業で取り上げた内容の中で、自分の研究テーマに関連する内容を議論する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめて準備してくる。

文献に関する疑問点および議論すべき点を、最低3つ準備してくる。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

- ◎リン・ハント（長谷川貴彦訳）『なぜ歴史を学ぶのか』岩波書店、2019年。
- ◎ノーマン・J・ウィルソン（南塚信吾、木村真監訳）『歴史学の未来へ』法政大学出版局、2011年。
- ◎朴浩烈『小考ポストコロニアリズム』『人文・歴史研究』11号、2017年。
- ◎桜井厚『個人史の語り」と歴史との接点—オーラル史料の構成と解釈—』『歴史学評論』777号、2015年、60-72。
- ◎長谷川貴彦『エゴ・ドキュメント論—欧米の歴史学における新潮流—』『歴史学評論』777号、2015年、47-59。
- ◎デイベッシュ・チャクラバルティ『気候と資本：結合する複数の歴史』『思想』1127号、2018年、117-144。
- ◎上智大学アメリカ・カナダ研究所、イベロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所編『グローバル・ヒストリーズ』上智大学出版会、2018年。

【参考書】

- ◎ドロレス・ハイデン（後藤春彦、篠田裕見、佐藤俊郎訳）『場所の力：パブリック・ヒストリーとしての都市景観』学芸出版社、2002年。
- ◎首豊、北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門：開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版、2019年。
- ◎保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶ノ水書房、2004年。
- ◎ポール・トンプソン（酒井順子訳）『記憶から歴史へ：オーラル・ヒストリーの世界』青木書店、2002年。
- ◎デイベッシュ・チャクラバルティ（白田雅之訳）『マイノリティの歴史、サバルタンの過去』『思想』891号、1998年9月。
- ◎L・ダヴィドフ、C・ホール（山口みどり、梅垣千尋、長谷川貴彦訳）『家族の命運：イングランド中産階級の男と女：1780～1850』名古屋大学出版会、2019年。
- ◎福井憲彦『「新しい歴史学」とは何か：アナール派から学ぶもの』講談社、1995年。
- ◎G. リューデ（前川貞次郎ほか訳）『フランス革命と群衆』ミネルヴァ書房、1996年。

- ◎カルロ・ギンズブルグ（杉山光信訳）『チーズとうじ虫：16世紀の粉挽屋の世界像』みすず書房、2016年。
- ◎ロバート・ダーントン（海保真夫、鷺見洋一訳）『猫の大虐殺』岩波書店、1986年。
- ◎エドワード・P. トムソン（市橋秀夫、芳賀健一訳）『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003年。
- ◎クローディア・クーンズ（翻訳工房「とも」訳）『父の国の母たち：女を軸にナチズムを読む』上、時事通信社、1990年。
- ◎山下範久『世界システム論』『世界史』の世界史』ミネルヴァ書房、2016年。
- ◎シドニー・ミンツ（川北稔、和田光弘訳）『甘さと権力——砂糖が語る近代史』平凡社、1988年。
- ◎川北稔『世界システム論講義：ヨーロッパと近代世界』筑摩書房、2016年。
- ◎エドワード・W・サイード（今沢紀子訳）『オリエンタリズム』平凡社、1993年。
- ◎サンドラ・ハーディング（森永康子訳）『科学と社会的不平等：フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判』北大路書房、2009年。
- ◎トリン・T・ミンハ（竹村和子訳）『女性・ネイティヴ・他者：ポストコロニアリズムとフェミニズム』岩波書店、1995年。
- ◎小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」：第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』山川出版社、2012年。
- ◎クリフォード R. ショウ（玉井眞理子、池田寛訳）『ジャック・ローラー：ある非行少年自身の物語』東洋館出版社、1998年。
- ◎エイミー・ヒル・ハース（佐藤円、大野あずさ訳）『アメリカ先住民女性の現代史：“ストロング・メディスン”家族と部族を語る』彩流社、2012年。
- ◎J.R. マクニール『20世紀環境史』名古屋大学出版会、2011年。
- ◎ジャレド・ダイヤモンド（倉骨彰訳）『銃・病原菌・鉄：一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎』草思社、2000年。
- ◎ジェームズ・C. スコット（立木勝訳）『反穀物の人類史：国家誕生のディープストーリー』みすず書房、2019年。
- ◎ウーテ・フレフェルト（櫻井文子訳）『歴史の中の感情：失われた名誉/創られた共感』東京外国語大学出版会、2018年。
- ◎ピーター・チャップマン（小澤卓也、立川ジェームズ訳）『バナナのグローバル・ヒストリー：いかにしてユナイテッド・フルーツは世界を席巻したか』ミネルヴァ書房、2018年。
- ◎リジー・コリンガム（松本裕訳）『大英帝国は大食らい：イギリスとその帝国による植民地経営は、いかにして世界各地の食事をつくりあげたか』河出書房新社、2019年。

【成績評価の方法と基準】

授業への貢献度・参加度（30%）、発表（70%）

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

アメリカ合衆国史

<研究テーマ>

・20世紀転換期のニューヨークにおけるプロテスタンティズムと公共領域の再編

・アメリカ人女性の海外宣教運動

<主要研究業績>

「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー——女子教育とジャンヌ=ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イベロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリーズ—ナショナルを超えて』上智大学出版会、2018年。

Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).

“Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” The Japanese Journal of American Studies (no.23, 2012).

【Outline and objectives】

The course introduces basic historiographical issues in the discipline of history. Students are expected to develop the ability to apply historical methods of inquiry to the analysis of their Master's theses/Research papers.

多文化芸術論 I

佐藤 千登勢

サブタイトル：映画を読む

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、芸術テキストを審美的快楽の体験の場としてのみならず、社会批判の装置として捉え直し、その表現、表象の語る多義性と重層性について考え、議論します。ロシア（ソ連）、チェコ（チェコスロバキア）、ポーランドの文学作品や映画を用いながら、それぞれの国々の社会、経済、文化、歴史、国家間の勢力均衡を解説する作業を通して、多義的記号体系を分析・洞察する力を養います。

【到達目標】

映画作品や音楽を中心に、それぞれの芸術言語が担う審美的機能と社会批判の機能という一見相反する多義的な表現の読解を重ねることで、これを自身の見解や思考の組み立て方に役立てて、論理的に議論やプレゼンテーションを展開する力を獲得することが目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である。また、「DP3」の達成のために望ましい。

【授業の進め方と方法】

旧社会主義国家で創造された芸術テキストは、その国の文化や社会構造、イデオロギー、歴史的背景、国家間の関係を濃厚に映し出す、いわば、体制と人間社会の縮図モデルです。しかし、多義的で重層的な言語（映画言語、音楽言語を含む）により、それは、多様な解釈を許容するとともに、作者の真の意図やメッセージを解読すべき錯綜した迷宮のような作品となっていることも少なくありません。私たちは、手法や表象、形式といった審美的観点に着目すると同時に、『抑圧』『イデオロギーによる民族統合』『民族差別』『冷戦』『ソ連邦崩壊と離散』『ナショナリズム』といった社会的・歴史的キーワードを基に、二重構造の芸術テキストを分析・批評していきます。授業でなされた議論や自身の見解をA4一枚程度にまとめたリアクションペーパーを毎回、提出してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|---------------------------------------|---|
| 第1回 | 芸術の機能について——シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ | ロシア・フォルマリズム宣言としても名高いシクロフスキーの『手法としての芸術』を基に、「異化—自動化」「日常—非日常」「手法—素材」等の二項対立の芸術上の、また日常における意義を考える。 |
| 第2回 | 芸術の機能について——シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ(2) | ロシア・フォルマリズムの主導者シクロフスキーが提唱した「異化」の概念について具体例を確認しつつ、理解を深める。 |
| 第3回 | 煽動と挑発——モンタージュ派（エイゼンシュテイン、ヴェルトフ）の映画(1) | エイゼンシュテイン『ストライキ』、『戦艦ポチョムキン』、『十月』の煽動的なモンタージュについて概説。 |
| 第4回 | 煽動と挑発——モンタージュ派（エイゼンシュテイン、ヴェルトフ）の映画(2) | ヴェルトフの都市化と複製技術の発達を背景とした手法としてのモンタージュの差異を検討する。 |
| 第5回 | プロバガンダー——ブドフスキンの映画言語『アジアの嵐』 | ブドフキン『アジアの嵐』における多様なモンタージュを分析して審美的側面を確認しながら、同時にこの作品が呈示する多民族併合や社会主義革命の正当化という多層的テーマを読み解く。 |
| 第6回 | プロバガンダー——トゥーリンの映画言語『トゥルクシブ』 | プロバガンダ的煽動性の記号や表象を現代化させずに、宗教的煽動とも言える超越的力の存在と崇高さの創出、サブリミナル的手法によるプロバガンダの力を分析していく。 |
| 第7回 | 面従腹背の二重構造——エイゼンシュテイン『イワン雷帝』 | エイゼンシュテインの世界的影響力を配下におくためにスターリンが制作依頼した『イワン雷帝』。この作品にはスターリンを批判・揶揄する記号や表象、表現が構造化されている。作品をめぐってのスターリンとエイゼンシュテインとの闘争という背景も交えつつ、概説。 |

- 第8回 面従腹背の二重構造――アンジェイ・ワイダの映画言語（1）
旧ソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は映画界でも不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、本人のインタビュー映像も交えて確認すると同時に、映画テキストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。
- 第9回 面従腹背の二重構造――アンジェイ・ワイダの映画言語（2）
旧ソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は映画界でも不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、本人のインタビュー映像も交えて確認すると同時に、映画テキストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。
- 第10回 審美的《イソップ言語》――タルコフスキー『鏡』
幼年時代の回想的要素とドキュメンタリー映像が印象的な『鏡』。だが、幼年期の断片的回想にはスターリン時代の粛清のエピソードがさまざまな様式で重ねられている。象徴性や映画言語の二重性に着目しつつ、《父性の喪失》についても考えていく。
- 第11回 抵抗と挑発――ヴェラ・ヒティロヴァの映画言語
旧チェコスロバキアの統制から自由になるとうとする国民の意志を、二人の自由闊達な姉妹を通してユーモラスにお洒落に描出するセンスと、映画言語の二重性、台詞と映像の不一致や台詞の重みについて考察。
- 第12回 寓話的諷刺と不条理――ジャフナザーロフ『ゼロ・シティ』
旧ソ連という国家のしくみ自体をパロディ化した不条理作品の秀作『ゼロ・シティ』を基に、ソ連崩壊後の映画言語の変容に着目する。
- 第13回 寓話的諷刺不条理――アブラーゼ『懺悔』
ソ連崩壊後、ロシアの映画言語は寓話性を獲得する。スターリンとヒトラーを融合させたような支配者、彼に両親を粛清された少女と、支配者の一族のその後の経緯は、史実とシュールな感覚やユーモアを交えて表現される。その寓話的表象に着目しつつ、史実、記憶、不条理について考察していく。ソ連崩壊後のロシア国民のメンタリティを、《父親》に裏切られた義理の息子のある一家族のストーリーに重ね合わせた寓話的手法とその重みについて検討しつつ、《父殺し》の伝統についても考察。
- 第14回 国家と個人――パーヴェル・チュフライ『パパって何？』
ソ連崩壊後のロシア国民のメンタリティを、《父親》に裏切られた義理の息子のある一家族のストーリーに重ね合わせた寓話的手法とその重みについて検討しつつ、《父殺し》の伝統についても考察。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

レジュメの内容や視聴した映像資料に対する自身の見解等を A4 一枚程度にまとめたリアクションペーパーを次回に毎回提出する（学習支援システムを利用）。

【テキスト（教科書）】

教員の作成した資料を学習支援システムを通して配付します。

【参考書】

折にふれて、学習支援システムで挙げます。

【成績評価の方法と基準】

春学期の少なくとも前半がオンライン開講となったことに伴い、成績評価の方法と基準も変更する。具体的な方法と基準は、授業開始日に学習支援システムで提示する。授業開始日は4月24日（金）13時～、学習支援システムにて。

【学生の意見等からの気づき】

とくにありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

20世紀ロシア文学、ロシア・フォルマリズムを中心とした芸術理論、ロシア（ソ連）の映画と文学の相関性について、ロシア（ソ連）映画
<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002283/profile.html>

【Outline and objectives】

We consider artistic texts not only as a place for experiencing aesthetic pleasures but also as a device of social criticism, and discuss the polysemy and multiplicity of their expressions and representations.

ART500G1 - 113

多文化芸術論Ⅱ

廣松 勲

サブタイトル：フランコフォニー文学と社会

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

複数文化に跨る社会文化的現象を分析するために、この授業では「カナダ・ケベック州」と「カリブ海域諸島のフランス海外県」という、2つの「フランス語圏（フランコフォニー）」に注目する。いずれの地域もアメリカ大陸の一部であり、当然ながら「英語圏（アングロフォニー）」とも密接に関わる地域である。

これらの地域の芸術作品は、作品の形式的側面に集中した「内在分析」だけではとらえ切れない豊饒な問題系を抱えている。そのため、文学・映画テキストに「社会学的なテキスト分析」を施すことで、テキストとコンテキストとの独特の繋がりを、各地域の芸術作品において分析する。

このような具体的な作品分析を行うために、事前に各地域の社会文化的・言語学的状況を紹介することになる。

【到達目標】

この授業では、複数の言語・文化が併存する地域において生産される芸術作品（主に文学と映画）を分析対象として、いかに社会文化的現象が芸術作品に書き込まれるのかを検討する。

とりわけ、英語文化とフランス語文化が併存する「カナダ・ケベック州」、そしてフランス語文化とクレオール語文化が併存する「カリブ海域諸島」を中心にしつつ、学生には文学・映画テキストの「社会学的なテキスト分析」の方法を身に付けてもらうことを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

基本的には、日本語による講義を行う。ただし、受講者には各テーマまたは作品について、個人発表を一度してもらう。最終的に、その発表を基にした期末レポートを提出してもらう。

なお、個人発表・期末レポートについては、フランスまたはフランス語圏に少しでも関連させるならば、自らの研究テーマに即した発表を行うこともできる（比較分析など）。

さらに、毎回の授業においてコメントシートを提出してもらうことで、学生の理解度・考えなどを把握しておきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------------------|--------------------------------------|
| 第1回 | イントロダクション：フランス語圏とは何か？ | 「フランコフォニー」や「アングロフォニー」の歴史・地理 |
| 第2回 | カリブ海域諸島のフランス語圏① | カリブ海域諸島の社会文化的・言語学的状況 |
| 第3回 | カリブ海域諸島のフランス語圏② | エメ・セゼールの長編詩『帰郷ノート』 |
| 第4回 | カリブ海域諸島のフランス語圏③ | エドゥアール・グリッサンの小説『レザルド川』 |
| 第5回 | カリブ海域諸島のフランス語圏④ | パトリック・シャモワゾーの小説『素晴らしきソリボ』 |
| 第6回 | カリブ海域諸島のフランス語圏⑤ | カリブ海域諸島の思想 |
| 第7回 | カリブ海域諸島のフランス語圏⑥ | カリブ海域諸島の映画：『マルチニックの少年』 |
| 第8回 | カナダ・ケベック州のフランス語圏① | カナダ・ケベック州の社会文化的・言語学的状況 |
| 第9回 | カナダ・ケベック州のフランス語圏② | ジャック・ゴドブーの小説『やあ、ガラルノー！』 |
| 第10回 | カナダ・ケベック州のフランス語圏③ | エミール・オリヴィエの小説『パスサージュ』（邦訳なし） |
| 第11回 | カナダ・ケベック州のフランス語圏④ | ダニー・ラフェリエール的小説『吾輩は日本作家である』 |
| 第12回 | カナダ・ケベック州のフランス語圏⑤ | カナダ・ケベック州の思想 |
| 第13回 | カリブ海域諸島からケベック州へ | カリブ海域とケベック州とのつながり：セゼールのドキュメンタリーを紹介して |
| 第14回 | 総括 | 社会と芸術とのつながり方 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本講義で扱う文学作品については、1作を除いて、全て邦訳が存在する。受講生には、できるだけ翻訳文献にも触れておきたい。

・授業で扱うアメリカ大陸のフランス語圏については、それぞれ自分自身でも社会状況などを事前に調べておいて欲しい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

・特になし。
・毎回資料を配布します。

【参考書】

・平野千香子著『フランス植民地主義の歴史』人文書院、2002年。
・鳥羽美鈴著『多様ななかのフランス語』関西学院大学出版会、2012年。
・秋田茂著『イギリス帝国の歴史』中公新書、2012年。
・井野瀬久美恵著『興亡の世界史 大英帝国という経験』講談社学術文庫、2017年。

【成績評価の方法と基準】

・コメントシート、口頭発表、レポート、授業への積極的貢献度（出席など）を考慮して、総合的に判断する。
・評価配分は、以下の通り：
①平常点：10%
②個人発表：30%
③期末レポート：60%

【学生の意見等からの気づき】

・主に講義科目ではあるが、できるだけ学生が自らの考え・反応などを講義中に述べられるような雰囲気づくりに努めたい（個人発表に加えて、コメントシートを材料にした議論など）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> フランコフォニー文学
<研究テーマ> 脱植民地化後のメランコリー、トランスカルチャー等
<主要研究業績> "Mélancolie postcoloniale : relecture de la mémoire collective et du lieu d'appartenance identitaire chez Patrick Chamoiseau et Émile Ollivier" (モントリオール大学提出博士論文)

【Outline and objectives】

This course introduces the foundations of literature of French speaking world (especially in the Americas) to students taking this course. They can learn also the methodology of literary research while reading literary text and social context at the same time.

ナショナリズム／エスニシティ論A

石森 大知

サブタイトル：文化人類学の諸アプローチ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、ナショナリズム・エスニシティ論の中心的な理論や概念を文化人類学的視点から学ぶとともに、自らの興味関心あるいは学習・研究テーマと関連付けて考える能力を身につけることを目的とする。

【到達目標】

・ナショナリズム・エスニシティ論の中心的な理論や概念に関する専門的な知識を習得する。
・文献の内容をただ理解するだけでなく、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの研究テーマの構想・発展につなげる。
・ものごとを相対的に捉えることによって得られる他者理解の力や洞察力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

・本授業の開始日は4月22日とします。
・本授業は主に文献の輪読形式で行います。当面の間、「学習支援システム」を用いた授業とし、各自が自宅で文献を①「熟読」し、文献の②「要約」を行うとともに、③「ミニ課題」に答えるという形式をとります。
・春学期は、ナショナリズム・エスニシティ論に関する文化人類学の中心的な概念や理論を広く学ぶ（一方、秋学期は、伝統の創造、国民統合、反植民地運動、紛争と国家、国家からの逃避などのテーマに関する太平洋諸島や東南アジア等の民族誌を取り上げる）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------------|--------------------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の進め方とスケジュール、履修上の注意、自己紹介、各自の問題関心を発表 |
| 第2回 | エスニシティと国家① | エスニシティと国家の基本的な捉え方に関する講義 |
| 第3回 | エスニシティと国家② | エスニシティと国家の基本的な文献の発表およびグループ討論 |
| 第4回 | エスニシティと国家③ | エスニシティ論の研究動向を扱った文献の発表およびグループ討論 |
| 第5回 | エスニシティ・ナショナリズムの人類学① | 文献Aの1章の発表およびグループ討論 |
| 第6回 | エスニシティ・ナショナリズムの人類学② | 文献Aの2章の発表およびグループ討論 |
| 第7回 | エスニシティ・ナショナリズムの人類学③ | 文献Aの3章の発表およびグループ討論 |
| 第8回 | エスニシティ・ナショナリズムの人類学④ | 文献Aの4章の発表およびグループ討論 |
| 第9回 | エスニシティ・ナショナリズムの人類学⑤ | 文献Aの5章の発表およびグループ討論 |
| 第10回 | エスニシティ・ナショナリズムの人類学⑥ | 文献Aの6章の発表およびグループ討論 |
| 第11回 | エスニシティ・ナショナリズムの人類学⑦ | 文献Aの7章の発表およびグループ討論 |

- 第12回 エスニシティ・ナショナリズムの人類学⑧ 文献Aの8章の発表およびグループ討論
- 第13回 エスニシティ・ナショナリズムの人類学⑨ 文献Aの9章の発表およびグループ討論
- 第14回 総括 春学期のまとめと秋学期の準備

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
- ・図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
- ・自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
- ・本授業の準備学修・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

（文献A）トーマス・ハイランド・エリクセン『エスニシティとナショナリズム－人類学的視点から』鈴木清史訳、明石書店、2006年。

【参考書】

アントニー・D・スミス『ナショナリズムとは何か』庄司信訳、ちくま学芸文庫、2018年。
塩川伸明『民族とネイション－ナショナリズムという難問』岩波新書、2008年。
ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、書籍工房早山、2007年。
アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』加藤節訳、岩波書店。青柳まちこ編『「エスニック」とは何か－エスニシティ基本論文選』新泉社、1996年。
（以上のほか、授業時に適宜紹介します）

【成績評価の方法と基準】

授業（オンラインを含む）の取り組みや各種課題を「平常点（70%）」として重視するとともに、学期末に出す予定の「レポート（30%）」を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために授業支援システムを利用します。

【担当教員の専門分野】

<専門領域>文化人類学、オセアニア地域研究
<研究テーマ>オセアニア地域を主な対象とし、宗教運動、キリスト教信仰、植民地主義、地域紛争などに関する研究
<主要研究業績>
石森大知・丹羽典生（編）2019『宗教と開発の人類学－グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。
石森大知 2019「民族性から土着性へ－ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の一側面」『国際文化学研究』53:1-27。
石森大知 2019「新しいロトゥ」としてのバハーイー教－ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』45:1-18。

【Outline and objectives】

This course introduces the theories and concepts of nationalism and ethnicity from the perspective of cultural anthropology, and to acquire the ability to think in relation to students own research themes.

CUA500G1 - 202

ナショナリズム／エスニシティ論B

石森 大知

サブタイトル：民族・国家・エスニシティ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、ナショナリズム・エスニシティ論に関連するテーマを扱った民族誌を講読し、それらと自らの学習・研究テーマを関連付けて考える能力の習得を目指す。具体的には、伝統の創造、国家統合、国民文化、反植民地運動、紛争と国家、国家からの逃避などに関する民族誌を学ぶ。

【到達目標】

- ・太平洋諸島、東南アジア、アフリカ、日本など世界各地の民族誌の講読を通して、ナショナリズムおよびエスニシティの多様性・普遍性に関する洞察力を身につける。
- ・日本語だけでなく、英語の学術論文の内容を的確に理解できるようにする。
- ・文献の内容を理解することに加え、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの研究テーマの構想・発展につなげる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

本授業では、基本的に毎回発表者を立てる（主に履修者による発表・輪読の形式で授業を進めるが、適宜講義も取り入れる）。発表者はレジュメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------------|-----------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の進め方とスケジュール、授業の概要説明 |
| 第2回 | 伝統の創造論① | 文献Aの1章の発表およびグループ討論 |
| 第3回 | 伝統の創造論② | 文献Aの2章の発表およびグループ討論 |
| 第4回 | 反植民地運動と国民統合－太平洋の事例① | 太平洋の植民地主義と脱植民地化に関する講義 |
| 第5回 | 反植民地運動と国民統合－太平洋の事例② | 文献Bの第1部の発表およびグループ討論 |
| 第6回 | 反植民地運動と国民統合－太平洋の事例③ | 文献Bの第1部の発表およびグループ討論 |
| 第7回 | 民族紛争と国家① | 民族紛争に関する講義 |
| 第8回 | 民族紛争と国家② | アフリカの民族紛争に関する文献の発表およびグループ討論 |
| 第9回 | 単一民族幻想と先住民－日本の事例① | 単一民族幻想に関する文献の発表およびグループ討論 |
| 第10回 | 単一民族幻想と先住民－日本の事例② | 先住民に関する文献の発表およびグループ討論 |
| 第11回 | 国家からの逃避－東南アジアの事例① | 文献Cの1章の発表およびグループ討論 |
| 第12回 | 国家からの逃避－東南アジアの事例② | 文献Cの5章の発表およびグループ討論 |
| 第13回 | 国家からの逃避－東南アジアの事例③ | 文献Cの6章の発表およびグループ討論 |

第14回 総括

文献Cの結論、1年間に学んだことを振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
- ・図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
- ・自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
- ・本授業の準備学修・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

(文献A) エリック・ホブズボウム&テレンス・レンジャー編『創られた伝統』前川啓治、梶原景昭ほか訳、紀伊国屋書店、1992年。
(文献B) Robert J. Foster(ed.) Nation Making: Emergent Identities in Postcolonial Melanesia, 1997, University of Michigan Press.
(文献C) ジェームズ・C・スコット『ゾミア-脱国家の世界史』佐藤仁監訳、みすず書房、2013年。
(以上の文献を使用しますが、必ずしも購入する必要はありません)

【参考書】

丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの（紛争）-脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂、2013年。
ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体-ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、書籍工房早山、2007年。
端信行編『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9-民族の二〇世紀』ドメス出版、2004年。
小熊英二『単一民族神話の起源-「日本人」の自画像の系譜』新曜社、1995年。
関本照夫・船曳建夫編『国民文化が生まれる時-アジア・太平洋の現代とその伝統』リプロポート、1994年。
(以上のほか、授業時に適宜紹介します)

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度、発表・討論の内容などの平常点（70%）を重視するとともに、レジュメおよびレポートなど（30%）を総合的に判断して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために授業支援システムを利用します。

【担当教員の専門分野】

<専門領域>文化人類学、オセアニア地域研究
<研究テーマ>オセアニア地域を主な対象とし、宗教運動、キリスト教信仰、植民地主義、地域紛争などに関する研究
<主要研究業績>
石森大知・丹羽典生（編）2019『宗教と開発の人類学-グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。
石森大知 2019「民族性から土着性へ-ソロモン諸島紛争におけるイサタン解放運動の一側面」『国際文化学研究』53:1-27。
石森大知 2019「新しいロトゥ」としてのバハーイー教-ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』45:1-18。

【Outline and objectives】

This course introduces the theories and concepts of nationalism and ethnicity from the perspective of cultural anthropology, and to acquire the ability to think in relation to students own research themes.

CUA500G1 - 203

マイノリティ社会論A

曾 士 尚

サブタイトル：米国のアジア系移民

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

①アメリカにおける中国系移民集団、②トランスカルチュラルリズム概念に基づく移民研究、③ホスト社会での共生の可能性と課題、以上3点について分析し、理解を深める。

【到達目標】

中国系移民を主たる事例にマイノリティとしての移民集団の社会と文化、特に定着後のアイデンティティについての知見の獲得を目標にしている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

グローバル化の進展のもと、国際的規模の移民現象が近代以降見られるようになった。その特徴は個人が主体となって国境を越えて移動する点にある。本授業では、四大移民の一つである中国系移民について、移住の経緯、移住先である欧米におけるコミュニティの形成、第二世代以降のアイデンティティの変化、ホスト社会での民族共生などについて考察したい。今学期は、中国系移民の辿った歴史とともに、定着後の祭りや料理をテーマに、日系移民と比較しながら、考察したい。具体的には選定したテキストの講読と討論を織り交ぜて授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

| 春学期 | テーマ | 内容 |
|------|-------------------|--|
| 第1回 | 講義 1 イントロダクション | 授業の進め方の説明、分担決め |
| 第2回 | 講義 1 | 国際移民、エスニック文化主義、トランスカルチュラルリズム |
| 第3回 | 講義 2 | 米国におけるアジア系移民の略史 |
| 第4回 | 講読と討論 1-1 | ハワイ沖縄系コミュニティ、オキナワン・フェスティバル、エスニック・フード、先住民系文化との交差 |
| 第5回 | 講読と討論 1-2 | ハワイのオキナワ料理の創造、ハワイのアメラジアン |
| 第6回 | 小括と考察 | ハワイにおける日系移民やその集団の社会と文化について整理する。映像観賞。 |
| 第7回 | 講読と討論 2-1 | 移民国家アメリカの誕生 |
| 第8回 | 講読と討論 2-2 | 中国人移民と南北戦争・再建期、苦力、異教徒 |
| 第9回 | 講読と討論 2-3 | 「国民」の管理、排華法 |
| 第10回 | 講読と討論 2-4 | 中国系移民、日系移民と二つの世界大戦 |
| 第11回 | 講読と討論 2-5 | アジア系アメリカ人の戦後、モデル・マイノリティ |
| 第12回 | 講読と討論 2-6 | 米国生まれのチャプスイ、日本生まれのフォーチュンクッキー |
| 第13回 | 講読と討論 2-7 | ハワイの中国系のエスニック・フェスティバル |
| 第14回 | まとめと考察 | 米国における中国系移民やその集団の社会と文化について整理するとともに、中国系移民、日系移民の比較分析を試みる |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。授業日程と講読する論文名のリストは初回の授業で配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

A 白水敏彦編『移動する人びと、変容する文化-グローバル化とアイデンティティ』お茶の水書房 2008年（1章～4章：講読1の教材；5章：講読2-7の教材）
B 貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』岩波新書 2018年（各自で要購入）

【参考書】

江淵一公編『トランスカルチュラルリズムの研究』明石書店 1998年
S. カースルズ/M. J. ミラー『国際移民の時代（第4版）』名古屋大学出版会 2011年
ロバート・G. リー（貴堂嘉之訳）『オリエンタルズ：大衆文化のなかのアジア系アメリカ人』岩波書店 2007年

Lee, Jennifer B. (2008). The Fortune Cookie Chronicles: Adventures in the World of Chinese Food. Grand Central Publishing.

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加 70 %、期末レポート 30 %。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化人類学、中国民族学

<研究テーマ>華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ

<主要研究業績>

「日本残留中国人—札幌華僑社会を築いた人たち」今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、2016年

『落地生根—神戸華僑と神阪中華会館の百年<増補版>』研文出版、2013年(中華会館編、共著)

「華僑の民俗信仰」宮本袈裟雄・谷口貢編著『日本の民俗信仰』八千代出版、2009年

「在日華人社会の民俗文化」山下清海編『華人社会がわかる本—中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化』明石書店、2005年

【Outline and objectives】

This course deals with the history of Chinese migrant in the United States and their acculturation. It also deals with the history and acculturation of Japanese migrant in the United States.

At the end of the course, participants are expected to (1) obtain basic knowledge about maturing of migratory movement, (2) enhance the basic concept of transnationalism and ethnic culturalism.

CUA500G1 - 204

マイノリティ社会論B

曾 士才

サブタイトル：米国と中国の先住民民族

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

①現国民国家と少数民族、先住民民族、②マイノリティの文化とアイデンティティ、以上2点について分析し、理解を深めていく。

【到達目標】

現代世界とエスニシティを読み解く知見と力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

フランス革命後に誕生した国民国家がその後世界中に広まるなか、国家権力を握った強大な民族へ従属する地位に追いやられた少数民族集団は、不平等な状況下で、差別や偏見にさらされながらも、自らの文化の維持継承を図り、アイデンティティを追求してきた。今学期は、前半は綾部恒雄の説くエスニシティ概念と世界における先住民問題について概観する。後半では、アメリカ合衆国と中国における「再活性化運動」(revitalization movement)の事例に関するテキストを読みながら、受講者と議論し、考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------|-------------------------------|
| 第1回 | 講義 1 | イントロダクション、エスニシティ概念について |
| 第2回 | 講義 2 | アメリカ合衆国と中国における民族概況 |
| 第3回 | 講読と議論 1 | 米国の少数民族の事例①：イロクォイ、セミノールとミゴスキー |
| 第4回 | 講読と議論 2 | 米国の少数民族の事例②：ラコタ・スー、シャイアン |
| 第5回 | 講読と議論 3 | 米国の少数民族③：プエブロ、ナバホ |
| 第6回 | 講読と議論 4 | 中国の少数民族①：エヴェンキ族、オロチョン族 |
| 第7回 | 講読と議論 5 | 中国の少数民族②：シヨオ族、トゥチャ族 |
| 第8回 | 講読と議論 6 | 中国の少数民族③：ミャオ族、満族 |
| 第9回 | 講義 3 | 先住民問題の現状と課題 |
| 第10回 | 講読と議論 7 | 米国の再活性化運動①：ゴーストダンス |
| 第11回 | 講読と議論 8 | 米国の再活性化運動②：ペヨテ・カルト |
| 第12回 | 講読と議論 9 | 中国の再活性化運動①：シヨオ族のアイデンティティの模索 |
| 第13回 | 講読と議論 10 | 中国の再活性化運動②：ミャオ族の英雄塑像建造運動 |
| 第14回 | 講義とまとめの議論 | 先住民民族と再活性化運動 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。授業日程と講読する論文名のリストは初回の授業で配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テーマごとにプリントを配布

【参考書】

参考書・参考資料等

綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂 1993年

綾部恒雄編『アメリカの民族：ルツボからサラダボウルへ』弘文堂 1992年

末成道男、曾士才編『世界の先住民民族：ファースト・ピープルの現在 01 東アジア』明石書店 2005年

富田虎男、スチュアートヘンリ編『世界の先住民民族：ファースト・ピープルの現在 07 北米』明石書店 2005年

A.F.C.Wallace, "Revitalization movements," in *American Anthropologist*, New Series 58 : 1956

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加 70 %、期末レポート 30 %。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化人類学、中国民族学

<研究テーマ>

華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ

<主要研究業績>

「中国貴州省における生態博物館の二〇年」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス—中国南部地域の分析から』風響社 2016 年

「西南中国のエスニック・ツーリズム」鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶応義塾大学出版会、2009 年

「中華民族の多元一体構造」風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリティクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

「世界の先住民—ファースト・ピープルの現在 01 東アジア」明石書店、2005 年（共編著）

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts of nation-state and ethnic minority. It also deals with revitalization movement among ethnic groups in the United States and Mainland China. At the end of the course, participants are expected to (1) obtain basic knowledge about indigenous people of the United States and China, (2) enhance the concept and theory of ethnicity.

GDR500G1 - 205

ジェンダー論

佐々木 一恵

サブタイトル：ジェンダー史の展開

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ジェンダーの視点から歴史を捉えていきます。これまでのジェンダー史の取り組みや成果をたどるとともに、方法論としてのジェンダー史学について考察していきます。そこから、国際文化学におけるジェンダー史の研究論文を書いていけるようになることを目指します。

【到達目標】

1. ジェンダー史の視点や方法論について基礎的な理解ができるようになること。
2. ジェンダー史の視点や方法論を、自分自身の研究に応用できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

文献の検討と討論を通じて、問題を理解し共有する。

- (1) 文献中の重要な概念やキーワードについて予め調べておく。
- (2) 授業の中で、最低3つ文献に関する疑問点および議論すべき点を述べる。
- (3) 各自の研究に、授業で扱った諸問題をどのように取り込んでいけるか検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|--|---|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の概要に関する説明 |
| 第2回 | ジェンダー史とは何か (1) ・歴史学とジェンダー ・フェミニズム史学 | 【テキスト】 『ジェンダー史とは何か』第1章 【推奨文献】 ◎メアリー・ピアード『舌を抜かれる女たち』 ◎エステル・フリードマン『フェミニズムの歴史と女性の未来』 |
| 第3回 | ジェンダー史とは何か (2) ・ジェンダー史 | 【テキスト】 『ジェンダー史とは何か』第1章 【推奨文献】 ◎ジョン・W. スコット『ジェンダーと歴史学』 ◎L・ダヴィドフ、C・ホール『家族の命運』 |
| 第4回 | 身体とセクシュアリティ (1) ・セックスとジェンダー ・身体 | 【テキスト】 『ジェンダー史とは何か』第2章 【推奨文献】 ◎ヴィクトリア・ヴァントック『ジェット・セックス』 ◎シルヴィア・フェデリーチ『キャリアバンと魔女』 ◎バーバラ・エーレンライク、ディアドリー・イングリッシュ『魔女・産婆・看護婦』 |
| 第5回 | 身体とセクシュアリティ (2) ・セクシュアリティ ・売春と性病 | 【ジェンダー史とは何か』第2章 【テキスト】 【推奨文献】 ◎ミリアム・グラックスマン『「労働」の社会分析』 ◎ジュディス・R・ウォーコウィッツ『売春とヴィクトリア朝社会』 |
| 第6回 | 人種・階級・ジェンダー (1) ・慈善活動 ・奴隷制 | 【テキスト】 『ジェンダー史とは何か』第3章 【推奨文献】 ◎富永智津子、永原陽子編『新しいアフリカ史像を求めて：女性・ジェンダー・フェミニズム』 ◎マーガレット・シュトロベル『女たちは帝国を破壊したのか』 |

- 第7回 人種・階級・ジェンダー (2)
・植民地主義
『ジェンダー史とは何か』第3章
【テキスト】
【推奨文献】
◎徐智瑛『京城のモダンガール』
◎アイリス・バーガー、E・フランシス・ホワイト『アフリカ史再考：女性・ジェンダーの視点から』
第8回 男性と男らしさ (1)
・定義
・中世
・近世
【テキスト】
『ジェンダー史とは何か』第4章
【推奨文献】
◎アンガス・マクラレン『性的不能の文化史：“男らしさ”を求めた男たちの悲喜劇』
◎G・ヴィガレロ編『男らしさの創出：古代から啓蒙時代まで』
第9回 男性と男らしさ (2)
・近代
【テキスト】
『ジェンダー史とは何か』第4章
【推奨文献】
◎トーマス・キューネ編『男の歴史：市民社会と「男らしさ」の神話』
◎サビーネ・フリューシュトウック、アン・ウォルソール編『日本人の「男らしさ」：サムライからオタクまで「男性性」の変遷を追う』
第10回 政治文化のジェンダー史にむけて (1)
・革命の時代
【テキスト】
『ジェンダー史とは何か』第5章
【推奨文献】
◎オリヴィエ・ブラン『オランプ・ドゥ・グージュ：フランス革命と女性の権利宣言』
◎佐々木一恵『夢と憫察——中国革命のなかの『新女性』』
第11回 政治文化のジェンダー史にむけて (2)
・「国民」の理念
・戦争と市民権
【テキスト】
『ジェンダー史とは何か』第5章
【推奨文献】
◎ウェンディ・ロワー『ヒトラーの娘たち』
◎ニナ・シルバー『南北戦争のなかの女と男』
◎レギーナ・ミュールホイザー『戦場の性：独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』
第12回 「転回」以降の新潮流 (1)
・ポストモダンの「転回」
・主観性
【テキスト】
『ジェンダー史とは何か』第6章
【推奨文献】
◎ウーテ・フレーフェルト『歴史の中の感情：失われた名誉/創られた共感』
第13回 「転回」以降の新潮流 (2)
・接触
・移動と移民
【テキスト】
『ジェンダー史とは何か』第6章
【推奨文献】
◎ロンダ・シービンガー『植物と帝国：抹殺された中絶薬とジェンダー』
◎粟屋利江、松本悠子編著『人の移動と文化の交差』
第14回 まとめとレクチャー
・グローバル/トランス
・ナショナルな歴史
【推奨文献】
◎Motoe Sasaki, Redemption and Revolution.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめて準備してくる。

発表者はレジュメを作成する。

文献に関する疑問点および議論すべき点を、最低3つ準備しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ソニア・O・ローズ（長谷川貴彦・兼子歩訳）『ジェンダー史とは何か』法政大学出版局、2016年。

【参考書】

- ◎メアリー・ピアード（宮崎真紀訳）『舌を抜かれる女たち』晶文社、2020年。
◎L・ダヴィドフ、C・ホール（山口みどり、梅垣千尋、長谷川貴彦訳）『家族の命運：イングランド中産階級の男と女：1780～1850』名古屋大学出版会、2019年。
◎ヴィクトリア・ヴァントック（浜本隆三、藤原崇訳）『ジェット・セックス：スチュワードの歴史とアメリカの「女性らしさ」の形成』明石書店、2018年。
◎シルヴィア・フェデリーチ（小田原琳、後藤あゆみ訳）『キャリバンと魔女：資本主義に抗する女性の身体』以文社、2017年。
◎ウェンディ・ロワー（石川ミカ訳）『ヒトラーの娘たち：ホロコーストに担ったドイツ女性』明石書店、2016年。
◎ニナ・シルバー（兼子歩訳）『南北戦争のなかの女と男：愛国心と記憶のジェンダー史』岩波書店、2016年。
◎徐智瑛（姜信子、高橋梓訳）『京城のモダンガール：消費・労働・女性から見た植民地近代』みすず書房、2016年。
◎レギーナ・ミュールホイザー『戦場の性：独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』岩波書店、2015年。
◎バーバラ・エーレンライク、ディアドリー・イングリッシュ（長瀬久子訳）『魔女・産婆・看護婦：女性医療家の歴史』法政大学出版局、2015年。
◎ミリアム・グラックスマン（駒川智子[ほか]訳）『「労働」の社会分析：時間・空間・ジェンダー』法政大学出版局、2014年。

- ◎ジュディス・R・ウォーコウィッツ（永富友海訳）『売春とヴィクトリア朝社会：女性、階級、国家』上智大学出版、2009年。
◎エステル・フリードマン（安川悦子、西山恵美訳）『フェミニズムの歴史と女性の未来：後戻りさせない』明石書店、2005年。
◎アイリス・バーガー、E・フランシス・ホワイト（富永智津子訳）『アフリカ史再考：女性・ジェンダーの視点から』未來社、2004年。
◎ジョン・W・スコット（荻野美穂訳）『ジェンダーと歴史学』平凡社、2004年。
◎マーガレット・シュトローベル（井野瀬久美恵）『女たちは帝国を破壊したのか：ヨーロッパ女性とイギリス植民地』知泉書館、2003年。
◎ジューン・パーヴィス（香川せつ子訳）『ヴィクトリア時代の女性と教育：社会階級とジェンダー』ミネルヴァ書房、1999年。
◎ロンダ・シービンガー（小川真里子、弓削尚子訳）『植物と帝国：抹殺された中絶薬とジェンダー』工作舎、2007年。
◎ドロシー・トムズ（古賀秀男、小関隆訳）『階級・ジェンダー・ネイション：チャーティズムとアウトサイダー』ミネルヴァ書房、2001年。
◎富永智津子、永原陽子編『新しいアフリカ史像を求めて：女性・ジェンダー・フェミニズム』御茶の水書房、2006年。
◎トーマス・キューネ編（星乃治彦訳）『男の歴史：市民社会と「男らしさ」の神話』柏書房、1997年。
◎アンガス・マクラレン（山本規雄訳）『性的不能の文化史：“男らしさ”を求めた男たちの悲喜劇』作品社、2016年。
◎G・ヴィガレロ編（鷺見洋一監訳）『男らしさの創出：古代から啓蒙時代まで』藤原書店、2016年。
◎ジョージ・L・モッセ（細谷実、小玉亮子、海妻佳子訳）『男のイメージ：男性性の創造と近代社会』作品社、2005年。
◎サビーネ・フリューシュトウック、アン・ウォルソール編（内田雅克、長野麻紀子、栗倉大輔訳）『日本人の「男らしさ」：サムライからオタクまで「男性性」の変遷を追う』明石書店、2013年。
◎オリヴィエ・ブラン（辻村みよ子、太原孝英、高瀬智子訳）『オランプ・ドゥ・グージュ：フランス革命と女性の権利宣言』信山社、2012年。
◎ウーテ・フレーフェルト（櫻井文子訳）『歴史の中の感情：失われた名誉/創られた共感』東京外国語大学出版会、2018年。
◎粟屋利江、松本悠子編著『人の移動と文化の交差』明石書店、2011年。
◎佐々木一恵『夢と憫察——中国革命のなかの『新女性』』、石塚道子、田沼幸子、富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院、2008年。
◎Motoe Sasaki, Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Cornell University Press, 2016).

【成績評価の方法と基準】

- ・授業への貢献度・参加度 (30%)
- ・授業内での文献発表 (70%)

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
アメリカ合衆国史
<研究テーマ>
・20世紀転換期のニューヨークにおけるプロテスタンティズムと公共領域の再編
・アメリカ人女性の海外宣教運動
<主要研究業績>
「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー—女子教育とジャンヌ=ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イベロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリー—ナショナルを超えて』上智大学出版社、2018年。

Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).

“Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” The Japanese Journal of American Studies (no.23, 2012).

【Outline and objectives】

The course introduces an overview of the standpoints and methodologies of gender history so that students can develop the ability to examine issues of gender cross-culturally and inter-racially.

多言語社会論 A

大中 一彌

サブタイトル：現代ヨーロッパの基礎研究

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語圏やヨーロッパを中心とし、複数の言語や文化をめぐる関係性にフォーカスしながら、政治や社会について専門的に学びます。

【到達目標】

- ・使用言語は日本語とする。英語、フランス語など言語の運用能力の習得はこの授業の到達目標に入らない。
- ・必ずしも現代ヨーロッパについて専門的に学んだことのない方をふくめ、大学院生として研究をおこなうのに必要な教養を身につける。
- ・【教科書】 フランスの歴史についての基礎的な知識を得る。
- ・【映像】 時事問題などより現代的な話題と教科書で得た知識を関連づけられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

1. 教科書の輪読
2. 毎週の授業で簡単な話題提供（1人5分程度）
3. 映像の分析

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|---------------------|--------------------------|
| 1 | 初顔合わせ | 授業計画の説明 |
| 2 | パリはなんとと言っても花の都 | 教科書 4-8 頁の講読、学生による話題提供 |
| 3 | まとまりのよい国土 | 教科書 8-11 頁の講読、学生による話題提供 |
| 4 | 義務教育普及は日仏ともに | 教科書 12-18 頁の講読、学生による話題提供 |
| 5 | 家庭ではフランス語を話さない地方がある | 教科書 18-21 頁の講読、学生による話題提供 |
| 6 | 時代を逆に眺めるとだんだん減る国土 | 教科書 22-30 頁の講読、学生による話題提供 |
| 7 | 「国引き」の凄い話を一つ | 教科書 30-34 頁の講読、学生による話題提供 |
| 8 | フランス人の頭に入っている古代史の要点 | 教科書 34-38 頁の講読、学生による話題提供 |
| 9 | 他の地方ではわからない地方の心 | 教科書 38-41 頁の講読、学生による話題提供 |
| 10 | ケルト暮らしの長さは縄文暮らしに匹敵 | 教科書 42-46 頁の講読、学生による話題提供 |
| 11 | ローマ支配下の「ガロ＝ロマン」文明 | 教科書 46-50 頁の講読、学生による話題提供 |
| 12 | フランク族のガロ＝ロマン化 | 教科書 50-55 頁の講読、学生による話題提供 |
| 13 | ブルトン人がらみで仏英関係を見る | 教科書 55-60 頁の講読、学生による話題提供 |
| 14 | まとめ | 予備日 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- (ア) 教科書の次回の範囲を予習してきてください。
(イ) 指定するネット上の場所に、話題提供用のリンクを授業前に貼り付けてください。

【テキスト（教科書）】

篠沢秀夫『フランス三昧』中公新書、2006年。

【参考書】

鹿島茂編『パースデイ・セイント』飛鳥新社、2000年。

【成績評価の方法と基準】

- (ア) 期末試験：実施しない（0%）
(イ) 期末レポート：実施しない（0%）
(ウ) 授業への参加（30%）
(エ) 授業での話題提供（30%）
(オ) 教科書の予習への取り組み（30%）
(カ) その他（運営協力や講師のミスの指摘）（10%）

【学生の意見等からの気づき】

いわゆる「滑舌」が悪いので、学生の皆さんが聞きやすいように留意する。

【学生が準備すべき機器他】

※新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向けた、日本政府の緊急事態宣言を受け、法政大学ではキャンパスへの入構が禁止になっています。そのため、この授業では Google Hangouts Meet を利用した遠隔授業を当面のあいだ実施します。詳しいことは Hoppii を参照してください。

※ Google Classroom を使用します。クラスコードは 7276e7z です。法政大学から配られたメールアドレスを使ってログインしてください。

- ① 報告原稿の提出やさまざまな連絡は、基本的にすべてウェブ上（授業支援システム）で行ないます。
- ② パソコン、タブレット等を用いたプレゼンテーションを歓迎しています。
- ③ 学外から法政大学図書館のオンラインデータベースが利用できるよう、VPN 接続の使い方をマスターしてください。
- ④ 法政大学が提供している VPN 接続については「全学ネットワークシステムユーザ支援 WEB サイト / VPN サービス」を検索、参照してください。

【その他の重要事項】

- ① いわゆる日本の教育課程を経てきた大学院生だけでなく、外国大学を経て法政大学大学院に留学しにきている大学院生や研修生、各種コンソーシアムの大学院生、法政大学国際文化学部の学部生の履修を歓迎します。
- ② 学外の方でこの科目のみの聴講を希望される方は、科目等履修生としてご参加下さい。詳しくは法政大学大学院の事務窓口までお問合せ下さい。
- ③ 教科書となっている篠沢教授の文章は、初学者にわかりやすく、また人柄がしのばれて面白いですが、講師とは意見が異なる場合があります。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001982/profile.html>

【Outline and objectives】

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

ARSA500G1 - 207

多言語社会論 B

大中 一彌

サブタイトル：現代ヨーロッパの基礎研究

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語圏やヨーロッパを中心とし、複数の言語や文化をめぐる関係性にフォーカスしながら、政治や社会について専門的に学びます。

【到達目標】

- ・使用言語は日本語とする。英語、フランス語など言語の運用能力の習得はこの授業の到達目標に入らない。
- ・必ずしも現代ヨーロッパについて専門的に学んだことのない方をふくめ、大学院生として研究をおこなうのに必要な教養を身につける。
- ・【教科書】 フランスの歴史についての基礎的な知識を得る。
- ・【映像】 時事問題などより現代的な話題と教科書で得た知識を関連づけられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

1. 教科書の輪読
2. 毎週の授業で簡単な話題提供（1人5分程度）
3. 映像の分析

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------------|----------------------------|
| 第1回 | 新学期の顔合わせ | 授業計画の説明 |
| 第2回 | ノルマン人がらみで仏英関係を見る | 教科書 60-63 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第3回 | 国家観念の芽生えは百年戦争 | 教科書 64-71 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第4回 | ルネッサンスは神に人間の尊厳を主張 | 教科書 71-75 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第5回 | ナントの勅令は関が原の二年前 | 教科書 75-78 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第6回 | ブルボン王朝による国勢の得失 | 教科書 78-83 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第7回 | 大革命によるキリスト教の否定 | 教科書 83-90 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第8回 | 大革命の発明 「国民国家」と「徴兵制」 | 教科書 91-98 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第9回 | 世界一整然とした文法体系の謎★ | 教科書 100-104 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第10回 | ラテン語系だがアクセントはゲルマン系★ | 教科書 105-108 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第11回 | 文章体と日常会話の差は明治並み★ | 教科書 109-116 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第12回 | 文章のようにしゃべるのが口述試験★ | 教科書 118-122 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第13回 | キケロのラテン語か、兵士のラテン語か★ | 教科書 123-131 頁の講読、学生による話題提供 |
| 第14回 | まとめ | 予備日 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- (ア) 教科書の次回の範囲を予習してきてください。
 (イ) 指定するネット上の場所に、話題提供用のリンクを授業前に貼り付けてください。

【テキスト（教科書）】

篠沢秀夫『フランス三昧』中公新書、2006年。

【参考書】

鹿島茂編『パースデイ・セイント』飛鳥新社、2000年。

【成績評価の方法と基準】

- (ア) 期末試験：実施しない（0%）
 (イ) 期末レポート：実施しない（0%）
 (ウ) 授業への参加（30%）
 (エ) 授業での話題提供（30%）
 (オ) 教科書の予習への取り組み（30%）
 (カ) その他（運営協力や講師のミスの指摘）（10%）

【学生の意見等からの気づき】

いわゆる「滑舌」が悪いので、学生の皆さんが聞きやすいように留意する。

【学生が準備すべき機器他】

- ① 報告原稿の提出やさまざまな連絡は、基本的にすべてウェブ上（授業支援システム）で行ないます。
- ② パソコン、タブレット等を用いたプレゼンテーションを歓迎しています。
- ③ 学外から法政大学図書館のオンラインデータベースが利用できるよう、VPN 接続の使い方をマスターしてください。
- ④ 法政大学が提供している VPN 接続については「全学ネットワークシステムユーザ支援 WEB サイト / VPN サービス」を検索、参照してください。

【その他の重要事項】

- ① いわゆる日本の教育課程を経てきた大学院生だけでなく、外国大学を経て法政大学大学院に留学しにきている大学院生や研修生、各種コンソーシアムの大学院生、法政大学国際文化学部の学部生の履修を歓迎します。
- ② 学外の方でこの科目のみの聴講を希望される方は、科目等履修生としてご参加下さい。詳しくは法政大学大学院の事務窓口までお問合せ下さい。
- ③ 教科書となっている篠沢教授の文章は、初学者にわかりやすく、また人柄がしのばれて面白いですが、講師とは意見が異なる場合があります。
- ④ この授業は、秋学期（後期）のみでも受講できます。
- ⑤ 【授業計画】で★マークが付いている内容は、履修者と相談の上、他の内容で置き換える場合があります。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001982/profile.html>

【Outline and objectives】

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

多民族共生論 I A

松本 悟

サブタイトル：開発と先住/少数民族

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業のテーマは「開発と少数民族」である。主に開発途上国の先住民族を取り上げる。「開発」が先住民族を初めとする少数民族の生活や考え方にどのような影響を与えてきたのかを文献から読み取り、学際的な視点から共生のあり方を考え議論する。

【到達目標】

- (1) 民族とは何か、先住民族とはどのような人々を指すのかを既存文献から多角的に説明できるようにする。
- (2) 近代以降の「開発」が少数民族や先住民族に与えた影響を分析する切り口（視点）を複数身につける。
- (3) 当該分野の専門的な文献（日本語と英語）を読んで理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

授業の細かい進め方や課題については、学習支援システムの教材に投稿する第1回授業レジュメ（4/23にアップします）の中で説明します。以下はおおまかな進め方ですが、実際に学生が発表担当するやり方は第3回（5/7）から始めます。第2回（4/30）は練習として教員が発表します。事前課題はありませんが、履修者は以下に説明する「議論」を学習支援システム上で行って下さい。なお、場合によっては、以下の（3）議論の部分については、Web会議システムを使った双方向授業で行う可能性もありますので、木曜日4限は空けておいて下さい。

(1) 事前課題：その週に指定した文献（20頁程度を想定）を事前に熟読し、「この文献から重要だと考えた点」を最低3つ、そう考えた理由とともに学習支援システムの掲示板に設定した「事前課題」にアップして下さい。分量は800字程度、締め切りは授業の2日前（火曜日22時）とします。

(2) 担当者の発表：毎週の発表担当者は、事前課題にアップされた文書を踏まえて、その文献の重要な点を理由とともに整理して下さい。そのうえで、課題文献の論点（異なる意見が存在しそうで、それを議論することに意味があること）を考えて下さい。発表担当者はこれらのポイントを「音声入りパワーポイント」（15分程度）にまとめて学習支援システムに授業時間（木曜日15時）までにアップロードして下さい。

(3) 議論：発表担当者が挙げた論点について、履修者はそれぞれの意見を学習支援システムに「返信」として書き込んで下さい。意見は1回だけでなく、なるべくやり取りの形で進めて下さい。発表担当者は、議論を喚起するように意見を書き込んで下さい。この議論を金曜日22時まで続けます

(4) 講評：金曜日22時までの議論を踏まえて、教員が講評やコメント、追加の授業をアップします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|----------------|--|
| 1 | イントロダクション | 春学期の授業の狙いを説明し、院生の関心を引き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。 |
| 2 | 民族とは | 民族の定義と虚構性について議論する。 |
| 3 | 先住民族（先住民）とは | 先住民族とはどういう人々のことなのかを理解し考える。 |
| 4 | 開発と先住民族 | 開発学や人類学におけるこのテーマの研究動向についてレビューし議論する。 |
| 5 | 民族という政治 | ベトナムの民族確定作業と生活支援援助政策を通して民族の政治性を考える。 |
| 6 | 先住民族と貧困 | 貧困の定義を通じて先住民族の貧困を考える。 |
| 7 | 先住民族と教育 | タイとグアテマラを例に言語を含めた教育が先住民族社会に及ぼす影響について考える。 |
| 8 | 先住民族と資源 | タイの「森の民」カレン民族とエコツーリズムを通じて資源に対する先住民族の権利について考える。 |
| 9 | 先住民族と医療 | 開発途上国での感染症の発生源を探ることで医療と先住民族について考える。 |
| 10 | 先住民族と定住化・開発避難民 | 定住化などよりよい生活を目的とした開発が「避難民」を生み出す例から先住民族にとっての開発の意味を考える |

| | | |
|----|---------------|---|
| 11 | アイヌ民族と開発 | 日本における「開発と先住民族」の歴史と課題を考える。 |
| 12 | 単一民族神話と日本の近代化 | 日本の「単一民族」神話の起源をたどりながら近代化と多民族国家の言説を考える。 |
| 13 | 先住民族から見た現代世界 | 現代の視点で先住民族を見るのではなく、先住民族からの視点で現代社会を見ることで開発の意味について考え直す。 |
| 14 | 総合討論 | 授業を通して読んだ文献を横断的に分析し、開発と民族を考える際に重要な切り口について議論する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前課題と議論は時間をかけて行って下さい。また発表担当者は、音声入りパワーポイントの準備を行って下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

英語と日本語の文献を授業支援システムを通じて配布。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①事前課題 30%（文献の正しい理解、重要な点の説明の妥当性）
- ②発表内容 40%（パワーポイントの内容の妥当性、論点の合理性）
- ③議論 30%（書き込んだ意見の分量、論理性、議論のファシリテートへの貢献）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

- ・少数民族が多く暮らす東南アジアの開発現場に長く関わっている教員が、自らの経験をもとに課題文献や発表者へのコメントを行います。
- ・受講者の人数や語学力によって課題文献は柔軟に対応する予定です。また受講者の研究に関する議論も柔軟に組み入れる予定です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際組織、開発援助、NGO

<主要研究業績>

『調査と権力』（単著、東大出版会、2014年）

『NGOと世界銀行』（共編著、ミネルヴァ書房、2012年）

『人々の資源論』（共著、明石書店、2008年9月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005年9月）

【Outline and objectives】

The Theme of this course is "development and ethnic minorities" particularly, indigenous people in the lower and middle income countries (so-called developing countries). It focuses on impacts of "development" on their livelihoods and their ways of thinking.

SOS500G1 - 209

多民族共生論 I B

松本 悟

サブタイトル：国際開発機構と先住/少数民族

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は「先住民族と国際規範」をテーマとし、国際連合や国際開発機関、民間銀行の国際協会などの宣言や政策が形成された過程やその実効性を批判的に読み解きながら、先住民族など多民族が共生できる国際社会に向けた規範のあり方を考える。

【到達目標】

- (1) 先住民族の権利を守る国際規範の形成史を説明できる。
- (2) 実際の規範がどのように実務に適用されているかを批判的に分析できる。
- (3) 当該分野の専門的な文献を読んで要点を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

課題文献を中心に行う授業と、ケーススタディをもとに議論する授業の2本立てで行う。毎回の担当者は課題文献やケーススタディをもとに論点や分析を発表し、それをもとに議論をファシリテートする。他の受講者は課題文献やケーススタディで重要だと考えた点を授業開始時に発表する。毎回の授業は、受講者の発表、担当者の発表、討議、教員による補足講義からなる。また、ケーススタディの一環として関係する機関への聞き取り調査を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------------------|--|
| 1 | イントロダクション | 授業の狙いを説明し院生の関心を聞き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。発表の担当者を決める。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。 |
| 2 | 民族について | 春学期の多民族共生論 IA の復習を兼ねて民族という概念について考える。 |
| 3 | 国際規範の形成 | 国連先住民族権利宣言や FPIC を通して国際社会の規範がどのように作られるのかを考える。 |
| 4 | 開発協力と先住民族 | 開発協力において先住民族への配慮を真剣に考えるようになった問題プロジェクトを映像で振り返り、今後の論点を抽出する。 |
| 5 | 世界銀行と先住民族 | 世界銀行の先住民族政策についてその歴史と妥当性を議論する。 |
| 6 | 世界銀行の事例 | 第4回の授業で扱った政策が実際のプロジェクトでどのように順守されているのか（いないのか）を考える。 |
| 7 | 日本の ODA の環境社会配慮政策 | 日本の円借款の環境社会配慮政策を世界銀行と比較して考える。 |
| 8 | 日本の政府開発援助の事例 | 第6回の授業で扱った政策が実際のプロジェクトでどのように順守されているのか（いないのか）を考える。 |
| 9 | 企業の海外進出を支援する輸出信用機関の政策 | 日本の国際協力銀行（JBIC）の環境社会配慮政策を世界銀行や ODA と比較して考える。 |
| 10 | 日本の輸出信用機関（JBIC）の事例 | 第8回の授業で扱った政策が実際のプロジェクトでどのように順守されているのか（いないのか）を考える。 |
| 11 | 赤道原則 | 世界中の民間金融機関で作る赤道原則協会を通して民間企業の規範形成について国際機関との対比をしながら考える。 |
| 12 | NGO と先住民族 | 先住民族に関わる2つのタイプの NGO（プロジェクト、アドボカシー）から市民社会の影響について考える。 |
| 13 | 「新興ドナー」と先住民族 | 中国などの新興ドナーの先住民族配慮について伝統ドナーと比較して考える。 |
| 14 | 総合討論 | ここまでの授業を横断的に捉えなおし、先住民族の権利を守るための国際規範について考える際の重要な視点について議論する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回授業の前に課題文献を出すので、必ずそれを読んだ上で授業に出席すること。発表担当者は課題に沿ってレジュメを作成すること。他の受講者は課題文献から考えた重要な点を授業の冒頭で発表すること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

毎回授業支援システムから提供する。

【参考書】

松本悟（2014）『調査と権力』東京大学出版会。
松本悟編（2003）『被害住民が問う開発援助の責任』築地書館。

【成績評価の方法と基準】

平常点 30%、授業での発表 40%、討議への参加度 30%をベースとして総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムを活用する。発表ではパワーポイントを使用してもよい。

【その他の重要事項】

- ・国際金融機関の先住民族政策を含むセーフガード政策の改善を働きかける活動に NGO 職員として関わっていた教員が、その経験を発表へのコメントや補足講義に活かす。
- ・受講生の研究テーマ、人数、語学力に応じて授業内容を柔軟に変更する予定である。受講予定者は第1回授業に必ず出席すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 国際開発研究
<研究テーマ> 影響評価、国際機構論、国際協力学
<主要研究業績>
『調査と権力』（単著、東京大学出版会、2014年）
『NGO から見た世界銀行』（編著、ミネルヴァ書房、2013年）
『映画で学ぶ国際関係 II』（共著、法律文化社、2013年）
『人々の資源論』（共著、明石書店、2008年9月）
『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005年9月）

【Outline and objectives】

The theme of this course is indigenous people and international norms. It will enable students to critically understand the historical development and the application for the projects of international norms to protect indigenous peoples' rights in relation to not only international development cooperation but also international finance or foreign investment.

国際ジャーナリズム論

神林 毅彦

サブタイトル：多様性社会における報道の役割

3) "In Japan, baby-at-work fuss highlights deeper issue: few women in politics" 2018年2月、The Christian Science Monitor

【Outline and objectives】

The theme of this course is theories of international journalism in information age. This course provides opportunities for students to critique news coverage in Japanese and foreign media outlets and discuss mainly the impact of social media; foreign policy and journalism; and political, economic and social factors influencing media content.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業のテーマ — 国際報道の現状、必要性を分析し、その問題点や対策等を重点的に議論する。下記が主な内容となる。

1. 国内メディアとさまざまな海外メディアの報道比較、SNSの影響 2. 外交とジャーナリズム 3. 国際報道にみられる政治的、経済的、社会的影響

【到達目標】

変化し続ける現代の情報環境と国際報道の現状、そして、問題点に関して、論理的に説明する。単に受動的に情報を受け取るのではなく、積極的に情報を収集でき、かつ、効果的な情報発信も行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

海外メディアが報じる日本、また、日本、海外メディアの国際報道を検証しながら、ジャーナリズムの本来の役割について議論する。また、国際ニュースとなる要素、その影響についても議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり/Yes

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------------|----------------------|
| 第1回 | イントロダクション | 国際報道の役割、国際ジャーナリズム論 |
| 第2回 | メディアの特性（Ⅰ） | 国際ニュースの要素 |
| 第3回 | メディアの特性（Ⅱ） | 国際報道と国際問題 |
| 第4回 | メディアの特性（Ⅲ） | 国際報道の影響、ジャーナリズムの倫理問題 |
| 第5回 | 日本における海外メディア | 記者クラブ問題、クロスオーナーシップ |
| 第6回 | 国際ジャーナリズム（Ⅰ） | 環境問題と報道 |
| 第7回 | 国際ジャーナリズム（Ⅱ） | 難民問題と報道 |
| 第8回 | 国際ジャーナリズム（Ⅲ） | 日本とアジア諸国との関係と報道 |
| 第9回 | 国際ジャーナリズム（Ⅳ） | 領土問題に関する報道 |
| 第10回 | 国際ジャーナリズム（Ⅴ） | 歴史問題に関する報道 |
| 第11回 | フィールドワーク | インタビュー、取材 |
| 第12回 | 国際ジャーナリズム（Ⅵ） | 経済、貿易問題と報道 |
| 第13回 | 国際ジャーナリズム（Ⅶ） | 原発問題に関する報道 |
| 第14回 | 今後の国際報道 | 情報、インターネット時代の国際報道 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

さまざまな国際報道に目を向け、客観的な批評をする。直近のニュースに関して、報道の仕方、背景などを周囲の人と話し合う。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

ビル・コヴァッチ、トム・ローゼンスティール「ジャーナリズムの原則」日本経済評論社 2002年（原書 The Elements of Journalism）
The Christian Science Monitor, The New York Times, The Financial Times, Independent Web Journal, Xinhua News Agency, Yonhap News, NHK

【成績評価の方法と基準】

平常点 70%、レポート（内容評価） 30%

【学生の意見等からの気づき】

以前は、授業で配布する記事、資料、また、授業中に扱う海外の報道番組は英文がほとんどだったが、学生の英語力に個人差があるため、日本語の記事、資料を増やしている。
映画監督や福島原発事故避難者とのインタビューなどは積極的に参加していた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ジャーナリズム論

<研究テーマ> 国際ジャーナリズム論、ジャーナリズム倫理

<主要研究業績>

1) Chapter "Japan's Ethnic Koreans: 'Good Koreans or Bad Koreans. Kill Them Both!'" The Strangers Among Us," 2016, Createspace Independent Pub,

2) 「反基地運動を弾圧する不当な拘束の日々」「部落解放」2018年2月号、解放出版社

HIS500G1 - 215

国際文化交流論Ⅱ A

木村 真

サブタイトル：人の移動現象にアプローチするさまざまな方法

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、さまざまな形態の人の移動が地域社会やさまざまな人間集団に与えた影響を考察します。人の移動は近現代の世界に限られた現象ではありませんが、とくに、19世紀以降の国民国家形成過程、都市化や近代化の過程、世界各地の紛争のなかで見られた出稼ぎ、国外・国内移住、強制的な住民交換、政治的亡命などの移動現象と人々のネットワーク、人々の帰属意識、さらに国家による政策の関心に注目します。それによって、現代社会で生じている多様な、多面的な移動現象の理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

- ①国民国家形成過程の人の移動について、多面的な理解を修得すること
- ②住民交換政策の地域社会に与える影響についての知見を得ること
- ③人々の多様な形態の移動にともなう送り出し地域、受け入れ地域の人々の文化的影響に関する知見を得ること
- ④以上のテーマについて、とくに歴史研究や地域研究の方法を学ぶこと

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

近代バルカン、東欧の事例を中心に担当者が講義も行いますが、受講者全員で関連文献、論文を読み、発表をしてもらいます。また、受講者の専門地域もしくは関心を持つ地域の事例について報告発表もしてもらう予定です。各授業の内容について質問、意見をリアクションペーパーの形で提出してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------------------|-------------------------------|
| 第1回 | オリエンテーション | 授業の進め方について |
| 第2回 | 近代の東欧、バルカン社会（1） | 東欧、バルカン地域における国民国家形成以前の人の移動 |
| 第3回 | 近代の東欧、バルカン社会（2） | 帝国内の各地、ならびに帝国内外を結ぶさまざまな人の移動 |
| 第4回 | 国民国家形成過程と人の移動（1） | バルカン地域における国民国家形成のプロセス |
| 第5回 | 国民国家形成過程と人の移動（2） | 国家形成にともなう人の移動（武装勢力、軍隊、住民移動など） |
| 第6回 | 国民国家形成過程と人の移動（3） | 国家形成にともなう人の移動（出稼ぎ、季節労働など） |
| 第7回 | 国民国家形成過程と人の移動（4） | 国家形成にともなう人の移動（労働移民など） |
| 第8回 | 国民国家形成過程と人の移動（5） | 国家形成にともなう人の移動（亡命など） |
| 第9回 | 紛争と人の移動（1） | 紛争にともなう人の移動と国家の対応（住民交換） |
| 第10回 | 紛争と人の移動（2） | 紛争にともなう人の移動と国家の対応（強制移住） |
| 第11回 | 紛争と人の移動（3） | 紛争にともなう人の移動と国家の対応（難民） |
| 第12回 | 移動する人々の帰属意識（1） | 帰属意識の構築 |
| 第13回 | 移動する人々の帰属意識（2） | 重層的な帰属意識 |
| 第14回 | 人の移動をめぐる研究から得られる知見 | 人の移動をめぐる歴史学的な研究アプローチの可能性と限界 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告発表に際しては、あらかじめ、関連する文献を読み、レジュメを作成準備することを求めます。また、発表者以外の参加者も、関連する概念、事象などについて調べることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の関心に即して決めるつもりです。さしあたり、下記の文献を素材とする予定です。テキストはこちらでコピーを準備します。

Ulf Brunnbauer(ed.) *Transnational Societies, Transnational Politics. Migration in the (Post-)Yugoslav Region, 19th-20th Century.* Munchen, 2009.

【参考書】

授業において指示します。さしあたり、以下のものを挙げます。

ノーマン・M・ナイマーク『民族浄化のヨーロッパ史』刀水書房、2014年

山本明代、バブ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』刀水書房、2017年

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業における発表、ならびに議論への参加）（50%）、レポート課題（50%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】

今回はありません。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉バルカン近現代史、東欧地域研究

ブルガリア史、南スラヴ地域を中心に、バルカン近現代史、東欧地域研究を専門としております。現在は授業のテーマでもある南東ヨーロッパ地域の近現代の人の移動を研究しています。また、東欧地域の史学史研究にも関心を持っております。

〈主要研究業績〉

『バルカン史と歴史教育』（共著）2008年 明石書店

『東欧地域研究の現在』（共著）2012年 山川出版社

『移動がつくる東中欧・バルカン史』（共著）2017年 刀水書房

【Outline and objectives】

I will examine the influence that various forms of migrations have exerted on regions and human groups in modern times. Since the 19th century in the process of nation-state building, urbanization and industrialization, and conflicts different forms of migrations have been seen. I will take some cases of migrations to deepen understanding of diversity of migrations.

比較宗教文明論

白杵 陽

サブタイトル：イスラームなどの一神教と日本

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

イスラーム国（IS）は壊滅したものの、宗教・宗派・民族紛争は世界中で続いている。ヨーロッパではシリア内戦からの難民に対する排斥運動が続いている。トランプ米政権は「アメリカ・ファースト」を前面に押し出して今後世界がどんな方向に向かうのか、見えてこない。授業では、日本社会で宗教がどんな意味を持っているのかを出発点として世界の宗教紛争の現状を具体的な問題をとり上げながら検討していく。

【到達目標】

イスラーム世界を含む現代の宗教紛争を考える際に重要な点は、欧米社会に特徴的に見られる宗教を個人の信仰として捉えるのではなく、共同体あるいは社会における機能に注目して考えることである。文明として宗教を捉えるということはわれわれが現代社会における宗教現象を理解するうえでも重要な視点である。宗教文明における衝突はその教義のちがいでいうよりも、それぞれの宗教文明がそれぞれの歴史的過程を経て、その現在が形成されてきたということでもある。したがって、宗教文明を比較の視点から捉えるということは、現在の状況を歴史的な観点からプロセスとして読み直す作業でもある。したがって、宗教の名の下でのテロなどをたんに野蛮で時代錯誤的としてみるのではなく、現代における歴史的過程の帰結という観点からも考え直してみるということである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

出席者数によるが、テキストを決めて演習の形式で進めていくことを原則としたい。必要に応じて、DVDなどの映像資料などを用いながら、「宗教」に関していったい何が問題なのかを含めて考えていくことにしたい。まずは「多神教」といわれる日本社会にとって「宗教」とは何かを考えていき、参加者の関心によってイスラームやユダヤ教などの「一神教」の世界へと話を移していきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------------------------------|--|
| 第1回 | イントロダクション | この授業で何を学んでいくのか。 |
| 第2回 | なぜ日本人は無宗教なのか？①日本人の宗教観 | 近現代に注目して日本人の宗教観がかなるものなのかについて考える。 |
| 第3回 | なぜ日本人は無宗教なのか？②明治期から太平洋戦争まで | 明治期から太平洋戦争までの日本人にとっての「宗教」とは何かを考える。 |
| 第4回 | なぜ日本人は無宗教なのか？③戦後日本 | 戦後日本の日本人にとっての「宗教」の変容について考える。 |
| 第5回 | なぜ日本人は無宗教なのか？④9・11事件後 | 9・11事件後の日本人のイスラーム観を考える。 |
| 第6回 | 日本と中東イスラーム世界の関係①明治・大正期 | 明治・大正期の日本・イスラーム関係史を考える。 |
| 第7回 | 日本と中東イスラーム世界の関係②戦前昭和期 | 戦前昭和期の日本・イスラーム関係史を考える。 |
| 第8回 | 日本と中東イスラーム世界の関係③大川周明の初期イスラーム研究 | 国家主義者の大川周明の青年期のイスラーム神秘主義研究について考える。 |
| 第9回 | 日本と中東イスラーム世界の関係④大川周明晩年のコーラン研究 | 国家主義者の大川周明の晩年のコーランの翻訳、その研究について考える。 |
| 第10回 | 日本人のユダヤ人観①戦前期 | 戦前日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義 |
| 第11回 | 日本人のユダヤ人観②戦後期 | 戦後期日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義 |
| 第12回 | 日本人のユダヤ人観③欧米との相違 | キリスト教徒の多い欧米と日本のユダヤ人観観はどのように違うのか？ |
| 第13回 | 日本人のユダヤ人観④イスラーム世界 | 同じ一神教のイスラーム世界のユダヤ人観はキリスト教世界とどのように違うのか？ |
| 第14回 | まとめ | 総括討論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

中東イスラーム世界、とりわけイスラーム主義あるいはテロはいつ起こるか分からない。したがって、毎日、新聞、テレビ、インターネットでニュースをチェックする習慣をつけてほしい。また、日々起こる事件の表層だけではなく、その底流に流れる事態の本質をきちんと見極める眼力を養ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996年。
 島蘭進『国家神道と日本人』岩波新書、2010年。
 白杵陽『イスラームはなぜ敵とされたのか』青土社、2009年。
 白杵陽『大川周明—イスラームと天皇のはざま』2010年。

【参考書】

井筒俊彦『イスラーム文化』岩波文庫、1991年。
 井筒俊彦『コーランを読む』岩波現代文庫、2013年。
 大川周明『回教概論』ちくま学芸文庫、2008年。
 大川周明『復興亜細亜の諸問題』中公文庫、2016年。

【成績評価の方法と基準】

授業内における報告および質疑応答など積極的な姿勢をもって参加しているかによって評価する（40%）。期末にはレポートを提出してもらう（60%）。

【学生の意見等からの気づき】

院生諸君との授業内でのコミュニケーションによって授業のあり方を検討する機会をもつことにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中東地域研究、宗教・エスニック問題
 <研究テーマ>パレスチナ／イスラエル紛争、日本の対中東関係、とりわけ聖地問題
 <主要研究業績>『見えざるユダヤ人』（平凡社）『原理主義』（岩波書店）、『大川周明』（青土社）『イスラエル』（岩波新書）、『イスラームはなぜ敵とされたか』（青土社）『アラブ革命の衝撃』（青土社）『世界史の中のパレスチナ問題』（講談社現代新書）など。

【Outline and objectives】

Religious, sectarian and ethnic conflicts still continue in the world after Islamic State (IS) disappeared. In Europe, there are expulsion movements against refugees from the Syrian civil war etc. In such situations, the US President Donald Trump announced "American First" policies. We cannot expect what would happen in the world in the near future. In this lecture, we will discuss world's religious and ethnic conflicts in the world especially focusing upon the Middle East after what happens concerning religion in Japanese society.

FR1500G1 - 301

多文化情報空間論 I A

森村 修

サブタイトル：〈承認〉と〈差異〉の社会哲学

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業の概要】

2000年代になってにわかに議論が喧しくなってきた哲学的問題に、「反出生主義（Antinatalism）」がある。端的に言えば、「生まれてこないほうが良かった」という思想である。それゆえ、「反出生主義」とは、「存在してしまうことの害悪」をなるべく減らすために、将来生まれてくる可能性のある人々の誕生を防ぐことは道徳的に正しいという議論である。

哲学的に見れば、「反出生主義」の思想は、19世紀の哲学者アルトゥル・ショーペンハウアー（1788-1860）のペシミズムに遡ることができる。彼の影響のもとに、ニーチェは、『悲劇の誕生』のなかで、「人間にとってもっとも善いことは、生まれなかったこと、存在しないこと、何者でないことだ。次に善いことは、すぐに死ぬことだ」と書き記している。

こうした「反出生主義」が再び議論を巻き起こしている背景には、デイヴィッド・ベネター（南アフリカ・ケープタウン大学准教授）が『生まれてこなかったほうが良かった——存在してしまうことの害悪（David Benatar, *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*）』（2006）を出版したことがある。森岡正博によれば、ベネターは、基本的にはショーペンハウアーの『意志と表象の世界』（1819 正編/1843 続編）の思想を引き継いでいるが、彼が「反出生主義」を分析哲学の手法を用いて哲学のテーマとしたことである。

そこで2020年度の本授業は、ベネターのテキストを取り上げ、「反出生主義」の思想を考察することにしたい。

【授業の目的】

本授業の目的は、ベネターの『生まれてこないほうが良かった』を検討することによって、「反出生主義」の現代的意義を考察する。ちなみにベネターによれば、生まれてくる人たちの誕生を防ぐことによって、この世界の害悪を減らしていくことが重要であり、それゆえ、人工妊娠中絶は肯定される。最終的に、彼は「人類は絶滅したほうがよい」という結論に至る。

そこで本授業では、第一に、「たとえ質の高い人生であったとしても、私たちの人生は非常に悪いものだ」というベネターの主張に対する反論を検討する。

第二に、どのような意味で、ベネターの「反出生主義」を否定する「誕生肯定の哲学」（森岡正博）は可能かを検討する。結果的に、私たちは「生まれてきたほうがよかった」といえるのかという問題を哲学的に検討する。

【到達目標】

- ①ベネターの「反出生主義」の思想を学ぶことができる。
- ②哲学的なテキストを読むことができる。
- ③レジュメを書くことができる。
- ④ベネター以外の「反出生主義」の思想を学ぶことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- (1) 基本的に「演習」形式で行う。
 - (2) 毎回、担当者を決め、レジュメを作成してもらう。
- ◆レジュメには、①担当箇所の翻訳と解説、②用語説明、③考察、④問題点を記載する。
- (3) 授業の進め方
 - ①特定質問者を決めて、担当者の発表に対して、質問を行う。
 - ②それ以外の授業参加者と教員を含めて質疑を行い、問題点について議論する。

【授業開始日】

4月27日（月）5時限（16:50-18:30）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|------------|------------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | ・授業の進め方についての説明 ・発表の順番等の決定 |
| 第2回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第3回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第4回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第5回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第6回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |

| | | |
|------|------------|----------------------|
| 第7回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第8回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第9回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第10回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第11回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第12回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第13回 | テキストの講読と議論 | ・担当箇所の読解 ・教員による解説 |
| 第14回 | テキスト全体の総括 | ・まとめと秋学期の準備 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・担当者は、テキストの該当箇所のレジュメを発表前日までに教員に提出すること。
- ・特定質問者は、テキストの該当箇所に関する質問を3つ以上考え、簡単な質問表を作ってくる（発表当日でよい）
- ・それ以外の参加者は、該当箇所について質問を1つは考え、当日の議論に参加する準備をすること。

【テキスト（教科書）】

- (1) デイヴィッド・ベネター『生まれてこないほうが良かった——存在してしまうことの害悪』、すずさわ書店、2017年
- (2) David Benatar, *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*, Oxford University Press, 2006.

【参考書】

- (1) 「特集 反出生主義を考える——「生まれてこないほうが良かった」という思想」、『現代思想』、青土社、2019年11月号
 - (2) 吉沢文武「ベネターの反出生主義をどう受けとめるか」、『現代思想』「特集 倫理学の論点23」所収、青土社、2019年9月号
- ◆その他については、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・個別報告発表（50%）（回数および内容による評価）
 - ・特定質問担当（30%）（質問内容による評価）
 - ・討論参加（20%）（内容による評価）
- ※ 以上に基づいて、総合的に評価する。
- ※ なお、無断欠席は認めない。

※要注意【変更】

春学期の少なくとも前半がオンライン開講となったことに伴い、成績評価の方法と基準も変更する。具体的な方法と基準は、授業開始日に学習支援システムで提示する。

初回授業日に、その時点での成績評価の方針について、「学習支援システム」で受講者に通知する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

最近の大学院生の中には、基本的なテキスト読解が不十分な者が見受けられる。テキストを「読む」というのは、テキストを「読み解く」のであって「読み込む」のではないことは肝に銘じるべきである。「読み込む」ということは、自分の考えをテキストに投影することであり、それは単なる勝手な解釈に過ぎない。それでは、真にテキストを「読解する」ことにならない。あくまで「虚心坦懐」にテキストに向かい、「眼光紙背を徹する」態度でテキストに向かわなければ、哲学的なテキストを「読む」ことはできない。

また、担当者はレジュメを作成する上で、引用されているテキストはもちろん、それ以外にも用語・概念などについて、徹底的に下調べを行うべきである。担当者以外に対して、教員から授業中に質問することが多々あるので、担当者と同様に準備を怠らないでほしい。

演習とは practice（=実践）を意味しているものであり、テキストを「読む」という実践は五感を十分に活用することです。授業に参加する皆さんは、哲学を「実践する」態度で臨んでもらいたい。

【受講上の注意】

本授業は、哲学・倫理学、思想の分野に深くコミットしているために、自身の思考の鍛錬を要する。テキストを読むこと、それに基づいて自分の思考を実践すること、これらの作業は哲学研究にとって必須のものとして心掛けてほしい。単に、カルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアリズム研究などとは異なるので、注意を要する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代哲学（現象学・構造主義以後のフランス哲学）・現代倫理学（ケアの倫理学・応用倫理学）

<研究テーマ> 生命体・地球を含む「生の倫理学」（例えば、暴力や虐待、テロなどによるトラウマや PTSD に苦しむ人々を「生・生活・人生・生命（life）」という観点からケアしていくためにしなければならない義務・責任を考察する）

<主要研究業績>

1. 【共著】森村修「『社会政治的トラウマ』の倫理」、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019年【臨床哲学・生の倫理学】
2. 【共著】森村修「アマルティア・セン——自由と正義のアイデア」、榎木玲子／法政大学国際化学部編『境界』を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016年【現代倫理学】

3. 【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題—テロと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道：共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013年【現代哲学】
4. 【論文】森村修「市川白弦の「空-無政府-共同体論（Śūnya-Anarchist-Communism）」——小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって」、法政大学国際文化学部編『異文化 20』、2019年【日本哲学】
5. 【論文】森村修「技術は「ヒューマニズムを超える」か? (1) —ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガーの「技術哲学」(1)、法政大学国際文化学部編『異文化 19』論文編、2018年【現代ドイツ哲学・応用倫理学】
6. 【論文】森村修「バウル・ツェランという問題 (1) —ガダマーとデリダの「途切れない対話」(1)、法政大学国際文化学部編『異文化』論文編、2017年【現代ドイツ・フランス哲学】
7. 【論文】森村修「思想の翻訳と文字の問題——比較思想から間文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第42号、2016年【日本哲学・Intercultural Philosophy】
8. 【論文】森村修「センの「道徳哲学」(1)——バトナム「事実/価値二分法の崩壊」論を手がかりに(1)、法政大学国際文化学部編『異文化 17』論文編、2016年【現代倫理学】
9. 【論文】森村修「『性的差異』のケア倫理学——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題」、『比較思想研究』第41号、2015年【日本哲学・ケアの倫理学】
10. 【論文】森村修「喪と／あるいはメランコリー (1)——デリダの〈精神分析の哲学〉(1)、法政大学国際文化学部編『異文化 16』論文編、2015年【現代哲学】

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to examine the contemporary significance of "anti-birth" with special reference to Benatar's "I was better off not being born." By the way, according to Benatar, it is important to reduce the harm of this world by preventing the birth of newborns, and therefore abortion is affirmed. Eventually, he comes to the conclusion that humanity should be extinct.

Therefore, this class first examines the rebuttal of Benatar's assertion that "even if it is a quality life, our lives are very bad." Second, we examine in what sense a "birth affirmation philosophy" (Masahiro Morioka) that denies Benatar's "anti-birth" is possible. As a result, we consider philosophically the question of whether we should have been born.

FRI500G1 - 302

多文化情報空間論 I B

森村 修

サブタイトル：〈承認〉と〈差異〉の社会哲学

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業の概要】

2000年代になっていくにわか議論が喧しくなってきた哲学的問題に、「反出生主義（Antinatalism）」がある。端的に言えば、「生まれてこないほうが良かった」という思想である。それゆえ、「反出生主義」とは、「存在してしまうことの害悪」をなるべく減らすために、「将来生まれてくる可能性のある人々の誕生を防ぐことは道徳的に正しい」という議論である。

哲学的に見れば、「反出生主義」の思想は、19世紀の哲学者アルトゥール・ショーペンハウアー（1788-1860）のベシズムに遡ることができる。彼の影響のもとに、ニーチェは、『悲劇の誕生』のなかで、「人間にとってもっとも善いことは、生まれなかったこと、存在しないこと、何者でないことだ。次に善いことは、すぐに死ぬことだ」と書き記している。

こうした「反出生主義」が再び議論を巻き起こしている背景には、デイヴィッド・ベネター（南アフリカ・ケープタウン大学准教授）が『生まれてこなかったほうが良かった——存在してしまうことの害悪（David Benatar, *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*）（2006）』を出版したことがある。森岡正博によれば、ベネターは、基本的にはショーペンハウアーの『意志と表象の世界』（1819 正編/1843 続編）の思想を引き継いでいるが、彼が「反出生主義」を分析哲学の手法を用いて哲学のテーマとしたことである。

そこで2020年度の本授業は、ベネターのテキストを取り上げ、「反出生主義」の思想を考察することにした。

【授業の目的】

本授業の目的は、ベネターの『生まれてこないほうが良かった』を検討することによって、「反出生主義」の現代的意義を考察する。ちなみにベネターによれば、生まれてくる人たちの誕生を防ぐことによって、この世界の害悪を減らしていくことが重要であり、それゆえ、人工妊娠中絶は肯定される。最終的に、彼は「人類は絶滅したほうがよい」という結論に至る。

そこで本授業では、第一に、「たとえ質の高い人生であったとしても、私たちの人生は非常に悪いものだ」というベネターの主張に対する反論を検討する。

第二に、どのような意味で、ベネターの「反出生主義」を否定する『誕生肯定の哲学』（森岡正博）は可能かを検討する。結果的に、私たちは「生まれてきたほうがよかった」といいうるのかという問題を哲学的に検討する。

【到達目標】

- ①ベネターの「反出生主義」の思想を学ぶことができる。
- ②哲学的なテキストを読むことができる。
- ③レジュメを書くことができる。
- ④ベネター以外の「反出生主義」の思想を学ぶことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- (1) 基本的に「演習」形式で行う。
- (2) 毎回、担当者を決め、レジュメを作成してもらう。
◆レジュメには、①担当箇所の翻訳と解説、②用語説明、③考察、④問題点を記載する。
◆特定質問者を決めて、担当者の発表に対して、質問を行う。
- (3) それ以外の授業参加者と教員を含めて質疑を行い、問題点について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|------------|-------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | ・当番の順番を決定する ・授業の概要説明 |
| 第2回 | テキストの講読と議論 | ・担当者の発表 ・教員による解説 |
| 第3回 | テキストの講読と議論 | ・担当者の発表 ・教員による解説 |
| 第4回 | テキストの講読と議論 | ・担当者の発表 ・教員による解説 |
| 第5回 | テキストの講読と議論 | ・担当者の発表 ・教員による解説 |
| 第6回 | テキストの講読と議論 | ・担当者の発表 ・教員による解説 |
| 第7回 | テキストの講読と議論 | ・担当者の発表 ・教員による解説 |
| 第8回 | テキストの講読と議論 | ・担当者の発表 ・教員による解説 |

- 第9回 テキストの講読と議論
・担当者の発表
・教員による解説
- 第10回 テキストの講読と議論
・担当者の発表
・教員による解説
- 第11回 テキストの講読と議論
・担当者の発表
・教員による解説
- 第12回 テキストの講読と議論
・担当者の発表
・教員による解説
- 第13回 テキストの講読と議論
・担当者の発表
・教員による解説
- 第14回 年度の総括
・まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・担当者は、テキストの該当箇所のレジュメを発表前日までに教員に提出すること。
- ・特定質問者は、テキストの該当箇所に関する質問を3つ以上考え、簡単な質問表を作ってくること（発表当日でよい）
- ・それ以外の参加者は、該当箇所について質問を1つは考え、当日の議論に参加する準備をすること。

【テキスト（教科書）】

- (1) デイヴィッド・ベネター『生まれてこないほうが良かった——存在してしまうことの害悪』、すずさわ書店、2017年
- (2) David Benatar, *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*, Oxford University Press, 2006.

【参考書】

- (1) 「特集 反出生主義を考える——「生まれてこないほうが良かった」という思想」、『現代思想』、青土社、2019年11月号
- (2) 吉沢文武「ベネターの反出生主義をどう受けとめるか」、『現代思想』「特集 倫理学の論点23」所収、青土社、2019年9月号
- ◆その他については、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・個別報告発表（50%）（回数および内容による評価）
 - ・特定質問担当（30%）（質問内容による評価）
 - ・討論参加（20%）（内容による評価）
- ※ 以上に基づいて、総合的に評価する。
- ※ なお、無断欠席は認めない。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

最近の大学院生の中には、基本的なテキスト読解が不十分な者が見受けられる。テキストを「読む」というのは、テキストを「読み解く」のであって「読み込む」のではないことは肝に銘じるべきである。「読み込む」ということは、自分の考えをテキストに投影することであり、それは単なる勝手な解釈に過ぎない。それでは、真にテキストを「読解すること」にならない。あくまで「虚心坦懐」にテキストに向かい、「眼光紙背を徹する」態度でテキストに向かわなければ、哲学的なテキストを「読む」ことはできない。

また、担当者はレジュメを作成する上で、引用されているテキストはもちろん、それ以外にも用語・概念などについて、徹底的に下調べを行うべきである。担当者以外に対して、教員から授業中に質問することが多々あるので、担当者と同様に準備を怠らないでほしい。

演習とは **practice** (=実践) を意味しているのであり、テキストを「読む」という実践は五感を十分に活用することです。授業に参加する皆さんは、哲学を「実践する」態度で臨んでほしい。

【受講上の注意】

本授業は、哲学・倫理学、思想の分野に深くコミットしているために、自身の思考の鍛錬を要する。テキストを読むこと、それに基づいて自分の思考を実践すること、これらの作業は哲学研究にとって必須のものと心得てほしい。単に、カルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアリズム研究などとは異なるので、注意を要する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代哲学（現象学・構造主義以後のフランス哲学）・現代倫理学（ケアの倫理学・応用倫理学）

<研究テーマ> 生命体・地球を含む「生の倫理学」（例えば、暴力や虐待、テロなどによるトラウマや PTSD に苦しむ人々を「生・生活・人生・生命(life)」という観点からケアしていくためにしなければならない義務・責任を考察する）

<主要研究業績>

1. 【共著】森村修「社会政治的トラウマ」の倫理、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019年【臨床哲学・生の倫理学】
2. 【共著】森村修「アマルティア・セン——自由と正義のアイデア」、榎木玲子／法政大学国際文化学部編『境界』を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016年【現代倫理学】
3. 【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題—テロと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道：共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013年【現代哲学】
4. 【論文】森村修「市川白弦の「空-無政府-共同体論（ $\text{\textcircled{S}}$ ūnya-Anarchist-Communism）」——小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって」、法政大学国際文化学部編『異文化20』、2019年【日本哲学】
5. 【論文】森村修「技術は「ヒューマンイズムを超える」か? (1) —ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガーの「技術哲学」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化19』論文編、2018年【現代ドイツ哲学・応用倫理学】

6. 【論文】森村修「パウル・ツェランという問題（1）—ガダマーとデリダの「途切れない対話」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化』論文編、2017年【現代ドイツ・フランス哲学】
7. 【論文】森村修「思想の翻訳と文字の問題——比較思想から問文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第42号、2016年【日本哲学・Intercultural Philosophy】
8. 【論文】森村修「センの「道徳哲学」(1)——パトナム「事実／価値二分法の崩壊」論を手がかりに(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化17』論文編、2016年【現代倫理学】
9. 【論文】森村修「性的差異」のケア倫理学——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題」、『比較思想研究』第41号、2015年【日本哲学・ケアの倫理学】
10. 【論文】森村修「喪と／あるいはメランコリー(1)——デリダの〈精神分析の哲学〉(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化16』論文編、2015年【現代哲学】

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to examine the contemporary significance of "Antinatalism" with special reference to Benatar's "Better Never to Have Been." By the way, according to Benatar, it is important to reduce the harm of this world by preventing the birth of newborns, and therefore abortion is affirmed. Eventually, he comes to the conclusion that humanity should be extinct.

Therefore, this class first examines the rebuttal of Benatar's assertion that "even if it is a quality life, our lives are very bad." Second, we examine in what sense a "birth affirmation philosophy" (Masahiro Morioka) that denies Benatar's "anti-birth" is possible. As a result, we consider philosophically the question of whether we should have been born.

多文化情報メディア論 I A

大嶋 良明

サブタイトル：ソーシャルメディアの調査と分析

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ、文化情報学的なアプローチで分析するなかから、異文化理解に資する視点の開拓を試みる。これまで社会科学的发展の中で構築されたメディア論や人文科学分野での文化理論とも関連させた検討を試みている。とくにインターネット上の英語言説に着目し、その分析手法やメディアデータとしての特徴や書物との違いについて学ぶ。

【到達目標】

この科目では現代英語のテキストを最新の手法によって分析できるようになる。現代のネット社会を英文テキストとしての諸特性においてとらえる。英米文化の理解と異文化理解の観点から、インターネット上の言説や文化表象に関連するメディアに着目し、その主要な分析手法やモデル化について説明できるようにになる。また実際のデータに適用して分析することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

初回授業日は4月27日の予定である。

【注意】今学期は教室における対面授業は当面できないため、学期中に授業計画を変更していくことが想定され、変更がある場合は学習支援システムで周知する。

- ・複数レポート制による輪講とパソコンを用いたインターネット上のデータの分析を試みる。
- ・各自が学習内容を相互閲覧可能な形でWebに記録する。
- ・日本語のみならず各国語文化圏のWebテキストに関する各自の話題提供を通じて、視野を拡げ問題意識を深化させる。
- ・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-------------------|---|
| 1 | イントロダクション：社会と機械学習 | Webから海外社会を観察することと分析の課題を学ぶ。 |
| 2 | 即時性の検出 | 時系列のテキストからキーワードの出現傾向を検出する方法を学ぶ。 |
| 3 | 評判分類 | 評判分類とは何か、ロジスティック回帰などの手法を学ぶ。 |
| 4 | 意味表現の学習 | 意味表現とは何かを理解し、そのモデル化と可視化の手法について学ぶ。 |
| 5 | 表現の連鎖 | リンクに基づくテキストデータの分析手法を学ぶ。 |
| 6 | 関連性の評価 | テキストから関連性の高い文書を見つける手法を学ぶ。 |
| 7 | 話題性の抽出 | トピックモデルと言論空間の分析法を学ぶ |
| 8 | 感情分析 | 感情分析とは何かを理解し文章から意見の抽出方法を学ぶ。 |
| 9 | 推薦の仕組み | 予測とレコメンド手法、バスケット分析の手法を学ぶ。 |
| 10 | ジャンルの抽出 | テキストのジャンル分類を学ぶ。 |
| 11 | クラス分類 | テキストのクラス分類の方法を学ぶ。 |
| 12 | 特徴抽出 | 大規模データからの特徴抽出の手法を学ぶ |
| 13 | 特徴量の圧縮 | 大規模データからの特徴量圧縮の手法を学ぶ |
| 14 | 次元削減 | 第14回：まとめ-総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。

予習復習として、テキストおよび毎回の授業で担当教員が指定する文献を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは指定しない。必要な資料は授業内で配布する。

【参考書】

全体を通じての参考書は特に指定しない。

必要に応じて提示する。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：

【多言語環境】三上喜貴ほか、「言語天文台からみた世界の情報格差」、慶應義塾大学出版会（2014）、ISBN: 978-4-7664-2178-1

【英米言語文化】Swiss, T., “Unspun,” NYU Press(2001), ISBN: 978-0814797594

【ネット社会の文化的特性】川上量生（監修）、「ネットが生んだ文化」、角川学術出版（2014）、ISBN: 978-4-04-653884-0

【言語分析の手法】

(1) ボレガラ、岡崎、前原、「ウェブデータの機械学習」、講談社（2016）、ISBN: 978-4-06-152918-2

(2) Richart, W. and Coelho, L., P., (著)、齋藤康毅（訳）、「実践 機械学習システム」、オライリー・ジャパン（2014）、ISBN: 978-4-87311-698-3

【成績評価の方法と基準】

輪講 35%

レポート（Webを含む）25%

平常点 25%

課題 15%

を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2018年度よりテキストマイニングに取り組んでいる。履修学生の関心を喚起したい。また履修者少数の場合にも効率よく学習できるよう常に心がける。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノートPC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。また言語Pythonを用いた機械学習の問題解決に親しんで欲しい。学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集するWikiやポータルフォリオツール等のCMSを個々の研究科目において使用する。各自の学習内容のポータルフォリオ化に十分に活用して欲しい。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード：テキストマイニング、Web、機械学習、データサイエンス、ビッグデータ、インターネット、オンラインデータ

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【Outline and objectives】

This course provides with perspectives on the Internet in the context of multi-cultural cyberspace. It also covers well-known research methodology and basic analysis techniques for online text data as well as various types of media data on the Internet.

FR1500G1 - 306

多文化情報メディア論 I B

大嶋 良明

サブタイトル：ポピュラー音楽制作とスタジオ技術の歴史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この科目では現代社会をメディアとしての特性から分析する。スミソニアン学術協会が中心となって編纂する **Artefacts** シリーズより音楽文化をテーマとしてとりあげ、アメリカ、イギリスとヨーロッパでの電気楽器、音楽制作との関連を学ぶことから英米現代文化を理解する。原書購読にとどまらずフィールド録音、映画音楽、放送音源など様々なメディア媒体を活用して、演奏の記録や音楽史上での関連事項についても調べ理解を深める。

【到達目標】

近現代の英米社会における口承音楽、楽器演奏、実験音楽、ポピュラー音楽の制作や分析に関心を持ち、それらの欧米での研究の最新動向が身につく。またミュージコロジーのさまざまな研究領域について認識できる。ここで取り扱うそれらの楽器や音楽手法に触発された現代の芸術家とその活動についても関連を見いだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

【注意】今学期は教室における対面授業は当面できないため、学期中に授業計画を変更していくことが想定され、変更がある場合は学習支援システムで周知する。

- ・複数レポート制による輪講（英語文献の講読を中心とする）
- ・各自が学習内容を相互閲覧可能なオンライン記録とすることを旨とする。
- ・視野形成と問題意識の深化を目的として、リスナーとして演奏者、制作者としての音楽体験に関連する話題提供を歓迎する。
- ・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|---------------------------|--|
| 第1回 | イントロダクション | 本講義のねらいと取り扱う論者の全体視野を身に着ける。 |
| 第2回 | フィールド録音とブルース音楽 | 1940年代のミシシッピ州刑務所 Parchman Farm でのフィールド録音と記録から口承音楽としての囚人歌からデルタ・ブルースの関連を学ぶ。 |
| 第3回 | 欧米教会音楽における電子オルガン | 1930年代のアメリカと1960年代ノルウェーでの Hammond オルガンの受容普及と教会文化との軋轢の歴史を学び、教会音楽での電子オルガンの果たした役割とその時代的な関係を検討する。 |
| 第4回 | アメリカ音楽文化における Hammond オルガン | Mark Vail の "The Hammond Organ: Beauty in the B" を参考に1950年代以降を中心にポピュラー音楽と教会音楽の視点からアメリカ文化を考察する。 |
| 第5回 | Ethel Smith とオルガン音楽 | 1940年代から1970年代にかけての Ethel Smith のレコード音源、編曲楽譜、映画、新聞記事などを手掛かりにアメリカのポピュラー音楽文化に足跡を残した演奏家の芸能活動と音楽出版について学ぶ。 |
| 第6回 | Moog シンセサイザー | Trevor Pinch による "Analog Days: The Invention and Impact of the Moog Synthesizer" ほかの資料を参考に電子楽器としての Moog の革新性と1970年代のポピュラー音楽に与えた影響を検討し音楽史上における文化的価値について考察する。 |
| 第7回 | ドラムマシンとサンプラー | 初期のドラムマシンに始まり Mellotron や Fairlight などのサンプラー楽器が1970年代以降の英米のポピュラー音楽に果たした役割とその影響について検討する。 |
| 第8回 | 前衛音楽とアメリカ西海岸のカウンターカルチャー | Pauline Oliveros ら San Francisco Tape Music Center のメンバーが現代作家との協力関係の中で活動し1960年代アメリカの対抗文化に及ぼした影響について学ぶ。 |

| | | |
|------|-------------------------------------|--|
| 第9回 | イギリス放送文化における電子音楽の隠された次元 | Daphne Oram が取り組んだ Oramics Machine 、BBC Radiophonic Workshop の Delia Derbyshire、EMS の David Cockerell らの先駆的業績を取り上げ電子音楽、放送文化、劇伴音楽における英国文化の影響について検討する。 |
| 第10回 | 電子楽器と映画音楽 | テルミン、VCS3、Moog などの20世紀の電子楽器が映画音楽やレコード芸術に果たした役割を検討する。 |
| 第11回 | 前衛「楽器」としての King Tubby とダブ・ミュージックの誕生 | 1970年代のシュトックハウゼンと King Tubby によるポピュラー音楽のダブというかけ離れたジャンルでの音楽制作の共通項としてフィルター操作の役割と音楽表現上の位置づけを検討する。 |
| 第12回 | CCRMA | 学際的研究としての大学での電子音楽研究に焦点を当てて、1970年代に開設され現在も続くスタンフォード大学の CCRMA が及ぼした影響とその功績を、デジタルシンセサイザーの開発研究と電子音楽の制作環境を中心に検討する。また同時期に開設されいづれも今日まで活発な研究活動を展開するフランスの IRCAM との対比において考察する。 |
| 第13回 | 演奏における artefacts | 音楽演奏における artefacts(ここでは付加的人工物)による楽器の構造的・機能的拡大や楽器概念の拡大について検討する。 |
| 第14回 | まとめ | 総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述「情報機器」の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。
予習復習として、毎回の授業で担当教員が指定するテキスト（英語原著論文を含む）を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Frode Weium, Tim Boon (Ed), "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)", Smithsonian Institution Scholarly Press (2013), ISBN 978-1-935623-10-6

【参考書】

【アメリカ文化におけるポピュラー音楽】大和田俊之、「アメリカ音楽史 ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで」、講談社 (2011), ISBN: 978-4062584975

【英米文化における教会音楽】越川弘英、「教会音楽ガイド」、日本基督教団出版局 (2010), ISBN: 978-4818407497

【ポピュラー音楽、教会音楽と電子楽器】

Vail M., "The Hammond Organ: Beauty in the B," Backbeat Books (2002), ISBN: 978-0879307059

Pinch T., "Analog Days: The Invention and Impact of the Moog Synthesizer," Harvard University Press (2004), ISBN: 978-0674016170

Vail M., "Vintage Synthesizers," Backbeat Books (2000), ISBN: 978-0879306038

【フィールド録音、ブルース音楽、黒人文化】Lomax A., Jackson B., "Parchman Farm: Photographs and Field Recordings 1947-1959," Dust-to-Digital (2015), ISBN: 978-0981734293

【アメリカの電子音楽研究】Nelson A., "The Sound of Innovation: Stanford and the Computer Music Revolution," The MIT Press (2015), ISBN: 978-0262328807

【60年代カウンターカルチャーと前衛音楽】

Bernstein, D., "The San Francisco Tape Music Center: 1960s Counterculture and the Avant-Garde," University of California Press (2008), ISBN: 978-0520256170

【Ethel Smith と教会音楽、ポピュラー音楽】

大嶋良明、「Ethel Smith をめぐって」、『異文化』、第18号、pp231-240、法政大学国際文化学部 (2017), ISSN: 13493256

Smith E., "Ethel Smith's Favorite Hymns for Hammond Organ," Ethel Smith Music Corp. (1948).

Smith E., "Ethel Smith's Easter Music for the Spinnet Model Hammond Organ," Ethel Smith Music Corp. (1954).

Smith E., "Ethel Smith's Simplified Transcriptions of Spirituals Registered for Pipe and Hammond Organ," Ethel Smith Music Corp. (1949).

Ethel Smith Music Corp. (Ed.), "20 Stars, 40 Hits for Hammond Organ (Pre-set and Spinnet Models)," Ethel Smith Music Corp. (1957).

Smith E. (Arr.), "The Golden Organ Instructor," Charles Hansen Educational Sheet Music and Books (c1973)

その他必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

輪講 35%

レポート・ティンギング (Web を含む) 25%

平常点 25%

課題 15%

を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2017年度以降の新規科目であるが、文献購読とレポーター制による学習負担については工夫に努める。2018年度は購読文献に現代的視点を取り入れ、インターネット上のメディア情報についても取り扱った。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノート PC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。国際文化研究科では、学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集する Wiki やポートフォリオツール等の CMS を個々の研究科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用されたい。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード：ミュージコロジー、現代音楽、コンピュータ音楽、電子楽器、ポピュラー音楽、アーティファクト（知的人工物）、音響メディア、メディアアート

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【Outline and objectives】

This course deals with an cross-disciplinary area of Musicology, Computer Music and History of various musical instruments and studio production gears. Course materials will be taken from "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)" by Smithsonian Institution Scholarly Press.

FRI500G1 - 307

多文化情報メディア論Ⅱ

重定 如彦

サブタイトル：人工知能について学ぶ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在、大きな社会的注目を集めている人工知能について、古典的なチェスなどのゲームを題材とする AI からはじめ、近年注目を浴びている画像を認識するディープラーニングを用いた AI などを題材とした実習を行いながらその仕組みについて学び、人工知能ができる事、できない事について理解できるようにする。

また、人工知能が社会に与える影響などについて考察する。

【到達目標】

人工知能の基礎を学ぶ。

人工知能が社会に与える影響について自分なりの考察を行えるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

人工知能について、古典的なチェスのようなゲームにおける手法から始め、最近注目を浴びてきているディープラーニングを使った画像認識に至るまで、具体的にその仕組みについて実習を行いながら学習していく。

授業では、あらかじめ与えたテーマについて各自が発表し、その内容についての議論なども行う。

学生の理解度に応じて、実際に動作する、簡単な人工知能のプログラミングの実習などを行うことも考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|-------------------------|--|
| 1回 | 人工知能の定義と歴史 | 授業の導入及び、人工知能の定義や歴史について学ぶ |
| 2回 | ゲームの人工知能 | ○ × ゲームやチェスなど、ゲームにおける人工知能の考え方について学ぶ |
| 3回 | ゲーム木と探索 | ゲームを題材とした人工知能における、古典的な手法であるゲーム木とその探索について学ぶ |
| 4回 | α β 法と、枝刈り | ゲーム木の探索を効率的に行うための手法の一つである α β 法と、ゲーム木の枝刈りについて学ぶ |
| 5回 | 様々な探索手法 | ゲーム木の様々な探索手法について学ぶ |
| 6回 | 評価関数 | 状況を数値化するための手法（評価関数）について学ぶ |
| 7回 | 機械学習とディープラーニング | 機械学習の基礎とその種類について学ぶ |
| 8回 | ニューラルネットワーク | ディープラーニングの基礎となるニューラルネットワークについて学ぶ |
| 9回 | 画像の分類 | 機械学習を用いた画像認識について学ぶ |
| 10回 | ディープラーニングによる学習 | 人工知能がディープラーニングにおいて、どのように学習していくかについて学ぶ |
| 11回 | 機械学習における様々な手法 | 機械学習で用いられる様々な手法について学ぶ |
| 12回 | 人工知能の問題点 | 人工知能が抱える問題点や、限界などについて学ぶ |
| 13回 | 社会に与える影響 | 人工知能が社会に与える影響について議論する |
| 14回 | まとめ | 授業で学んだことのまとめを行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前半は教科書を指定しないが、授業で学んだことをしっかりと復習し、授業内で提示する次回の授業のテーマについて予習する。

後半は教科書を読んで予習を行い、授業で学んだことをしっかりと復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

「ゼロから作る Deep Learning — Python で学ぶディープラーニングの理論と実装」 斎藤 康毅 オライリー・ジャパン
その他、必要に応じて授業内で提示する。

【参考書】

なし

【成績評価の方法と基準】

「配分」

平常点 25 %、授業内での発表や議論 50 %、レポート 25 %

「評価基準」

発表及びレポートは、読解の正確さ、発表資料またはレポートの適切さ等によって評価する

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門分野>情報科学

<研究テーマ>ユビキタスコンピューティング、分散 OS、ユーザインタフェース
<主要研究業績>

「デジタルミュージアムのためのキオスク型 WWW ブラウザ」、電子情報通信学会論文誌, vol.J85-D1, No.3, 2002 年 3 月

「分散ハイパーメディア OS Net-BTRON におけるハイパーメディアサーバ管理機構」、情報処理学会論文誌, 2001 年 6 月

A Distributed Hypermedia Operating System: Net-BTRON, In Proceedings of the 2000 International Conference on Communication Technology, IFIP ICCT2000/WCC2000, vol.2 (Aug.2000)

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura, "ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure," 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010), pp. 303 - 310, July 19 - 23, 2010.

【Outline and objectives】

The objectives of this class are to learn about basics of artificial intelligence, and to discuss the influence of artificial intelligence on our society.

OTR500G1 - 401

Thesis Writing A

ジェイソン・ポール・スミス

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

The course will review the fundamentals of good English writing, and help students build a solid foundation in the English writing mechanics and style used in academic papers.

【到達目標】

Participants will take an active approach to increasing their English writing skills, and ultimately write an academic research paper. Participants will focus on basic research and academic writing methods. Mechanics of writing such as summarizing, paraphrasing, narrowing topics; and developing thesis statements and topic sentences, as well making accurate citations will be learned. The Modern Language Association (MLA) writing format will be used.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

The course will emphasize writing, coherence, and common stylistic errors in academic writing. Students will develop a bibliography and build support for their research papers. This class will not be filled by endless lectures. Instead, time will be occupied by writing practice and peer editing. Thesis Writing A emphasizes the usage of a textbook while Thesis Writing B will be taught with teacher handouts and much in-class writing. The repetition between semesters is intentional; practice & more practice. I reserve the right to make adjustments to this syllabus to meet the collective needs of the class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|---|---|
| 第 1 回 | Unit 1 Going to Write One Paragraph | Class introduction & going over syllabus, short lecture on academic vs. non-academic writing. Topic sentences, supporting sentences and concluding sentences. |
| 第 2 回 | Unit 2 Trying To Be Polite | Using appropriate style in writing, what is plagiarism and how to avoid it. |
| 第 3 回 | Unit 3 What Do You Think? | Generating ideas, analyzing an opinion paragraph, writing the first draft. |
| 第 4 回 | Unit 4 This May Work | Proposing a solution, brainstorming, peer review. |
| 第 5 回 | Unit 5 How Could It Happen? | Writing cause and effect paragraph. |
| 第 6 回 | Unit 6 What Is an Essay? | Essay structure, effective thesis statements, body and conclusions. |
| 第 7 回 | Unit 7 Writing Your Own Outline | More on thesis statements, main ideas and writing your own idea. |
| 第 8 回 | Unit 8 Let Me Tell You About a Beautiful Place | Descriptive Essays 1: How to write vibrant and descriptive essays, painting a picture with words |
| 第 9 回 | Unit 9 Let Me Tell You About an Amazing Time | Descriptive Essays 2 |
| 第 10 回 | Unit 10 That's a Good Point | Persuasive Essays 1: Health issues, planning your strategy. |
| 第 11 回 | Unit 11 Developing Logical Points of Support | Persuasive Essays 2: Health issues; Build Your Essay, putting it all together, review. |
| 第 12 回 | Unit 12 How Are They Different? | Identifying similarities and differences. |
| 第 13 回 | Unit 13 How are They Different? | Comparison Essays 1 :Education; 5 basic stages in comparison essays. |
| 第 14 回 | Unit 14 Let's Sort It Out | Writing informative, interesting and easy-to-follow classification essays (Classification Essays 1 Events and Festivals). |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will have to do all textbook activities and finish one short unit (5-8 pages) each week as instructed.

Students on average need to allow 90 minutes for each scheduled class.

【テキスト（教科書）】

From Paragraph to Essay (NAN'UN-DO) ISBN 978-4-523-17727-2 C0082

【参考書】

Handouts given by the instructor

【成績評価の方法と基準】

Homework and assigned work must be handed in on the date announced by the instructor. Assignments submitted late without an acceptable excuse and formal verification for the absence will result in a loss of ten points per day for the assignment. Plagiarism: knowingly representing the words of another as one's own in any academic activity will automatically result in a failing grade on the assignment.

50% Participation, Discussions and Homework

50% Textbook Exercises and Writing Assignments

【学生の意見等からの気づき】

The class is now offered for one full academic year as explained above.

【学生が準備すべき機器他】

Thesis Writing A does not require any additional equipment.

【その他の重要事項】

With respect to the Goals above, it is required that the grammatical subject be 'participants.' So, please rewrite them following the format 'Participants will be able to...' and the like.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> American Studies

<研究テーマ> Social Studies

<主要研究業績> The Uprising of the Molly Maguires in Eastern Pennsylvania, Washington State University Press, 1991

Lost Art of the Cornet Society, Sidgwick & Jackson Ltd; June, 2005

OTR500G1 - 402

Thesis Writing B

ジェイソン・ポール・スミス

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

The course will review the fundamentals of good English writing, and help students build a solid foundation in the English writing mechanics and style used in academic papers.

【到達目標】

Participants will take an active approach to increasing their English writing skills, and ultimately write an academic research paper. Participants will focus on basic research and academic writing methods. Mechanics of writing such as summarizing, paraphrasing, narrowing topics; and developing thesis statements and topic sentences, as well as making accurate citations will be learned. The Modern Language Association (MLA) writing format will be used.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

The course will emphasize writing, coherence, and common stylistic errors in academic writing. Students will develop a bibliography and build support for their research papers. This class will not be filled by endless lectures. Instead, time will be occupied by writing practice and peer editing. Thesis Writing A emphasizes the usage of a textbook while Thesis Writing B will be taught with teacher handouts and much in-class writing. The repetition between semesters is intentional; practice & more practice. I reserve the right to make adjustments to this syllabus to meet the collective needs of the class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-------|---|--|
| 第 1 回 | Tentative Course Schedule | Go over syllabus. |
| 第 2 回 | Identifying and creating thesis statements | Review: identifying and creating thesis statements. Student practice of this concept Homework: One page paper on why you are pursuing a Master's Degree (due next week). Handout list of academic topics for research paper |
| 第 3 回 | What is the difference between a thesis statement and a topic sentence? | Peer editing on the above essay, When and Where to use Personal Pronouns homework (due next week) your topic for research and why you chose it. |
| 第 4 回 | In class writing | Modern Language Association (MLA formatting), work on term paper, quotations Laptop computers required from this class and all remaining classes |
| 第 5 回 | Beginnings/Endings: Titles, Introductions, Quotations, Conclusions | More on MLA formatting. Short lecture with "avoiding ambiguity" handout. Independent work on essays and Q&A. |
| 第 6 回 | How to research | Supporting information for your essay, coherent paragraphs with transitions, citing sources. |
| 第 7 回 | Writing bibliographies | One half hour lecture on writing bibliographies followed by trip to the library to select supporting information with citations. |
| 第 8 回 | Process of Revising | Short lecture on rewriting followed by application and peer editing. Beginnings and ends (titles, intros and conclusions). |

| | | |
|--------|--------------------|---|
| 第 9 回 | Review and beyond | Developing thesis statements, topic sentences, and supporting ideas & independent work on essays. |
| 第 10 回 | Feedback | Q & A ... First hard copy draft of five page essay due. In class pair-work and review. |
| 第 11 回 | Workshop | First drafts returned with feedback. Q & A as well as pair-work and independent writing of 2nd draft. |
| 第 12 回 | Lecture & Workshop | Short lecture on solidifying writing techniques followed by independent writing. |
| 第 13 回 | Wrapping things up | Hard copy of 2nd draft of five page essay due. Stressing clarity & thought provoking writing. In class writing. |
| 第 14 回 | Review | Lecture of main writing mechanics previously taught. In class writing. |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will have to read and understand all handouts given in class as well as materials for each class, as instructed.

Students on average need to allow 90 minutes for each scheduled class.

【テキスト（教科書）】

From Paragraph to Essay (NAN'UN-DO) ISBN 978-4-523-17727-2 C0082

【参考書】

Handouts given by the instructor

【成績評価の方法と基準】

Homework and assigned work must be handed in on the date announced by the instructor. Assignments submitted late without an acceptable excuse and formal verification for the absence will result in a loss of ten points per day for the assignment. Plagiarism: knowingly representing the words of another as one's own in any academic activity will automatically result in a failing grade on the assignment.

50% Participation, Discussions and Homework

50% Textbook Exercises and Writing Assignments

【学生の意見等からの気づき】

The class is offered for one full academic year as explained above.

Although the aim of the instructor is to follow the syllabus, he reserves the right to make adjustments or changes when necessary.

【学生が準備すべき機器他】

Thesis Writing B requires students to have a laptop computer starting the second week of the semester.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> American Studies

<研究テーマ> Social Studies

<主要研究業績> The Uprising of the Molly Maguires in Eastern Pennsylvania, Washington State University Press, 1991

Lost Art of the Cornet Society, Sidgwick & Jackson Ltd; June, 2005

OTR500G1 - 403

Oral Presentation

マーク・フィールド

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Good communication skills are necessary for anyone wanting to work in an international environment. This course is for students with a strong desire to improve their English language presentation skills. The course will focus on helping students talk about their current research theme in English and acquiring the language skills used in Oral Presentations given in English.

【到達目標】

The goal of the course is to develop students' communications skills and confidence as public speakers. Course content will include listening and vocabulary development, as well as extensive practice in using spoken English as a presentation tool. The main theme of students' presentations will be based on their current research interests. By the end of the course, participants will be able to discuss many aspects of their research in English and make a formal presentation in English on the current state of their graduate research.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である。また、「DP1」の達成のために望ましい。

【授業の進め方と方法】

The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to actively participate in classroom activities, prepare weekly homework assignments, and review and practice at home for in-class presentations.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------------------|---|
| 1 回 | Class Orientation: | Presentations and Speeches: What is the Difference? |
| 2 回 | Structure: | The Types of Language Used in an Oral Presentation |
| 3 回 | Presentation #1: | Presenting Your Background & Research Interests |
| 4 回 | Learning Strategy: | Assessing Your Skills |
| 5 回 | Types of Communication: | Thinking About and Using Visual Aids Part I |
| 6 回 | Presentation #2: | Introducing Geographical Locations |
| 7 回 | Expanding Discourse: | Exchanging Information |
| 8 回 | Reflective Communication: | Planning Your Presentation |
| 9 回 | Presentation #3: | Presenting Books and Research Material |
| 10 回 | Types of Communication: | Thinking About and Using Visual Aids Part II |
| 11 回 | Expanding Discourse: | Controlling Your Presentation Environment |
| 12 回 | Putting It All Together: | Talking About Main Points |
| 13 回 | Putting It All Together: | Clearing up Confusing Ideas |
| 14 回 | Final Assessment: | Presentation of Your Research Theme |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. Effective presentations depend on sufficient preparation and practice, so students will need to prepare and practice outside of class before giving their in-class presentations.

【テキスト（教科書）】

The instructor will provide some reading materials related to Oral Presentation Skills.

【参考書】

Students will be expected to bring in reading materials related to their current research interests.

【成績評価の方法と基準】

30% On-going Evaluation participation, discussions etc.

20% Homework

50% In-class Presentations

** Class attendance is a course requirement.

Students are allowed no more than three absences in the academic semester.

【学生の意見等からの気づき】

Previous students were happy with this course and currently no data is available to support changing it. However, the instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】

We will use some OHC (Over Head Camera) and/or PC (Personal Computer) equipment to Present Visual Aids.

【その他の重要事項】

The Instructor Reserves the Right to change or alter this syllabus as needed.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

SOS500G1 - 405

国際協力論

松本 悟

サブタイトル：国際協力と文化・教育・社会配慮

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では国際協力を文化の視点から考える。文化とは「体系的な生きるための工夫」（クラックホーン）であり、協力を必要とする背景及び協力そのものが特定集団に内在する文化によって影響を受けると同時に文化に影響を与えている。いくつかのキーワードを手がかりに文献を丁寧に読み解きながら、文化という切り口から国際協力の歴史と現状を理解する。

【到達目標】

- (1) 授業で取り上げる概念や術語について理解できる。
- (2) 国際協力を国際文化の視点から論じることができる。
- (3) 当該分野の文献を正しく理解し、分析的な発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

授業の細かい進め方や課題については、学習支援システムの教材に投稿する第1回授業レジュメ（4/21に投稿します）の中で説明します。以下はおおまかな進め方ですが、実際に学生が発表担当するやり方は第3回（5/12）から始まります。第2回（4/28）は練習として教員が発表します。事前課題はありませんが、履修者は以下に説明する「議論」を学習支援システム上で行って下さい。なお、場合によっては、以下の（3）議論の部分については、Web会議システムを使った双方向授業で行う可能性もありますので、火曜日3限は空けておいて下さい。

- (1) 事前課題：その週に指定した文献（20頁程度を想定）を事前に熟読し、「この文献から重要だと考えた点」を最低3つ、そう考えた理由とともに学習支援システムの掲示板に設定した「事前課題」にアップして下さい。分量は800字程度、締め切りは授業の2日前（日曜日22時）とします。
- (2) 担当者の発表：毎週の発表担当者は、事前課題にアップされた文書を踏まえて、その文献の重要な点を理由とともに整理して下さい。そのうえで、課題文献の論点（異なる意見が存在しそうで、それを議論することに意味があること）を考えて下さい。発表担当者はこれらのポイントを「音声入りパワーポイント」（15分程度）にまとめて学習支援システムに授業時間（火曜日13時）までにアップロードして下さい。
- (3) 議論：発表担当者が挙げた論点について、履修者はそれぞれの意見を学習支援システムに「返信」として書き込んで下さい。意見は1回だけでなく、なるべくやり取りの形で進めて下さい。発表担当者は、議論を喚起するように意見を書き込んで下さい。この議論を水曜日22時まで続けます
- (4) 講評：水曜日22時までの議論を踏まえて、教員が講評やコメント、追加の授業をアップします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-------------------------------|---|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の説明、受講者の関心の共有に基づき、必要に応じて課題文献を変更する。 |
| 第2回 | モジュール1：国際協力と文化①なぜ協力をするのか？ | 国際協力とは何か、なぜ協力するのかを考える。 |
| 第3回 | モジュール1：国際協力と文化②開発と文化 | 国際協力を国際文化の視点で捉えるとはどういうことか、考える。 |
| 第4回 | モジュール1：国際協力と文化③内発的発展 | 内発的発展論から国際協力の哲学を考える。 |
| 第5回 | モジュール1：国際協力と文化④ケーススタディ | 第2回～第4回の授業の学びを具体的なケースを使って深める。 |
| 第6回 | モジュール2：国際協力と教育①教育学の視点 | 教育分野の国際協力について教育学の視点から考える。 |
| 第7回 | モジュール2：国際協力と教育②社会学の視点 | 教育分野の国際協力について社会学の視点から考える。 |
| 第8回 | モジュール2：国際協力と教育③経済学の視点 | 教育分野の国際協力について経済学の視点から考える。 |
| 第9回 | モジュール2：国際協力と教育④ケーススタディ | 第6回～第8回の授業の学びを具体的なケースを使って深める。 |
| 第10回 | モジュール3：国際協力と社会配慮①配慮とは何か | 配慮について哲学的に考える。 |
| 第11回 | モジュール3：国際協力と社会配慮②国際協力における社会配慮 | 国際協力が社会配慮が組み込まれるようになった背景と具体的な政策を学び、その意義と限界を考える。 |

| | | |
|--------|-------------------------------|--|
| 第 12 回 | モジュール 3：国際協力と社会配慮③ケーススタディ (1) | 第 10 回と第 11 回の授業の学びを国際協力の具体的な事例を使って深めるため、取り上げるケースについて理解する。 |
| 第 13 回 | モジュール 3：国際協力と社会配慮④ケーススタディ (2) | 第 12 回の授業で理解したケースをもとに、国際協力の社会配慮をめぐる課題を議論する。 |
| 第 14 回 | 総合討論 | この授業で扱ったテーマを横断的に分析し、「国際協力と文化」について新たな視点を掘り起こす。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前課題と議論は時間をかけて行って下さい。また発表担当者は、音声入りパワーポイントの準備を行って下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

課題文献は最初の授業で示します。

【成績評価の方法と基準】

- ①事前課題 30%（文献の正しい理解、重要な点の説明の妥当性）
- ②発表内容 40%（パワーポイントの内容の妥当性、論点の合理性）
- ③議論 30%（書き込んだ意見の分量、論理性、議論のファシリテートへの貢献）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを利用できるようにしておいて下さい。

【その他の重要事項】

- ・国際協力に 15 年近く携わった教員が具体的な経験に基づく事例も紹介しながら授業を行います。
- ・履修者の関心によって、授業内容や課題文献を若干変更することがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 国際開発研究
<研究テーマ> 影響評価、国際組織、開発援助、NGO
<主要研究業績>

『調査と権力』（単著、東大出版会、2014 年）

『NGO と世界銀行』（共編著、ミネルヴァ書房、2012 年）

『人々の資源論』（共著、明石書店、2008 年 9 月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005 年 9 月）

【Outline and objectives】

This course aims to enable students to understand and analyze international cooperation from the aspects of "culture". It includes the background which requires international cultural cooperation, the impacts of international cooperation on culture and the impacts of culture on international cooperation.

POL500G1 - 406

国際人権論

藤岡 美恵子

サブタイトル：マイノリティの視点から考える人間の尊厳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人権は現代世界で常に重要な問題として扱われてきた。その保障は国際的に普遍的な課題として認識されており、何よりも、社会的に周縁化されてきた人々が自らの人間の尊厳を回復するための重要な手立てとして活用してきたのが人権であった。人権保障制度の発展は、そうした周縁化された立場の人々の尊厳を求める運動を契機に発展してきたと言ってもよい。しかし近代の国民国家体制とともに生まれた人権思想と制度は、その枠組みの中で排除や搾取の対象となってきた集団（先住民族、マイノリティ、移民）の尊厳を守るためには不十分、もしくは根源的な矛盾をはらむという課題に直面している。それに関係するのが植民地主義の継続である。植民地主義が終焉するどころか、新たな形態で継続しているという認識が広く支持されるようになっている現在、近代の人権保障の思想と制度が植民地主義の観点から再考されるようになってきている。この課題は、ヘイトスピーチの台頭という重大な挑戦に直面する日本社会にとっても、きわめて重要な課題である。本授業では、第二次大戦以降の人権の概念と保障体制の発展を踏まえた上で、それが日本のマイノリティや先住民族の人権にどのような影響をもたらしたのかを考察し、現代世界が直面する人権をめぐる危機を人種主義と植民地主義をキーワードに考えていく。人権がともすれば「思いやり」の問題として考えられがちな日本において、人権が差別され周縁化されてきた集団による公正と尊厳を求める運動を契機に発展してきたことを理解することは、今後の日本社会の在り方を考えて行く上で意義が多い。どうすればあらゆる人々の尊厳を保障することができるのかを、人権を侵害されてきた/いる人々の立場から考える思考態度を身につけ、人権をめぐる生じている国際的な課題について批判的な理解・思考能力を養う。

【到達目標】

第 2 次大戦後の国際的な人権保障の体制や考え方がどのように進展してきたかを踏まえた上で、それが国内の人権保障とどのように関係しているかを理解し、20 世紀終盤から 21 世紀初頭の国際秩序の変容の中で、人権の保障という課題がどのような矛盾や問題を抱えているのかを、植民地主義、人種主義というキーワードを使って整理し、説明できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

春学期の少なくとも前半はオンラインでの開講となる。それにとりま各回の授業計画の変更については、学習支援システムでその都度提示する。本授業の開始日は 4 月 21 日とし、具体的なオンライン授業の方法は下記のとおりとする。なお、オンライン授業を進めていくにつれ、受講生との相談の下、進め方を変更する場合もある。

●オンライン授業の場合

1. 次回授業のテキストを読み、要約と質問を A4 サイズ 3 ページ以内（Word や PDF ファイルなど）にまとめ、大学の学習支援システムを使って授業日の前日までに提出（第 2 回授業から開始）。
2. 授業日の夕方までに講師が解説・質問への回答のファイル学習支援システムにアップロード。それを各自が学習。

以上 1., 2. を毎回繰り返す。

－授業内容についての質問は随時学習支援システムの「掲示板」で受け付ける。

－授業 2, 3 回ごとにテーマを設定して受講者全員が参加するディスカッションを学習支援システムを使って開催する予定（下記「授業計画」を参照）。

●通常の授業に戻った場合

各回担当の受講者を決め、担当者は指定テキストの要約と論点や質問の提示を行う。それをもとに全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-------|---|---|
| 第 1 回 | イントロダクション ●日本における人権に関する認識：ヘイトスピーチの議論を手がかりに | 授業内容・授業計画の説明 人権とは何か。人権がなぜ必要なのか。人権は人間社会においてどのような位置をもつのかをあらためて考える。 |
| 第 2 回 | 国際人権システムの歴史 | 国際人権保障システムがどのように発展してきたかその歴史をたどる |
| 第 3 回 | 国際人権システムのインパクトと限界 | 国際人権保障システムが具体的な人権問題の解決にどのようなインパクトをもたらしたのかを振り返る。一方でその限界も理解する。 |

| | | |
|------|-----------------------------------|--|
| 第4回 | ヘイトスピーチの被害と人権 | 近年問題になっているヘイトスピーチがどのような被害をもたらすのかを理解する。 |
| 第5回 | ヘイトスピーチへの対応 | ヘイトスピーチに対して国際人権法がどう規制しているか、またヘイトスピーチを乗り越える一つの方法としての修復的アプローチを考える。 |
| 第6回 | 植民地主義と先住民族の自決権 | 日本によるアイヌ・沖縄への植民地支配の歴史と先住民族の自決権を理解する |
| 第7回 | 先住民族権利宣言 | 先住民族権利宣言を読み解くことで先住民族の歴史的経験と現在の主張の意味を考える。 |
| 第8回 | 先住民族の権利に関わる世界的動向と日本の先住民族の運動の国際的展開 | 先住民族の権利を求める世界的な動向が日本の先住民族にどう影響し、日本社会にどのようなインパクトをもたらしているかを考える |
| 第9回 | 植民地主義の克服と「多文化共生」論 | 北朝鮮パッシングを手がかりに、日本の「多文化共生」論と植民地主義の克服という課題の関係を考える。 |
| 第10回 | 「多文化共生」におけるマジョリティとマイノリティ | マイノリティの視点から見る「多文化共生」の問題を考える。 |
| 第11回 | 多文化主義と人権の未来 | EUを例に多文化主義を標榜する社会における新たな排除の問題を考える |
| 第12回 | 過去の人権侵害への責任 | 現在の人権をめぐる課題が過去の重大人権侵害に対する責任と密接に関係していることを踏まえ、その責任をどのように問えるのかを考える。 |
| 第13回 | 植民地支配責任 | 植民地支配の責任を問う声が台頭する中、責任を問うことの意義を考える。 |
| 第14回 | まとめ/レポート講評 | 授業のまとめとレポートの講評を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定文献を事前に読み要約を作成し、質問事項をまとめる。
 通常授業に戻った場合： 報告者はレジュメを準備し、疑問点や論点の整理を行う。
 期末レポートを作成する。

【テキスト（教科書）】

- ①阿部浩己『人権の国際化——国際人権法の挑戦』現代人文社、1998年（「人権の国際化」）
- ②阿部浩己『国際人権の地平』現代人文社、2003年（「人権の世紀へ」）
- ③阿部浩己『国際法の暴力を超えて』岩波書店、2010年（第4章「要塞の中の多民族共生／多文化主義」、第7章「戦後責任と和解の模索」）
- ④阿部浩己『国際人権法によるヘイトスピーチの規制』法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年
- ⑤上村英明『先住民族の「近代史」——植民地主義を超えるために』平凡社、2001年（第3章「近代国家日本と「北海道」「沖縄」の植民地化」）
- ⑥上村英明『声を上げた日本の先住民族』深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界——わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年
- ⑦清水昭俊『先住民、先住の民、民の平等の完成形』深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界——わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年
- ⑧鄭 暎恵『ヘイトスピーチ被害の非対称性』法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年
- ⑨中野聡『「植民地責任」論と米国社会』永原陽子編『「植民地責任」論：脱植民地化の比較史』青木書店、2009年
- ⑩中村一成『ヘイトクライムの修復的アプローチを考える』法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年
- ⑪リリアン・テルミ・ハタノ『在日ブラジル人を取り巻く「多文化共生」の諸問題』植田晃次・山田仁編著『「共生」の内実』三元社、2011年
- ⑫朴 貞任『京都朝鮮学校襲撃事件』法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年
- ⑬藤岡美恵子『第1章 植民地主義の克服と「多文化共生」論』中野憲志編『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007年
- ⑭宮里護佐丸『差別主義と民族主義の清算』深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界——わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』2018年、昭和堂

【参考書】

- ①岩崎稔他『継続する植民地主義——ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005年
- ②植木哲也『植民学の記憶——アイヌ差別と学問の責任』緑風出版、2015年
- ③岡和田晃／マーク・ウィンチェスター『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社、2015年
- ④エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラルイズム』岩波書店、1996年
- ⑤小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001年
- ⑥塩原良和『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義——オーストラリアン・マルチカルチュラルイズムの変容』三元社、2005年
- ⑦塩原良和『隠された多文化主義——オーストラリアにおける国民統合の逆説』日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年
- ⑧永原陽子編『「植民地責任」論——脱植民地化の比較史』青木書店、2009年
- ⑨西川長夫『〈新〉植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、2006年
- ⑩ガッサン・ハージ（保莉実・塩原良和訳）『ホワイト・ネイション——ネオ・ナショナリズム批判』平凡社、2003年
- ⑪バンセル、N.ほか『植民地共和国フランス』岩波書店、2011年

- ⑫樋口直人『日本型排外主義——在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会、2014年
- ⑬ミシェル・ヴィヴィオラ『レイシズムの変貌：グローバル化がまねいた社会の人種化、文化の断片化』明石書店、2007年
- ⑭ジョージ・M.フレドリクソン『人種主義の歴史』みすず書房、2009年
- ⑮前田朗『ヘイト・クライム』三一書房労働組合、2010年
- ⑯松島泰勝『琉球 奪われた骨——遺骨に刻まれた植民地主義』岩波書店、2018年
- ⑰アルベール・メンミ『人種差別』法政大学出版局、1996年
- ⑱テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』みすず書房、2000年

【成績評価の方法と基準】

春学期の少なくとも前半がオンラインでの開講となったこととともない、成績評価の方法と基準も若干変更する。
 ・平常点 60%（毎回の要約・質問の提出、ディスカッションへの参加）、期末レポート 40%。
 ・期末レポートは、授業で取り上げる理論や概念の理解度を中心に評価する。
 ・字数：6000字から10,000字
 ・提出日：第13回
 ★外出制限が続いてレポート作成に必要な図書、資料へのアクセスが大幅に制限される事態（図書館の休館など）が続く場合は、期末レポートを実施しない。その場合、オンラインで期末試験を実施する。具体的な実施方法は授業内で通知する。
 ・通常授業に戻った場合：
 - 発表については、指定テキストの内容の報告だけでなく、討論のための論点の提示を求める。
 - 討論への参加については、内容の理解に加え、討論の進行を助け、他の参加を促すような積極的な疑問の提示、意見表明を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

専門知識がないと理解が難しい文献がいくつかあったことから、文献の見直しを行い、受講生がより深く学べるような文献を選定した。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際人権論（マイノリティ、先住民族の権利）、NGO論、植民地主義と平和
 <研究テーマ>人種主義と植民地主義
 <主要研究業績>『脱「国際協力」——開発と平和構築を超えて』（新評論、2011年）、「資源開発への異議申し立てと先住民族の自己決定権」（東日本部落解放研究所発行『明日を拓く』第80号、2009年）、「植民地主義の克服と「多文化共生」論」（『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007年）

【Outline and objectives】

The guarantee of human rights has been considered an issue of universal importance in the modern world. More importantly, socially marginalized groups of people have used human rights to restore their human dignity, contributing to the development of the international human rights systems. However, the ideas and systems of human rights which were born along with the development of the modern nation-state system now face serious challenges: one is that they are insufficient in, or in fundamental contradictions with, the protection of human dignity of groups of people who have been excluded or exploited in that system. One factor behind it is the continuation of colonialism. Because of this, the human rights protection systems are now being reconsidered from the perspective of colonialism. In this course, the participants will learn how the human rights protection systems after WWII have developed and what impact they have brought to minority and indigenous groups in Japan. They will consider the challenges posed to the international human rights protection systems using racism and colonialism as key concepts. This course provides the participants with an opportunity to acquire critical thinking abilities on the issues of human rights and the perspective of the marginalized/discriminated against in thinking about how human rights can be respected for all.

FR1500G1 - 407

多文化情報ネットワーク論 A

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

情報科学、特にインターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術は広く深く発展し、情報基盤として様々な分野で必要不可欠なものとなっています。これらが、もともとどのような理由で設計された技術なのか、それが時代とともにどのように変わって来たのかを学び、インターネットの社会基盤としての役割や問題を討議します。

【到達目標】

この科目の到達目標は、コンピュータネットワークの仕組みの大枠を理解し、自分の身の回りの情報がどのように仮想空間を流通しているかということの理解を深めることです。知識を蓄積するだけでなく、自身のネットワークおよび関連情報技術の利用や社会性について論理的に考え討議することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

多文化情報ネットワーク論 A では、コンピュータネットワークの設計と基本的な仕組みを理解することにより、ネットワーク上での情報流通や形式を学びます。また、関連技術がどのように使われることを想定して設計され淘汰されてきたかを学び、普段利用している情報サービスが技術的にどの程度安全性を確保されているものか、どの程度リスクがあるものかを、学生自身の使い方に鑑みながら確認していきます。

なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更します。

→ 追記：春学期の少なくとも前半はオンラインでの開講となる。それにともなう各回の授業計画の変更については、学習支援システムでその都度提示する。本授業の開始日は 4 月 24 日（とし、この日までに具体的なオンライン授業の方法などを、学習支援システムで提示する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|-----------------------------|---|
| 第 1 回 | 講義概要の説明 | この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。 |
| 第 2 回 | 身近な情報ネットワーク技術 | 普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。 |
| 第 3 回 | コンピュータが情報を 2 進数で扱う理由、情報理論基礎 | 情報科学の基礎として、2 進数の復習とネットワーク技術で使われる主なアルゴリズムを学ぶ。 |
| 第 4 回 | 情報ネットワークとインターネット | コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。 |
| 第 5 回 | インターネットの歴史、OSI 参照モデル | インターネットの開発の理由や歴史、OSI 参照モデルを学ぶ。 |
| 第 6 回 | インターネット関連技術の動向（1） | インターネットアーキテクチャの内、物理層およびデータリンク層の仕組みを学ぶ。 |
| 第 7 回 | インターネット関連技術の動向（2） | インターネットアーキテクチャの内、ネットワーク層の仕組みを学ぶ。 |
| 第 8 回 | 情報科学技術と仕事（1） | 情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象（利益、問題点）を仕事の観点から論じる。 |
| 第 9 回 | 情報科学技術と仕事（2） | 前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。 |
| 第 10 回 | 情報科学技術と安全性（1） | 情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象（利益、問題点）を個人または組織に対するセキュリティの観点から論じる。 |
| 第 11 回 | 情報科学技術と安全性（2） | 前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。 |
| 第 12 回 | 個人情報とプライバシー | 保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものかを学び、議論する。 |
| 第 13 回 | 情報セキュリティとネットワークセキュリティ | 主な情報セキュリティ技術を学び、それがインターネットにどのように利用されているかを学ぶ。 |
| 第 14 回 | 授業のまとめ | 授業での議論を振り返り、まとめる。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要になります。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

レポート（30%）、平常点（20%）、最終レポート（50%）で総合的に評価します。

コンピュータネットワークの仕組みの概略と現在のインターネットの利用形態に関連する技術への理解度をレポートで評価し、それに対する授業中の議論を出席および授業参加として評価します。

【学生の意見等からの気づき】

履修者の理解度に合わせて学習進度や項目を柔軟に変更する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> インターネット上の情報流通に関する研究
<研究テーマ> 主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題
<主要研究業績>

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline and objectives】

We will grasp the mechanism and the design philosophy of the internet roughly and discuss its role in real society.

FRI500G1 - 408

多文化情報ネットワーク論B

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術の研究背景とその時代で最先端だったシステム設計を学ぶことで情報ネットワークの仕組みを大まかに掴み、今後のインターネットや他情報科学技術の使われ方について議論します。

【到達目標】

この科目では、コンピュータネットワークの仕組みの概略を理解し、現在利用されているインターネットの利用形態に関連する技術を知ると同時に、今後の通信技術の展望を考えることを目標としています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この科目の到達目標は、現在深く広く普及しているインターネットを始めとする情報ネットワークについて、その仕組みの概略と開発背景を掴むことである。その上で、情報ネットワーク技術が社会通信基盤として利用されていることに鑑み、実空間情報が仮想空間上をデジタルデータとして流通することの利便性とリスクを検討し、議論する。

全体を通して、教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指し、問題意識の整理と解決のための意見交換をしていく。

なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------------------|--|
| 第1回 | 講義概要の説明 | この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。 |
| 第2回 | 身近な情報ネットワーク技術 | 普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。 |
| 第3回 | インターネットの歴史 | インターネットの開発の理由や歴史、コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。 |
| 第4回 | プロトコルとレイヤ（OSI 参照モデル） | OSI 参照モデル、および現状のインターネットアーキテクチャと主なプロトコルを学ぶ。 |
| 第5回 | 経路制御アルゴリズム | ネットワーク層で使われる主な経路制御アルゴリズムを学ぶ。 |
| 第6回 | IP アドレスと名前解決 | インターネットプロトコル（IP）の役割と名前解決の仕組みを学ぶ。 |
| 第7回 | 無線技術と移動体通信 | 無線通信技術の種類と変遷を学び、移動体通信技術について学ぶ。 |
| 第8回 | クラウドコンピューティング | クラウドコンピューティングの仕組みを学び、利益と弊害を議論する。 |
| 第9回 | インターネットの社会性 | インターネットが共通通信基盤として社会的に普及したことによる利益と弊害を議論する。 |
| 第10回 | 日本の通信技術戦略 | 日本が進めてきた通信技術戦略の一部を紹介し、その効果について議論する。 |
| 第11回 | 個人情報とプライバシー | 保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものを学び、議論する。 |
| 第12回 | ネットワーク技術の国際標準化 | 情報技術の普及戦略の一角を担う国際標準化について学ぶ。 |
| 第13回 | 知的財産とインターネット | 知的財産権の一つである著作権を学び、国境を越えて利用されるインターネット上での振る舞いを考える。 |
| 第14回 | 情報ネットワークの抱える問題、授業のまとめ | 情報ネットワークの将来性と問題について考える。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要になります。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

レポートまたは小テスト（30%）、平常点（20%）、最終レポート（50%）で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>インターネット上の情報流通に関する研究
<研究テーマ> 主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題

<主要研究業績>
"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline and objectives】

We will grasp the mechanism of information communication technology roughly and discuss how future information technology is used in real society.

OTR500G1 - 501

国際文化研究日本語論文演習 A

浅利 文子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を拡充し、専門分野の修士論文を書くための基礎力を身につける。

【到達目標】

- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章の論旨を正確に読み取ることができる。
- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約できる。
- ・与えられたテーマで 800 ～ 1200 字程度の小論文を書くことができる。
- ・自分の修士論文についてレジュメを作成し、定められた時間で口頭発表できる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて、日本語で自分の感想や意見を述べ、他の意見を良く理解して、議論することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

第1回の授業では、全受講生のスピーチと作文により、日本語レベルを確認します。第2回では、自己紹介と修士論文のテーマについて作文し、日本語の文章力と研究テーマ等を確認します。第3回から第8回は、学術的・専門的な日本語の文章を課題文として配布し、正確に音読できるよう確認した後、指示された字数で要約文を書く練習をします。提出された各人の要約文は、すべて添削して次回の授業で返却します。その後、課題文のテーマについて、全員が感想や意見を出し合い討議します。以上の要約練習により、文章の論理的展開の筋道を読み取ることから、論文の論理的構成の重要性を学びます。第9回から第12回は、小論文を書く練習をします。400字から始め、1200字程度の小論文を書くことを目標に練習しつつ、論理展開や段落構成の基礎を学びます。提出された小論文は、すべて添削して次回の授業で返却します。第13回と第14回は、必要に応じて、7月の概要発表会の準備をします。レジュメの書き方を学び、口頭発表の練習をします。学習内容・方法や難易度は、受講する学生の日本語の水準や希望等に合わせて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------------------|---|
| 第1回 | オリエンテーション 自己紹介スピーチ・作文 | 授業の目的と方針、学び方の説明 受講者の日本語レベル確認、受講者の希望確認 |
| 第2回 | 自己紹介と修士論文の テーマについて作文する | 前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答 受講生の修士論文のテーマを作文によって確認 |
| 第3回 | 課題文① | 【演習1】前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①の音読確認、要約文の書き方を講義、要約文を書き提出 |
| 第4回 | 課題文② | 【演習2】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①について討議、課題文②音読確認、要約文を書き提出 |
| 第5回 | 課題文③ | 【演習3】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文②について討議、課題文③音読確認、要約文を書き提出 |
| 第6回 | 課題文④ | 【演習4】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文③について討議、課題文④音読確認、要約文を書き提出 |
| 第7回 | 課題文⑤ | 【演習5】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文④について討議、課題文⑤音読確認、要約文を書き提出 |
| 第8回 | 課題文⑤、まとめ | 【演習6】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文⑤について討議、要約文を書くことで何が学べたか自己評価した後、感想や考えを出し合いまとめる。 |
| 第9回 | 小論文を書く① | 【演習7】小論文のテーマ設定・論理展開・段落構成等について講義、次回の小論文テーマ指示 |
| 第10回 | 小論文を書く② | 【演習8】小論文を書き提出 |

第11回 小論文を書く③

【演習9】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、次回の小論文テーマ指示

第12回 小論文を書く④

【演習10】小論文を書き提出

第13回 小論文を書く⑤、まとめ
概要発表会のレジュメ作成準備

【演習11】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、概要発表会のレジュメの書き方について講義

第14回 概要発表会の口頭発表練習

【演習12】レジュメ提出、概要発表会の口頭発表練習、感想・意見交換

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
 - ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認すること。
 - ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。
- 本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）
提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の文章を書く機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

秋学期の国際文化研究日本語論文演習Bを継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学
<研究テーマ>村上春樹ほか
<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

【Outline and objectives】

The foreign students that Japanese is not mother tongue read Japanese logical sentences and practice writing it to extend ability to write the master's thesis of own specialized field.

国際文化研究日本語論文演習B

浅利 文子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、専門分野の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を向上させ、専門分野の修士論文を書くための基礎力を拡充する。

【到達目標】

・専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約し、口頭で発表できる。
・自分の修士論文のテーマに関して、4000字程度の小論文を書くことができる。
・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて議論できる。（発言者ひとりひとりの意見を正確に聴き取り、テーマの方向性に沿った論理的な意見を述べたり問題点を指摘したりして、テーマを深化し発展させることができる）

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

第1回の授業で、各受講生は自分の研究テーマについてスピーチします。第2回の授業では、全員が自分の研究テーマについてまとめた作文を提出し、添削を受けた後、音読発表します。第3回から第7回までは、各受講生が自分の研究テーマに沿った書籍や文献から一定の長さの日本語の文章を抜粋して全員に配布し、その要約を書いて発表し、全員でその内容や研究テーマとの関連性について感想・意見を出し合います。第8回から第13回は、各自の研究テーマに沿った小論文を書きます。1200字程度から書き始め、第13回では、4000字程度の小論文を完成させます。第14回は、完成した4000字の小論文を口頭発表し、相互評価をします。提出された要約文・小論文は、すべて添削して返却します。学習内容・方法や速度・難易度は、受講生の水準に合わせて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-------------------------|--|
| 第1回 | オリエンテーション・研究テーマについてスピーチ | 演習の目的と方針の説明、受講者の日本語レベル、研究テーマ、受講者の希望確認 |
| 第2回 | 作文「私の研究テーマ」 | 【演習1】作文後、添削された作文を各人が音読して発表し、添削内容について質疑応答 |
| 第3回 | 課題文① | 【演習2】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文①について討議 |
| 第4回 | 課題文② | 【演習3】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文②について討議 |
| 第5回 | 課題文③ | 【演習4】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文③について討議 |
| 第6回 | 課題文④ | 【演習5】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文④について討議 |
| 第7回 | 課題文⑤ | 【演習6】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文⑤について討議 |
| 第8回 | 小論文を書く① | 【演習7】小論文を書く際のテーマ設定・論理展開・段落設定等について講義 |
| 第9回 | 小論文を書く② | 【演習8】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換 |
| 第10回 | 小論文を書く③ | 【演習9】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換 |
| 第11回 | 小論文を書く④ | 【演習10】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換 |
| 第12回 | 小論文を書く⑤ | 【演習11】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換 |
| 第13回 | 小論文を書く⑥ | 【演習12】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換 |
| 第14回 | 小論文を書く⑦（まとめ） | 【演習13】4000字の小論文を口頭発表・相互評価 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
- ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認し、正確に音読できるよう練習すること。
- ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）
提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の論理的文章を書く機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

各自、パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

春学期の国際文化研究日本語論文演習Aからの継続履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学

<研究テーマ>村上春樹ほか

<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

【Outline and objectives】

The foreign students that Japanese is not mother tongue read Japanese logical sentences and practice writing it to extend ability to write the master's thesis of own specialized field.

OTR500G1 - 505

国際文化研究日本語論文演習C

浅利 文子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語で修士論文を書き出す準備を整え、実際に執筆しながら論文の書き方や日本語表現について学ぶ。

【到達目標】

- ・修士論文完成までのスケジュール（概要発表会・中間発表会等）を確認する。
- ・従来の修士論文の体裁（構成・分量・注の付け方・図表の入れ方・参考資料の掲載方法・文体・印字体等）を確認する。
- ・修士論文の主題と副題を決める。
- ・修士論文の構成（章立て・各章の分量・各章の内容と節の数やその分量）を決める。
- ・目次を書く。
- ・概要発表会の準備をする（レジメの準備、口頭発表・質疑応答の練習等）
- ・修士論文の序論、あるいは第1章を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

最初の7回で修士論文を書き始めるための具体的な準備を行い、その後、実際に修士論文を書き始めます。準備の段階では、まず、今まで国際文化研究科に提出された修士論文の体裁を確認し、各自のテーマに従って修士論文の構想を具体的にまとめます。次に、7月末の概要発表会、10月末の中間発表会のレジメの書き方を学び、口頭発表・質疑応答の練習をすることによって、修士論文の構想・テーマを具体化し深化させます。第8回からは、各自修士論文の序論あるいは第1章を書き始めます。段落と段落、節と節がそれぞれ文章としてのまとまりを持ち、論理的構成の下で互いに関連し合うことを学ぶことを目標として、一つの章を完成させることを目標とします。受講生の希望と実態に合わせて内容を変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------------|---|
| 第1回 | オリエンテーション | ・授業の目的と内容・方針の説明 ・各受講生の修士論文のテーマと進捗状況の確認 |
| 第2回 | 従来の修士論文の体裁を確認する | ・構成、分量、注の付け方、図表の入れ方、参考資料の掲載方法、文体、印字体等 |
| 第3回 | 概要発表会のレジメの書き方 | ・概要発表会のレジメの書き方について講義 |
| 第4回 | レジメ提出・添削 | ・レジメを書く ・各人のレジメを添削 ・質疑応答 |
| 第5回 | レジメに基づいて口頭発表の練習① | ・声の出し方、話し方 ・時間の使い方 ・質疑応答の対応の仕方 |
| 第6回 | レジメに基づいて口頭発表の練習② | ・概要発表会、中間発表会、学会発表等のスケジュールを確認 |
| 第7回 | 修士論文の主題・副題、論文構成を確認する | ・主題と副題、章立てと分量配分を書いて提出 |
| 第8回 | 修士論文を書く① | ・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 |
| 第9回 | 修士論文を書く② | ・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答 |
| 第10回 | 修士論文を書く③ | ・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答 |
| 第11回 | 修士論文を書く④ | ・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答 |
| 第12回 | 修士論文を書く⑤ | ・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答 |
| 第13回 | 修士論文を書く⑥ | ・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答 |
| 第14回 | 修士論文を書く⑦ | ・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の内容については、指導教官から適切な指導を受けてください。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）
提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

修士論文を書き始める準備をするとともに、論文を書き進めながら、論文の論理的構成や日本語表現について、逐次アドバイスを受けることができます。修士論文執筆のペースメーカーとして利用できます。

【学生が準備すべき機器他】

各自パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

国際文化研究日本語論文演習A・B受講者が継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学

<研究テーマ>村上春樹ほか

<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

【Outline and objectives】

The foreign students that Japanese is not mother tongue learn how to prepare and begin to write a master's thesis in Japanese.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A**各専任指導教員****【授業の概要と目的（何を学ぶか）】**

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|--|
| 1 | イントロダクション | 修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言 |
| 2 | 文献サーベイと調査① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 3 | 文献サーベイと調査② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 4 | 文献サーベイと調査③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 5 | 文献サーベイと調査④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 6 | 文献サーベイと調査⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 7 | 文献サーベイと調査⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 8 | 文献サーベイと調査⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 9 | 文献サーベイと調査⑧ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 10 | 文献サーベイと調査⑨ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 11 | 研究成果のまとめ① | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 12 | 研究成果のまとめ② | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 13 | 研究発表準備① | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |
| 14 | 研究発表準備② | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B**各専任指導教員****【Outline and objectives】**

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|---|
| 1 | 研究成果の共有 | 履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有 |
| 2 | 研究計画の検討 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討 |
| 3 | 論文執筆指導① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 4 | 論文執筆指導② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 5 | 研究発表準備① | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 6 | 研究発表準備② | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 7 | 研究発表の振り返り | 履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論 |
| 8 | 論文執筆指導③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 9 | 論文執筆指導④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 10 | 論文執筆指導⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 11 | 論文執筆指導⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 12 | 論文執筆指導⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論 |
| 13 | 論文執筆指導⑧ | 履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導 |
| 14 | 口頭発表指導 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

栗飯原 文子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|--|
| 1 | イントロダクション | 修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言 |
| 2 | 文献サーベイと調査① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 3 | 文献サーベイと調査② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 4 | 文献サーベイと調査③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 5 | 文献サーベイと調査④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 6 | 文献サーベイと調査⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 7 | 文献サーベイと調査⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 8 | 文献サーベイと調査⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 9 | 文献サーベイと調査⑧ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 10 | 文献サーベイと調査⑨ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 11 | 研究成果のまとめ① | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 12 | 研究成果のまとめ② | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 13 | 研究発表準備① | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |
| 14 | 研究発表準備② | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/ the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

栗飯原 文子

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|---|
| 1 | 研究成果の共有 | 履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有 |
| 2 | 研究計画の検討 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討 |
| 3 | 論文執筆指導① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 4 | 論文執筆指導② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 5 | 研究発表準備① | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 6 | 研究発表準備② | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 7 | 研究発表の振り返り | 履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論 |
| 8 | 論文執筆指導③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 9 | 論文執筆指導④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 10 | 論文執筆指導⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 11 | 論文執筆指導⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 12 | 論文執筆指導⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論 |
| 13 | 論文執筆指導⑧ | 履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導 |
| 14 | 口頭発表指導 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

修士論文演習 A

廣松 勲

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業開始日は、4月23日（木）となります。】

修士課程1年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程2年次の必修科目である国際文化共同研究Aと連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|--|
| 1 | イントロダクション | 修士1年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言 |
| 2 | 文献サーベイと調査① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 3 | 文献サーベイと調査② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 4 | 文献サーベイと調査③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 5 | 文献サーベイと調査④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 6 | 文献サーベイと調査⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 7 | 文献サーベイと調査⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 8 | 文献サーベイと調査⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 9 | 文献サーベイと調査⑧ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 10 | 文献サーベイと調査⑨ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 11 | 研究成果のまとめ① | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 12 | 研究成果のまとめ② | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 13 | 研究発表準備① | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |
| 14 | 研究発表準備② | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

廣松 勲

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|---|
| 1 | 研究成果の共有 | 履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有 |
| 2 | 研究計画の検討 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討 |
| 3 | 論文執筆指導① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 4 | 論文執筆指導② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 5 | 研究発表準備① | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 6 | 研究発表準備② | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 7 | 研究発表の振り返り | 履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論 |
| 8 | 論文執筆指導③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 9 | 論文執筆指導④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 10 | 論文執筆指導⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 11 | 論文執筆指導⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 12 | 論文執筆指導⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論 |
| 13 | 論文執筆指導⑧ | 履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導 |
| 14 | 口頭発表指導 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|--|
| 1 | イントロダクション | 修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言 |
| 2 | 文献サーベイと調査① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 3 | 文献サーベイと調査② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 4 | 文献サーベイと調査③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 5 | 文献サーベイと調査④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 6 | 文献サーベイと調査⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 7 | 文献サーベイと調査⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 8 | 文献サーベイと調査⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 9 | 文献サーベイと調査⑧ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 10 | 文献サーベイと調査⑨ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 11 | 研究成果のまとめ① | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 12 | 研究成果のまとめ② | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 13 | 研究発表準備① | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |
| 14 | 研究発表準備② | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/ the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

岩川 ありさ

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|---|
| 1 | 研究成果の共有 | 履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有 |
| 2 | 研究計画の検討 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討 |
| 3 | 論文執筆指導① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 4 | 論文執筆指導② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 5 | 研究発表準備① | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 6 | 研究発表準備② | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 7 | 研究発表の振り返り | 履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論 |
| 8 | 論文執筆指導③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 9 | 論文執筆指導④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 10 | 論文執筆指導⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 11 | 論文執筆指導⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 12 | 論文執筆指導⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論 |
| 13 | 論文執筆指導⑧ | 履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導 |
| 14 | 口頭発表指導 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

佐藤 千登勢

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|--|
| 1 | イントロダクション | 修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言 |
| 2 | 文献サーベイと調査① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 3 | 文献サーベイと調査② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 4 | 文献サーベイと調査③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 5 | 文献サーベイと調査④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 6 | 文献サーベイと調査⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 7 | 文献サーベイと調査⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 8 | 文献サーベイと調査⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 9 | 文献サーベイと調査⑧ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 10 | 文献サーベイと調査⑨ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 11 | 研究成果のまとめ① | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 12 | 研究成果のまとめ② | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 13 | 研究発表準備① | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |
| 14 | 研究発表準備② | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

佐藤 千登勢

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|---|
| 1 | 研究成果の共有 | 履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有 |
| 2 | 研究計画の検討 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討 |
| 3 | 論文執筆指導① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 4 | 論文執筆指導② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 5 | 研究発表準備① | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 6 | 研究発表準備② | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 7 | 研究発表の振り返り | 履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論 |
| 8 | 論文執筆指導③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 9 | 論文執筆指導④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 10 | 論文執筆指導⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 11 | 論文執筆指導⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 12 | 論文執筆指導⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論 |
| 13 | 論文執筆指導⑧ | 履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導 |
| 14 | 口頭発表指導 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

曾 士才

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|--|
| 1 | イントロダクション | 修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言 |
| 2 | 文献サーベイと調査① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 3 | 文献サーベイと調査② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 4 | 文献サーベイと調査③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 5 | 文献サーベイと調査④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 6 | 文献サーベイと調査⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 7 | 文献サーベイと調査⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 8 | 文献サーベイと調査⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 9 | 文献サーベイと調査⑧ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 10 | 文献サーベイと調査⑨ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 11 | 研究成果のまとめ① | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 12 | 研究成果のまとめ② | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 13 | 研究発表準備① | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |
| 14 | 研究発表準備② | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/ the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

曾 士才

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|---|
| 1 | 研究成果の共有 | 履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有 |
| 2 | 研究計画の検討 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討 |
| 3 | 論文執筆指導① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 4 | 論文執筆指導② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 5 | 研究発表準備① | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 6 | 研究発表準備② | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 7 | 研究発表の振り返り | 履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論 |
| 8 | 論文執筆指導③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 9 | 論文執筆指導④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 10 | 論文執筆指導⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 11 | 論文執筆指導⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 12 | 論文執筆指導⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論 |
| 13 | 論文執筆指導⑧ | 履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導 |
| 14 | 口頭発表指導 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

高柳 俊男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|--|
| 1 | イントロダクション | 修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言 |
| 2 | 文献サーベイと調査① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 3 | 文献サーベイと調査② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 4 | 文献サーベイと調査③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 5 | 文献サーベイと調査④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 6 | 文献サーベイと調査⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 7 | 文献サーベイと調査⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 8 | 文献サーベイと調査⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 9 | 文献サーベイと調査⑧ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 10 | 文献サーベイと調査⑨ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 11 | 研究成果のまとめ① | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 12 | 研究成果のまとめ② | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 13 | 研究発表準備① | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |
| 14 | 研究発表準備② | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うこと。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/ the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

高柳 俊男

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|---|
| 1 | 研究成果の共有 | 履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有 |
| 2 | 研究計画の検討 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討 |
| 3 | 論文執筆指導① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 4 | 論文執筆指導② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 5 | 研究発表準備① | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 6 | 研究発表準備② | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 7 | 研究発表の振り返り | 履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論 |
| 8 | 論文執筆指導③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 9 | 論文執筆指導④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 10 | 論文執筆指導⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 11 | 論文執筆指導⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 12 | 論文執筆指導⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論 |
| 13 | 論文執筆指導⑧ | 履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導 |
| 14 | 口頭発表指導 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うこと。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

佐々木 一恵

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|--|
| 1 | イントロダクション | 修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言 |
| 2 | 文献サーベイと調査① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 3 | 文献サーベイと調査② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 4 | 文献サーベイと調査③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 5 | 文献サーベイと調査④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 6 | 文献サーベイと調査⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 7 | 文献サーベイと調査⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 8 | 文献サーベイと調査⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 9 | 文献サーベイと調査⑧ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 10 | 文献サーベイと調査⑨ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論 |
| 11 | 研究成果のまとめ① | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 12 | 研究成果のまとめ② | 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う |
| 13 | 研究発表準備① | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |
| 14 | 研究発表準備② | 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

佐々木 一恵

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|---|
| 1 | 研究成果の共有 | 履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有 |
| 2 | 研究計画の検討 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討 |
| 3 | 論文執筆指導① | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 4 | 論文執筆指導② | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 5 | 研究発表準備① | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 6 | 研究発表準備② | 履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論 |
| 7 | 研究発表の振り返り | 履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論 |
| 8 | 論文執筆指導③ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 9 | 論文執筆指導④ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論 |
| 10 | 論文執筆指導⑤ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 11 | 論文執筆指導⑥ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論 |
| 12 | 論文執筆指導⑦ | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論 |
| 13 | 論文執筆指導⑧ | 履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導 |
| 14 | 口頭発表指導 | 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR700G1 - 001

博士論文演習 I A

各専任指導教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化する。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進める。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につける。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------------|--|
| 1 回 | これまでの研究の振り返り | 修士論文など今までの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する |
| 2 回 | 研究テーマの確認 | 第1回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練し確認する |
| 3 回 | 文献サーベイ① | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 4 回 | 文献サーベイ② | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 5 回 | 文献サーベイ③ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 6 回 | 文献サーベイ④ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 7 回 | 文献サーベイ⑤ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 8 回 | 文献サーベイ⑥ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 9 回 | 研究報告① | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める |
| 10 回 | 研究報告② | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める |
| 11 回 | 研究報告③ | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める |
| 12 回 | 研究報告④ | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める |
| 13 回 | 研究計画作成① | 博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する |
| 14 回 | 研究計画作成② | 博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し、自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究の進展、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of ideas for the dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make a dissertation chapter into a publishable journal article.

OTR700G1 - 002

博士論文演習 I B

各専任指導教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化する。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進める。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につける。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------|--------------------------------------|
| 1 回 | 研究の振り返りと計画の見直し | 春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す |
| 2 回 | 文献サーベイ① | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 3 回 | 文献サーベイ② | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 4 回 | 文献サーベイ③ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 5 回 | 研究発表① | 博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討 |
| 6 回 | 研究発表② | 博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討 |
| 7 回 | 研究発表③ | 博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返り |
| 8 回 | 文献サーベイ④ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 9 回 | 文献サーベイ⑤ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 10 回 | 論文執筆指導① | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 11 回 | 論文執筆指導② | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 12 回 | 論文執筆指導③ | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 13 回 | 論文執筆指導④ | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 14 回 | まとめ | 秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し、自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究の進展、研究発表、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of ideas for the dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make a dissertation chapter into a publishable journal article.

OTR700G1 - 003

博士論文演習Ⅱ A

各専任指導教員

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another chapter into a journal article for publication.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施する。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本日の投稿論文の執筆を進める。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する2本日の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたなどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的に学生が調査の進捗を報告する。それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|--------------|---|
| 1回 | 研究の振り返り | 1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する |
| 2回 | 調査報告① | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 3回 | 調査報告② | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 4回 | 調査報告③ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 5回 | 調査報告④ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 6回 | 調査報告⑤ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 7回 | 調査報告⑥ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 8回 | 調査報告⑦ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 9回 | 調査報告⑧ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 10回 | 調査報告⑨ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 11回 | 調査報告⑩ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 12回 | 調査報告⑪ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 13回 | 研究まとめ | 博士ワークショップの発表準備等を通して春学期の研究成果をまとめる |
| 14回 | 秋学期及び夏季休暇の計画 | 春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し夏季休暇中の調査内容を明確化する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究（調査）の進展、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

OTR700G1 - 004

博士論文演習Ⅱ B

各専任指導教員

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another chapter into a journal article for publication.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施する。調査結果をふまえて 2 本目の投稿論文の執筆や学会発表の準備を進める。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる 2 本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的に学生が調査の進捗を報告する。それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行う。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いてゆく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------|---|
| 1 回 | 研究の振り返りと計画の見直し | 春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す |
| 2 回 | 調査報告① | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 3 回 | 調査報告② | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 4 回 | 調査報告③ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 5 回 | 研究発表① | 博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討 |
| 6 回 | 研究発表② | 博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討 |
| 7 回 | 研究発表③ | 博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返り |
| 8 回 | 調査報告④ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 9 回 | 調査報告⑤ | 研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する |
| 10 回 | 論文執筆指導① | 文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 11 回 | 論文執筆指導② | 文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 12 回 | 論文執筆指導③ | 文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 13 回 | 論文執筆指導④ | 文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 14 回 | まとめ | 2 年間の研究成果のまとめ、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究（調査）の進展、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

OTR700G1 - 005

博士論文演習Ⅲ A

各専任指導教員

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆する。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し議論する。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------|---|
| 1 回 | 執筆・調査計画の立案 | 2-3 月の研究成果の報告。追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画 |
| 2 回 | 博士論文執筆指導① | 博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する |
| 3 回 | 博士論文執筆指導② | 博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する |
| 4 回 | 博士論文執筆指導③ | 博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する |
| 5 回 | 予備論文（草稿）の発表 | 博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる |
| 6 回 | 予備論文（草稿）への指導 | 予備論文をもとにした議論と指導 |
| 7 回 | 予備審査結果を踏まえた検討 | 予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する |
| 8 回 | 追加調査報告・文献サーベイ① | 予備審査での各指導教員の指摘をふまえ追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する |
| 9 回 | 追加調査報告・文献サーベイ② | 予備審査での各指導教員の指摘をふまえ追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する |
| 10 回 | 追加調査報告・文献サーベイ③ | 予備審査での各指導教員の指摘をふまえ追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する |
| 11 回 | 口頭発表準備① | 追加調査や文献サーベイの成果をふまえ博士論文全体の構成と流れを議論する |
| 12 回 | 口頭発表準備② | 追加調査や文献サーベイの成果をふまえ博士論文全体の構成と流れを議論する |
| 13 回 | 口頭発表準備③ | 博士ワークショップの口頭発表準備等を通して博士論文の全体構成を固める |
| 14 回 | 博士論文の骨子の確定 | 博士ワークショップでのコメントを踏まえて、博士論文全体の構成と内容を見直し本格的な執筆を行なう |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 3 年目は博士論文執筆に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって文献を読んで補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、博士論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

OTR700G1 - 006

博士論文演習Ⅲ B

各専任指導教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆する。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会場で発表する。審査委員からの助言を受けて必要な改善を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------|--|
| 1 回 | 博士論文執筆指導 | 博士学位請求論文完成に向けて最終的な指導を行う |
| 2 回 | 投稿論文・学会発表準備① | 提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする |
| 3 回 | 投稿論文・学会発表準備② | 完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする |
| 4 回 | 投稿論文・学会発表準備③ | 完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする |
| 5 回 | 口頭発表指導① | 博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討 |
| 6 回 | 口頭発表指導② | 博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討 |
| 7 回 | 口頭発表指導③ | 博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討 |
| 8 回 | 学位請求論文の要旨指導① | 公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導 |
| 9 回 | 学位請求論文の要旨指導② | 公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導 |
| 10 回 | 学位請求論文公開審査会発表指導① | 公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習 |
| 11 回 | 学位請求論文公開審査会発表指導② | 公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習 |
| 12 回 | 学位請求論文の修正① | 審査小委員会のコメントを受けて必要であれば学位請求論文を修正する |
| 13 回 | 学位請求論文の修正② | 審査小委員会のコメントを受けて必要であれば学位請求論文を修正する。また、商業出版に向けた論文の修正を行う |
| 14 回 | 学位請求論文の修正③ | 審査小委員会のコメントを受けて必要であれば学位請求論文を修正する。また、商業出版に向けた論文の修正を行う |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 3 年目は博士論文執筆に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって文献を読んで補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、博士論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

OTR700G1 - 001

博士論文演習Ⅰ A

佐々木 一恵

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化する。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進める。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につける。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------------|--|
| 1 回 | これまでの研究の振り返り | 修士論文など今までの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する |
| 2 回 | 研究テーマの確認 | 第 1 回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練し確認する |
| 3 回 | 文献サーベイ① | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 4 回 | 文献サーベイ② | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 5 回 | 文献サーベイ③ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 6 回 | 文献サーベイ④ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 7 回 | 文献サーベイ⑤ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 8 回 | 文献サーベイ⑥ | 博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する |
| 9 回 | 研究報告① | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める |
| 10 回 | 研究報告② | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める |
| 11 回 | 研究報告③ | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める |
| 12 回 | 研究報告④ | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める |
| 13 回 | 研究計画作成① | 博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する |
| 14 回 | 研究計画作成② | 博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し、自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究の進展、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of ideas for the dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make a dissertation chapter into a publishable journal article.

OTR700G1 - 002

博士論文演習 I B

佐々木 一恵

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化する。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進める。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につける。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------|--------------------------------------|
| 1 回 | 研究の振り返りと計画の見直し | 春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す |
| 2 回 | 文献サーベイ① | 博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する |
| 3 回 | 文献サーベイ② | 博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する |
| 4 回 | 文献サーベイ③ | 博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する |
| 5 回 | 研究発表① | 博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討 |
| 6 回 | 研究発表② | 博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討 |
| 7 回 | 研究発表③ | 博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返り |
| 8 回 | 文献サーベイ④ | 博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する |
| 9 回 | 文献サーベイ⑤ | 博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する |
| 10 回 | 論文執筆指導① | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 11 回 | 論文執筆指導② | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 12 回 | 論文執筆指導③ | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 13 回 | 論文執筆指導④ | 修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論 |
| 14 回 | まとめ | 秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し、自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究の進展、研究発表、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of ideas for the dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make a dissertation chapter into a publishable journal article.

OTR700G1 - 101

博士ワークショップ I A

興石 哲哉、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 修士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げ、構想発表会で発表する。論文プロポーザルには、(1) 研究テーマ、(2) 研究の目的、(3) 研究の方法、(4) 研究計画、(5) 期待される成果、(6) 文献リスト、等が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、構想発表会において論文プロポーザルを発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-------|-----------|---|
| 第 1 回 | 討論者① | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 2 回 | 討論者② | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 3 回 | 討論者③ | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 4 回 | 討論者④ | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 5 回 | 討論者⑤ | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 6 回 | 研究発表とコメント | 7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 A の発表に対するコメントは授業内に行くと同時にレポートとして提出する。構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20 点
「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②論文プロポーザル：80 点
・論文プロポーザル 40 点・発表：40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・国際文化共同研究 A のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談する。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

OTR700G1 - 102

博士ワークショップ I B

興石 哲哉、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げ、中間発表会で発表する。論文プロポーザルには、(1) 研究テーマ、(2) 研究の目的、(3) 研究の方法、(4) 研究計画、(5) 期待される成果、(6) 文献リスト、等が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-------|-----------------------|--|
| 第 1 回 | 討論者① | 国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 2 回 | 討論者② | 国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 3 回 | 討論者③ | 国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 4 回 | 討論者④ | 国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 5 回 | 討論者⑤ | 国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 6 回 | 研究発表とコメント ～ 第 14 回 | 11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 B の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20 点

「国際文化共同研究 B」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②論文プロポーザル：80 点

・論文プロポーザル 40 点・発表：40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・国際文化共同研究 B のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは秋学期の初めに同授業の担当者も含めて相談する。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

OTR700G1 - 103

博士ワークショップⅡ A

興石 哲哉、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それを踏まえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、構想発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

| 回 | テーマ | 内容 |
|-------------------|-----------|---|
| 第 1 回 | 討論者① | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 2 回 | 討論者② | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 3 回 | 討論者③ | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 4 回 | 討論者④ | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 5 回 | 討論者⑤ | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 6 回 ～ 第 14 回 | 研究発表とコメント | 7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 A の発表に対するコメントは授業内に行くと同時にレポートとして提出する。構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20 点
「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②先行研究分析報告：80 点
・先行研究分析報告 40 点・発表：40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・国際文化共同研究 A のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談する。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

OTR700G1 - 104

博士ワークショップⅡB

興石 哲哉、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それを踏まえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|--------------------|---|
| 第1回 | 討論者① | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第2回 | 討論者② | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第3回 | 討論者③ | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第4回 | 討論者④ | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第5回 | 討論者⑤ | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第6回 | 研究発表とコメント ～第14回 | 11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究Bの発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20点
「国際文化共同研究B」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②先行研究分析報告：80点
・先行研究分析報告 40点・発表：40点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・国際文化共同研究Bのうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは秋学期の初めに同授業の担当者も含めて相談する。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

OTR700G1 - 105

博士ワークショップⅢ A

興石 哲哉、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。構想発表会においては、完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え、博士論文の構成（章立て）を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、構想発表会においてこれまでの研究成果や博士論文の草稿を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------------------|-----------|--|
| 第 1 回 | 討論者① | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 2 回 | 討論者② | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 3 回 | 討論者③ | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 4 回 | 討論者④ | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 5 回 | 討論者⑤ | 国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う |
| 第 6 回 ～第 14 回 | 研究発表とコメント | 7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 A の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）： 20 点

「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会での他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②博士論文を構成する章： 80 点

・博士論文を構成する章 40 点 ・発表： 40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・国際文化共同研究 A のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談する。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

OTR700G1 - 106

博士ワークショップⅢB

興石 哲哉、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。発表会においては、完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え、博士論文の構成（章立て）を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、中間発表会において博士論文の要旨を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|-----------|--|
| 第1回 | 討論者① | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第2回 | 討論者② | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第3回 | 討論者③ | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第4回 | 討論者④ | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第5回 | 討論者⑤ | 国際文化共同研究Bの討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う |
| 第6回 | 研究発表とコメント | 11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究Bの発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20点

「国際文化共同研究B」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②博士論文を構成する章：80点

・博士論文を構成する章40点・発表：40点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・国際文化共同研究Bのうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは秋学期の初めに同授業の担当者も含めて相談する。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

[Outline and objectives]

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

